

平成 18 年度 修士論文

親と教師は自閉症児の問題行動をどのようにとらえているか

京都教育大学大学院 教育学研究科

障害児教育専攻 障害児教育専修

学籍番号 055031

氏 名 中本絵梨

指導教員 田中道治

目次

序論	1
第Ⅰ章 自閉症児の問題行動	2
第1節 問題の所在	3
第2節 自閉症児の発達と教育	4
第3節 自閉症児の問題行動についての先行研究の成果と課題	5
第4節 本研究の目的	6
本論	7
第Ⅱ章 予備調査	8
第1節 目的	9
第2節 方法	9
1. 調査対象	9
2. 調査内容	9
3. 調査手続き	9
4. 結果の処理法	9
第3節 結果及び考察	10
第Ⅲ章 調査研究	17
第1節 目的	18
第2節 方法	18
1. 調査対象	18
2. 調査内容	18
3. 調査手続き	19
4. 結果の処理法	19
第3節 結果	19
1. アンケート回収率	19
2. 自閉症児の問題行動についての親の意識の分析	20
3. 自閉症児の問題行動についての教師の意識の分析	34
4. 親と教師の意識の比較分析	48
5. 自由記述式アンケート結果（項目Ⅱ～Ⅴ）の分析	68
第4節 考察	86

1. 自閉症児の問題行動についての親の意識	86
2. 自閉症児の問題行動についての教師の意識	90
3. 親と教師の意識の比較分析	94
第Ⅳ章 結論と今後の課題	101
第 1 節 結論	102
第 2 節 今後の課題	103
文献	105
謝辞	107
資料	

序論

第 I 章

自閉症児の問題行動

第1節 問題の所在

1943年に、自閉症に関する最初の論文がアメリカの児童精神科医レオ・カナーによって報告されて以来、自閉症に関する多くの研究が行われている。関戸(2004)は、教育現場における自閉症児の実践研究をしており、「巡回指導及び小・中学校と盲・聾・養護学校を含めた関係機関とが連携・協力することの有効性」を示唆している。篠崎(2005)は、福祉現場における自閉症者の実践研究をしており、自閉症や強度行動障害を示す人への、人との関わりや集団の大切さを意識した取り組みの重要性を述べている。

自閉症児者を対象とした研究だけではなく、自閉症児に関わる人々の研究も行われている。種子田ら(2004)は、自閉症を含む障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係についての意識調査をしており、「障害児の『感情統制困難』因子に含まれる問題行動が母親の障害児あるいは育児そのものに対する否定的な感情をより直接的に高めることが特定化できた」とし、その上で「母親や家族構成員とも共有しながら、育児に伴う母親のストレス問題を解決していく方策が考案されなければならない」と述べている。竹林ら(2004)は、軽度発達障害児の問題行動に関する教師の意識調査をしており、「高機能自閉症を理解していない教師は、理解している教師より、その問題を激しくする要因を家族や地域の変化に見ようとする」と述べている。

しかしこれまでの自閉症児に関わる人々の研究の多くは、教師は教師で、親は親でと、別々に調査研究を行っている。竹林ら(2004)は、「研修経験のある教師の方が、無い教師よりも、軽度発達障害の子どもが問題を激しくする要因として、教員自身の力量の問題を重視していた」ことを明らかにした上で、「具体的事例を提示しながら、その理解と支援の仕方をともに検討する研修会を経験することが、教員自身の力量向上の必要性を自覚させる」ことを示唆している。

しかしながら、このように担任教師が、自閉症に関する知識や経験を様々な専門家から教わったとしても、それは自閉症児一般に関するものであり、その子自身に関する知識ではない。白石(2005b)によると、「教育などにおいては、まず一人ひとりの多様性、個別性を配慮することが、その実践を成り立たせるための基盤になる」とある。一人ひとりの多様性や個別性を配慮するためには、親からの情報共有等が必要となってくるのではないだろうか。また、対象児の支援を必要としているところと、その支援方法が親と教師で食い違っている場合は、家庭と学校の連携に影響

を与え、自閉症児の発達にも影響を与えると考える。今後の自閉症児教育をさらに向上させるためには、両者の直接的な比較が必要ではないだろうか。

第2節 自閉症児の発達と教育

自閉症の原因について、1960年代までは脳の失敗が原因であるという心因論もあったが、現在では脳の機能障害が原因であるということが、生物学的な証拠によって示されつつある(昇地ら, 2004)。

ではその脳の機能障害によってどのような特徴が見られるのだろうか。自閉症の特徴や判断基準は、どのようなものだろうか。村田(1987)によると、レオ・カナーは、「11症例の、精神発達の様相がきわめて特異的で、他の疾患や症候群には見出すことのできない一定の特徴をもっている一群の子ども達の行動特徴を、①周囲からの極端な孤立②言葉の発達の特有なゆがみ③強迫的な同一性保持の傾向④ある物事への極端な興味・感心の巧みさ⑤潜在的な知能、の5つの面から浮き彫りにしようとした」と述べている。カナーが発表した、これら5つの特徴は、修正が加えられながらも、現在のDSM-IVやICD-10の自閉症児の定義に踏襲されている(氏田ら, 2006)。

現在では、さらに自閉症の特徴が細分化され、発達段階に応じた特徴や状態像が示されている。昇地ら(2004)は、自閉症児の特徴を発達年代別にまとめ、生後一年前後から顕著になる多動傾向、始語の遅れ、独特な一人遊び、クレーン現象、ジョイントアテンションの失敗等、自閉症児の乳幼児期の特徴を述べている。児童期・思春期においては、多動は加齢に伴い徐々におさまってくる場合が多い一方で、こだわりなど自閉症らしい行動はかなりはっきりしてくる。友人関係を作ることは難しく、会話は一方的でワンパターンになりがちである。思春期以降は、心理的混乱を招きやすく、状態が悪くなるケースも多いと述べている。

これらの特徴は、学校教育においても大きな影響を与える。その中でも、自閉症児の問題行動について Evans & Meyer (1985)は、「問題行動を示す人は、その行動によって、教育的な活動や社会的な活動への参加、あるいは仕事に従事することに対して、大きな障害がもたらされていることが多い」と述べている。

第3節 自閉症児の問題行動についての先行研究の成果と課題

問題行動は、「行動問題」「行動障害」とも呼ばれる(本郷・長崎, 2006)。この他にも、細渕(2005)は『「行動障害」』『強度行動障害』の代わりに、『問題行動』『不適応行動』『逸脱行動』等といった言葉が用いられることもある。つまり、『行動障害』は、いわゆる障害のない人から見て“問題となる行動”とすることができる」と述べており、その種類は多種多様である。

田中ら(1997)は、自閉症児に指摘される問題行動の例として、「多動」「寡動」「異食」「常同行動」「同一性保持(こだわり)」「パニック」「かんしゃく」「破壊的行動」「他傷行為」「自傷行為」を挙げている。中でも、自傷・他傷・破壊行為については、「自分や他の人の身体を叩く、噛む、蹴るという行為、家具やガラスを破壊するという行為など、周囲にとっても本人にとっても危険で許容し得ないような行動障害」とある(日本自閉症協会京都府支部, 1997)。その他にも、別府(1999)は、「挑発行為」を挙げ、「他の人の怒りを引き出すことを明らかな目的として執拗になされる行為」と定義づけている。

これらの問題行動を軽減・消失することを目的とした、さまざまな研究が行われている。安達・古河(2003)は、母親の問題対処能力の向上が、対象児の問題行動軽減につながることを示唆している。細渕(2005)は、問題行動を軽減・消失するためには、「特定のアプローチを定期的にあてはめるのではなく、この個別性と関わり手との関係性を大切にしながら、本人の生活環境の中で問題とされる行動の意味ひとつひとつを解きほぐしていくことが重要である。」と述べている。つまり、何故そういう行動をとるのかを、大人の視点ではなく、子ども自身の内面をくぐって理解しようとする姿勢が重要なのである(田中ら, 1997)。

問題行動の本質的な原因を追究する治療教育の一つに、1963年にエリック・ショプラーらが開発した TEACCH プログラムがある(氏田ら, 2006)。TEACCH プログラムは、「自閉症児・者を幼児期から成人に至るまで人生全般にわたって援助し、自閉症児・者の社会的自立を目指すものであり、基本原則は、自閉症の障害特性に合わせて環境を構造化し、職業スキル・対人スキルなどを学習させる」治療教育法とされている(昇地ら, 2004)。

中でも問題行動に関しては、「自閉症児者の行動に現れているのは氷山の一角であり、水面下にはその何倍もの理由があり重要な意味を持っている」とし、その水面

下にある本質的な原因を解消することを推奨している(自閉症マニュアル編集研究委員会, 2005)。

当然のことながら、対象児に合った TEACCH プログラムを行うためには、対象児の状態像を知ることが不可欠である。このことは、TEACCH プログラムに限らず、自閉症児を支援する全ての場面において共通することではないだろうか。

白石(2005a)は、「対象児の状態像を知るためには、障害と行動とを媒介する、社会的要因や人間関係の質との相互作用においてとらえる認識が必要になる」と述べている。さらに「常に生活をともにしてきた家族の認識や実感のなかに傾聴すべき内実がある」とも述べている。家族(特に保護者である親)と教師の、対象児の状態像に関する情報共有が、いかに重要であるかが窺える。親と教師の問題行動に対する意識の違いは、家庭と学校の連携に影響を与えるのではないだろうか。また、自閉症児の問題行動に影響を与えるのではないだろうか。このことについて、田中ら(1997)は、「問題行動は教育実践や養育の困難を惹起させるとともに、その評価と対応をめぐる、親と教師、教師同士の間で相互不信の要因ともなる」と述べている。一貫性のある支援をするためにも、両者の直接的な比較分析が必要である。

第4節 本研究の目的

本研究では、自閉症児の親や自閉症児を受け持つ教師が、彼らの問題行動をどのように捉えているのか、問題行動に直面したときに彼らにどのような接し方をしているのかを明らかにすると共に、調査結果から、親と教師における問題行動の捉え方の違い、自閉症児の問題行動に対し親と教師がどのような形でどのように連携していけば良いのかを分析することを目的とする。

本論

第Ⅱ章

予備調査

第Ⅱ章 予備調査

第1節 目的

本調査における質問紙調査項目を作成するにあたり、実際の声を参考にし、研究の目的に適した質問を選出することを目的とする。

第2節 方法

1. 調査対象

自閉症児者の親5名、自閉症児を受け持つ、もしくは受け持ったことのある現職教員5名、総計10名である。

2. 調査内容

自由記述式質問紙を用いて行う。自閉症児の親と、自閉症児を受け持つもしくは受け持ったことのある教師各々に、自閉症児の気になる問題行動について、以下の内容を含む項目についての回答を求める。

項目の内訳は、項目Ⅰにおいて、自閉症児の問題行動の内、「A.自傷行動」「B.他傷行動」「C.破壊行動」「D.挑発行動」「E.その他の行動」の5つについて、「気になる」行動を答えてもらう。次に、A～Eについて、各問題行動が①出現する直前の自閉症児の行動の変化についての自閉症児のエピソードや回答者の意識、②出現する原因に関する回答者の意識、③出現した時の回答者の対処法、及び④対処後の自閉症児の行動のエピソードや回答者の意識、について答えてもらう。項目Ⅱ～Ⅴでは、各々「日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み」「自閉症児の問題行動を軽減させるために大切だと思うこと」「自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じることはあるか。また、それはどのような時か」「自閉症児の問題行動について学校及び家庭で行ってほしいこと（但し、親には「学校」、教師には「家庭」）」について答えてもらう。

なお、質問項目については田中ら（2003）の『問題行動の「4つの箱」』を参考にした。

3. 調査手続き

質問紙（自由記述式）について無記名による回答。回収方法は、郵送法、留め置き法で行う。調査期間は2006年5月～6月である。

4. 結果の処理法

2名によるカテゴリー分析を行う。

第3節 結果及び考察

1. それぞれの問題行動への意識

「自閉症児の気になる自傷行動」についてのカテゴリー分けの結果を表1に記し

表1 自閉症児の気になる自傷行動

	親(件)	教師(件)	計(件)
頭・顔を自分の手で傷つける	4	2	
手を噛む	2	2	
他の物に身体の一部をぶつける	2	3	
その他	2	0	2

た。①頭、顔を自分の手で傷つける②手を噛む③他の物に身体の一部をぶつける④その他、の4つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「頭を床に叩きつける」「両手で顔を引っ掻いて傷つける」「髪の毛や睫毛を抜く」などで、親4件教師2件、計6件であった。

②は「手の甲を噛む」「人差し指を噛む」などで、親2件教師2件、計4件であった。③は「わざと転ぶ」「頭を床に叩きつける」などで、親2件教師3件、計5件であった。④は、親2件教師0件2件であった。

「自閉症児の気になる他傷行動」についてのカテゴリー分けの結果を表2に記し

表2 自閉症児の気になる他傷行動

	親(件)	教師(件)	計(件)
対家族	2	0	2
対友達	1	3	
対他人	2	5	
対教師	0	3	

た。①対家族②対友達③対他人④対教師、の4つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「母親の腕をつねる」などで、親2件教師0件、計2件であった。②は、「友達を押す」などで、親1件教師3件、計4件であった。

③は、「電車の中で、前に立っている人の顔を叩いたりする」「自分よりも小さい子どもを両手で押したりする」などで、親2件教師5件、計7件であった。④は、「先生の手を噛む」などで、親0件教師3件、計3件であった。

表3 自閉症児の気になる破壊行動

	親(件)	教師(件)	計(件)
壊すことを目的とする	3	4	
壊すことを目的としない(環境を工夫することによって防げる)	1	3	

「自閉症児の気になる破壊行動」についてのカテゴリー分けの結果を表3に記した。①壊すことを目的とする②壊すことを目的としない、の2つに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は「食器を割る」「紙をビリビリに破る」などで、親3件教師4件、計7件であった。②は、「玩具を投げる」「ロッカーを蹴る」などで、親1件教師3件、計7件であった。

表4 自閉症児の気になる挑発行動

	親(件)	教師(件)	計(件)
対人	2	1	3
対物	2	0	2
対自分	0	2	2

「自閉症児の気になる挑発行動」についてのカテゴリー分けの結果を表4に記した。①対人②対物③対自分、の3つに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「しつこく腕をつねる」「唾を吐きかける」などで、親2件教師1件、計3件であった。②は、「床に油やマヨネーズを撒く」「冷蔵庫を開けたり閉めたりする」などで、親2件教師0件、計2件であった。③は、「廊下に寝転ぶ」「性器を見せる」などで、親0件教師2件、計2件であった。

表5 自傷・他傷・破壊・挑発行動以外で自閉症児の気になる問題行動

	親(件)	教師(件)	計(件)
異食	0	2	2
偏食	1	1	2
多動	3	2	5
その他	6	2	8

「自傷・他傷・破壊・挑発行動以外で自閉症児の気になる問題行動」についてのカテゴリー分けの結果を表5に記した。①異食②偏食③多動④その他、の4つに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。①は、「画びょうなどを飲み込む」など

で、親0件教師2件、計2件であった。②は、「給食を食べない」などで親1件教師1件、計2件であった。③は、「急に走り出す」「激しい多動」などで、親3件教師2件、計5件であった。④は、親6件教師2件、計8件であった。

2. 問題行動が出現する直前の自閉症児の行動の変化についてのエピソードや意識

「各問題行動が出現する直前の自閉症児の行動の変化についてのエピソードや意識」についてのカテゴリー分けの結果を表6に記した。①イライラするⅠ（自分自身のこと）②イライラするⅡ（他人が関係している）③注目されたい④不安定⑤

自分の世界に入る⑥他の問題行動が見られる⑦その他、の7つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

表6 各行動が出現する直前の自閉症児の行動の変化についてのエピソードや意識

	親(件)	教師(件)	計(件)
イライラする Ⅰ(自分自身の こと)	3	1	4
イライラする Ⅱ(他人が関 係している)	4	6	10
注目されたい	3	3	
不安定	3	3	
自分の世界 に入る	1	6	
他の問題行 動が見られる	0	2	2
その他	0	3	3

①は、「朝、無理やり起こされた」などで、親3件教師1件、計4件であった。②は、「友達が前屈みの姿勢の時」「団体で遊んでいる時」などで、親4件教師6件、計10件であった。③は、「構って欲しそうにしている」などで、親3件教師3件、計6件であった。④は、「不安そうにしている」「初めて行く場所や初めてすることで不安定になる」などで、親3件教師3件、計6件であった。⑤は、「自分の世界に入る」「目つきがおかし

い」などで、親1件教師6件、計7件であった。⑥は、「すでにパニックになっており、自傷行動がみられる」などで、親0件教師3件、計3件であった。

表7 各問題行動が出現する原因に関する意識

	親(件)	教師(件)	計(件)
欲求不満(自 分自身のこ と)	6	9	15
欲求不満(体 調不良)	3	3	
欲求不満(他 者が関係して いるⅠコミュ ニケーション の問題)	5	7	12
欲求不満(他 者が関係して いるⅡ感情 の問題)	1	4	
注目されたい	3	4	7
フラッシュ バック	2	0	
その他	2	0	2

3. 問題行動が出現する原因に関する意識

「各問題行動が出現する原因に関する意識」についてのカテゴリー分けの結果を表7に記した。①欲求不満(自分自身のこと)②欲求不満(体調不良)③欲求不満(他者が関係しているⅠコミュニケーションの問題)④欲求不満(他者が関係しているⅡ感情の問題)⑤注目されたい⑥フラッシュバック⑦その他、の7つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「自分がしたいことを止められた」「自分の思い通りにいかない」などで、

親 6 件教師 9 件、計 15 件であった。②は、「体調不良」「寝不足」などで、親 3 件教師 3 件、計 6 件であった。③は、「自分の欲求が相手に伝わらない」などで、親 5 件教師 7 件、計 12 件であった。④は、「馬鹿ににされたと感じた」「プライドが傷つけられた」などで、親 1 件教師 4 件、計 5 件であった。⑤は、「構ってもらいたいのに構ってもらえない」などで、親 3 件教師 4 件、計 7 件であった。⑥は、「思い出し怒り」などで、親 2 件教師 0 件、計 2 件であった。

表8 各問題行動が出現した時の対処法

	親(人)	教師(人)	計(人)
叱る	4	3	7
無視する	3	8	
強制的にやめさせる	4	4	
スキンシップによって落ち着かせる	2	0	2
見通しを立てる	6	10	

4. 問題行動が出現した時の対処法

「各問題行動が出現した時の対処法」についてのカテゴリー分けの結果を表 8 に記した。①叱る②無視する③強制的にやめさせる④スキンシップによって落ち着かせる⑤見通しを立てる、の 5 つのカテゴリーに分類した。

カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「強く叱る」などで、親 4 件教師 3 件、計 7 件であった。②は、「反応しないようにする」「無視する」などで、親 3 件教師 8 件、計 11 件であった。③は、「身体を持ってでも止める」「引き離す」などで、親 4 件教師 4 件、計 8 件であった。④は、「抱きしめる」などで、親 2 件教師 0 件、計 2 件であった。⑤は、「カードを使い、言葉をかける」などで、親 6 件教師 10 件、計 16 件であった。

表9 各問題行動が出現した時の対処後の自閉症児の行動のエピソードや意識

	親(件)	教師(件)	計(件)
やめる(仕方なく)	2	7	
やめる(納得した上で)	8	5	
やめる→再発	4	3	
続ける	1	3	4
他の問題行動を始める	1	0	1

5. 対処後の自閉症児の行動のエピソードや意識

「各問題行動が出現した時の対処後の自閉症児の行動のエピソードや意識」についてのカテゴリー分けの結果を表 9 に記した。①やめる(仕方なく)②やめる(納得した上で)③やめる→再発④続ける⑤他の行動を始めるの 5 つのカテゴリ

リーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「思い切り怒ったら、おとなしく穏やかになる」などで、親 2 件教師 7 件、計 9 件であった。②は、「見通しが立ち、安心する」などで、親 8 件教師 5 件、計 13 件であった。③は、「声かけで一時的にストップする」などで、親 4 件教師 3 件、計 7 件であった。④は、「無視して執拗に続ける」などで、親 1 件教師 3 件、計 4 件であった。⑤は、「逆にふざけ笑いをしだす」などで、親 1 件教師 0 件、計 1 件であった。

6. 日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し感じている悩み

表10 日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し感じている悩み

	親(件)	教師(件)	計(件)
社会的悩み	2	2	4
個人的悩み	3	1	4
学校的悩み	1	5	6

分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「本人が楽しそうにすることが常識的に許せるような行動でなかったりする」などで、親 2 件教師 2 件、計 4 件であった。②は、「言葉が通じないことでお互いイライラしてしまう」などで、親 3 件教師 1 件、計 4 件であった。③は、「教員がさまざまな子ども達のことを理解するという状態になっていない」などで、親 1 件教師 5 件、計 6 件であった。

7. 自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと

表11 自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと

	親(件)	教師(件)	計(件)
情動的	1	1	2
環境的	2	3	5
因果的	1	3	4
教育的	1	2	3

「日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し感じている悩み」についてのカテゴリー分けの結果を表 10 に記した。①社会的悩み②個人的悩み③学校的悩み、3つのカテゴリーに

「自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと」についてのカテゴリー分けの結果を表 11 に記した。①情動的②環境的③因果的④教育的、の4つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「大いに愛情を表現する」「構ってあげる」などで、親 1 件教師 1 件、計

2 件であった。②は、「環境の構造化」などで、親 2 件教師 3 件、計 5 件であった。③は、「(問題行動の) 本質的な原因を考える」などで、親 1 件教師 3 件、計 4 件であった。④は、「伝える方法を身につけてもらえるように支援する」などで、親 1 件教師 2 件、計 3 件であった。

8. 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード

「自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード」についてのカテゴリー分けの結果を表 12 に記した。①自我の発達②問題行動の軽減、の 2 つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

表12 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード

	親(件)	教師(件)	計(件)
自我の発達	1	2	3
問題行動の軽減	4	3	7

①は、「異性への関心が色々な面で出てくる」「人に注目されることを目的とする行動が多くなった」などで、親 1 件教師 2 件、計 3 件であった。②は、「自分の要求を正しいコミュニケーションで出せるようになった時」などで、親 4 件教師 3 件、計 7 件であった。

9. 自閉症児の問題行動について、学校（家庭）で行ってほしいと思うこと

表13 自閉症児の問題行動について、学校(家庭)で行ってほしいと思うこと

	親(件)	教師(件)	計(件)
情報提供	1	2	3
家庭中心	2	0	2
学校中心	0	2	2
家庭・学校対等	4	2	6

「自閉症児の問題行動について、学校（家庭）で行ってほしいと思うこと」についてのカテゴリー分けの結果を表 13 に記した。①情報提供②家庭中心③学校中心④家庭・学校対等、の 4 つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

①は、「情報交換が大切である」などで、親 1 件教師 2 件、計 3 件であった。②は、「学校で『静かに座って待つ』という指導を重点的にしてほしい」などで、親 2 件教師 0 件、計 2 件であった。③は、「学校と一緒にやってほしいが、何年間もの家庭での習慣を変えることはなかなか難しい」などで、親 0 件教師 2 件、

計 2 件であった。④は、「保護者と教員はお互いパートナーとして児に接するので、学校と家庭で役割分担をしたり、同じ取り組みをする」などで、親 4 件教師 2 件、計 6 件であった。

この結果を踏まえ、質問項目Ⅰ「A.自傷行動」「B.他傷行動」「C.破壊行動」の上位 3 位のカテゴリー及び「その他」を本調査用アンケートに使用する。「D.挑発行動」については、別府(1999)を参考に質問項目を設定する。「E その他の行動」については、回答に統一性がないため、削除した。項目Ⅱ～Ⅴについては、自由記述式を採用し、親と教師の意識をより詳しく調査する。

第Ⅲ章

調査研究

第1節 目的

自閉症児の親や自閉症児を受け持つ教師が、彼らの問題行動をどのように捉えているのか、問題行動に直面したときに彼らにどのような接し方をしているのかを明らかにすると共に、調査結果から、親と教師における問題行動の捉え方の違い、自閉症児の問題行動に対し親と教師がどのような形でどのように連携しているのかを明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

1. 調査対象

A府及びB府内の小中学校及び養護学校小・中学部生の自閉症児（6歳～15歳）の親120人、及びA府及びB府内の自閉症児を受け持つもしくは受け持ったことのある、小中学校及び盲・聾・養護学校小・中学部の教師120人、総計240人を対象とする。

回答者の平均年齢は、親が40.3歳（SD=4.08）教師が44.7歳（SD=10.43）である。

親における、回答の対象となる自閉症の子どもの平均年齢は、9.36歳（SD=2.72）である。尚、教師には親の子育て経験年数との比較のことを考え、対象児の年齢ではなく、教職経験年数を回答してもらった。教師の教職経験平均年数は、20.3年（SD=10.82）、障害児教育経験平均年数は、13.51年（SD=9.19）、自閉症児の教育経験平均年数は、7.21年（SD=6.21）である。

対象児の障害の程度（但し、軽度=1、中度=2、重度=3、最重度=4と評価した）の平均は、親が2.60（SD=0.87）、教師が2.55（SD=0.91）である。

2. 調査内容

調査は質問紙を用いて行う。親と教師に、それぞれ1名の自閉症児についての問題行動に関する質問に回答してもらう。質問項目は92項目である。

項目の内訳は、項目[I]については、自閉症児の気になる問題行動の内、「A.自傷行動」「B.他傷行動」「C.破壊行動」「D.挑発行動」の4つについての意識に関する各22項目、計88項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4段階評定で回答を求める。その中で、

I-[A-1]～[A-4]（同様に[B-1～4]、[C-1～4]、[D-1～4]）においては、各問題行動の中で、対象児の気になる行動についての意識を回答してもらう。また、I-[(A-1)-1]～[(A-4)-4]（同様に[(B-1)-1～(B-4)-4]、[(C-1)-1～(C-4)-4] [(D-1)-1～(D-4)-4]）においては、各問題行動の①起こる直前の行動、②行動の原因、③行動への対応、④対応後の行動の4つの視点において、自閉症児への意識を回答してもらう。

項目Ⅱ～Ⅴにおいて、各々「日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み」「自閉症児の問題行動を軽減させるために大切だと思うこと」「自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じることはあるか。また、それはどのような時か」「自閉症児の問題行動について学校及び家庭で行ってほしいこと（但し、親には「学校」、教師には「家庭」）」について答えてもらう。

3. 調査手続き

質問紙【選択式（4段階評定）、自由記述式】について無記名による回答。回収方法は、郵送法、留め置き法で行う。調査期間は、2006年8月～10月である。

4. 結果の処理法

(1)項目Ⅰ

①親と教師各々の結果の各項目において、意識の高低の偏りを見るため、各項目4群の人数を χ^2 検定する。なお、回答者率が49.0%以下のデータについては、統計処理を行わないものとする。

②親と教師の結果の%数値同士を、各項目ごとに χ^2 検定し、意識の差を比較分析する。

(2)項目Ⅱ～Ⅴ項目Ⅱについては、2名によるカテゴリー分析を行い、一致率を算出した後、 χ^2 検定を用いて分析する。

第3節 結果

1. アンケート回収率

親のアンケート回収率は120人中89人で74.17%。有効回答者数は84人で、70.0%であった。

教師のアンケート回収率は120人中69人で57.50%。有効回答者数は60人で、50.0%であった。

2. 自閉症児の問題行動についての親の意識の分析

(1) 自傷行動に関する意識

① 気になる自傷行動の頻度

「気になる自傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表 14 に記した。「I - [A-1] 頭、顔を自分の手で傷つける」に関して、「あてはまらない」が 43.9% で最も高かった。以下順に、「あまりあてはまらない」が 23.2%、「ややあてはまる」が 20.7%、「あてはまる」が 12.2% であった。4 群の人数を χ^2 検定した結果、有意差がみられた ($\chi^2 = 17.805$, $df=3$, $p<.01$)。同様に、「I - [A-2] 手を噛む」「I - [A-3] 他の物に身体の一部をぶつける」「I - [A-4] その他」、において、いずれも「あてはまらない」が最も高く、有意差がみられた (各々、 $\chi^2 = 55.651$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2 = 24.422$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2 = 8.600$, $df=3$, $p<.05$)。

表 14 自閉症児の気になる自傷行動の頻度に関する人数及び割合 (親)

自傷行動 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I - A-1	10	12.2%	17	20.7%	19	23.2%	36	43.9%	82	17.805	$p<.01$
I - A-2	14	16.9%	9	10.8%	10	12.0%	50	60.2%	83	55.651	$p<.01$
I - A-3	14	16.9%	12	14.5%	17	20.5%	40	48.2%	83	24.422	$p<.01$
I - A-4	7	15.6%	12	26.7%	7	15.6%	19	42.2%	45	8.600	$p<.05$

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注) : I - A-1…頭、顔を自分の手で傷つける

I - A-2…手を噛む

I - A-3…他の物に身体の一部をぶつける

I - A-4…その他

② 自傷行動が起こる直前の行動についての意識

「自傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 15 に記した。「I - [(A-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまる」が 39.7% で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2 = 12.359$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-1)-2] 注目されたい」「I - [(A-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「あてはまらない」が各々 47.4%、44.2% で最も高く、いずれも有意差がみられた (各々、 $\chi^2 = 25.487$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2 = 19.364$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-1)-3] 不安になる」については有意差はみられなかった。「I - [(A-1)-5] その他」に関しては、5%水準で有意差がみられた ($\chi^2 = 11.000$, $df=3$, $p<.05$)。

表15 自傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

＜直前＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-1)-1	31	39.7%	22	28.2%	14	17.9%	11	14.1%	78	12.359	p<.01
I-(A-1)-2	8	10.3%	12	15.4%	21	26.9%	37	47.4%	78	25.487	p<.01
I-(A-1)-3	19	24.4%	24	30.8%	18	23.1%	17	21.8%	78	1.487	N.S
I-(A-1)-4	7	9.1%	17	22.1%	19	24.7%	34	44.2%	77	19.364	p<.01
I-(A-1)-5	15	36.6%	6	14.6%	4	9.8%	16	39.0%	41	11.000	p<.05

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(A-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(A-1)-2…注目されたい

I-(A-1)-3…不安になる

I-(A-1)-4…自分の世界に入る

I-(A-1)-5…その他

③ 自傷行動が起こる原因についての意識

表16 自閉症児の自傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(親)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-2)-1	6	8.0%	17	22.7%	20	26.7%	32	42.7%	75	18.280	p<.01
I-(A-2)-2	27	36.0%	21	28.0%	13	17.3%	14	18.7%	75	6.867	N.S
I-(A-2)-3	30	40.0%	27	36.0%	8	10.7%	10	13.3%	75	20.627	p<.01
I-(A-2)-4	13	18.1%	22	30.6%	18	25.0%	19	26.4%	72	2.333	N.S
I-(A-2)-5	3	14.3%	4	19.0%	1	4.8%	13	61.9%	21		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(A-2)-1…注目されたい

I-(A-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(A-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(A-2)-4…自分の世界に入る

I-(A-2)-5…その他

「自傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表16に記した。「I-[(A-2)-1] 注目されたい」に関して、「あてはまらない」が42.7%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=18.280$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(A-2)-3] 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまる」が最も高く40.0%、続いて「ややあてはまる」が36.0%で、有意差がみられた($\chi^2=20.627$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(A-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」「I-[(A-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関しては、いずれも有意差がみられなかった。「I-[(A-2)-5] その他」に関しては、に関しては、回答者率が49.0%

以下であるため、統計処理は行わなかった。

④ 自傷行動への対処についての意識

「自傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 17 に記した。
「I - [(A-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「ややあてはまる」が 44.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=20.111$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「あまりあてはまらない」が 39.2%で最も高く有意差がみられた($\chi^2=16.162$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関して、「ややあてはまる」が 46.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=22.632$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、「ややあてはまる」が 44.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=16.162$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(A-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表17 自閉症児の自傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合(親)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I - (A-3)-1	7	9.7%	32	44.4%	12	16.7%	21	29.2%	72	20.111	$p<.01$
I - (A-3)-2	5	6.8%	19	25.7%	29	39.2%	21	28.4%	74	16.162	$p<.01$
I - (A-3)-3	21	27.6%	35	46.1%	8	10.5%	12	15.8%	76	22.632	$p<.01$
I - (A-3)-4	17	23.0%	33	44.6%	11	14.9%	13	17.6%	74	16.162	$p<.01$
I - (A-3)-5	7	25.9%	4	14.8%	3	11.1%	13	48.1%	27		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I - (A-3)-1…無視する(無関心を装う)

I - (A-3)-2…強制的にやめさせようとする

I - (A-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I - (A-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I - (A-3)-5…その他

⑤ 自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 18 に記した。「I - [(A-4)-1] 仕方なく自傷行動をやめる」に関

して、「ややあてはまる」が 40.5%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=14.324$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(A-4)-2] 納得した上で自傷行動をやめる」に関して、「あまりあてはまらない」が 39.2%で最も高く有意差がみられた($\chi^2=10.973$, $P<.05$)。「I・[(A-4)-3] 一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「あまりあてはまらない」が 36.0%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=10.067$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(A-4)-4] その他」に関しては、回答者率が 49.0% 以下であるため、統計処理は行わなかった。

表18 自閉症児の自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-4)-1	7	9.5%	30	40.5%	19	25.7%	18	24.3%	74	14.324	p<.01
I-(A-4)-2	9	12.2%	19	25.7%	29	39.2%	17	23.0%	74	10.973	p<.05
I-(A-4)-3	8	10.7%	19	25.3%	27	36.0%	21	28.0%	75	10.067	p<.05
I-(A-4)-4	3	12.0%	3	12.0%	4	16.0%	15	60.0%	25		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-4)-1…仕方なく自傷行動をやめる

I-(A-4)-2…納得した上で自傷行動をやめる

I-(A-4)-3…一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(A-4)-4…その他

(2)他傷行動に関する意識

①気になる他傷行動の頻度

表19 自閉症児の気になる他傷行動の頻度に関する人数及び割合(親)

他傷行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-B-1	17	20.5%	22	26.5%	16	19.3%	28	33.7%	83	4.373	N.S
I-B-2	4	4.9%	7	8.5%	18	22.0%	53	64.6%	82	74.000	p<.01
I-B-3	15	18.1%	23	27.7%	18	21.7%	27	32.5%	83	4.084	N.S
I-B-4	13	31.7%	7	17.1%	2	4.9%	19	46.3%	41		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-B-1…友達に対して

I-B-2…他人に対して(通行人など)

I-B-3…先生に対して

I-B-4…その他

「気になる他傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表 19 に記した。「I・[B-2] 他人に対して(通行人など)」「I・[B-4] その他」に関して、「あてはまらない」

が 64.6%で最も高く、有意差がみられた(各々、 $\chi^2=74.000$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=15.88$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[B-1]友達に対して」「I-[B-3]他の物に身体の一部をぶつける」に関しては、いずれも有意差がみられなかった。「I-[B-4]その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

②他傷行動が起こる直前の行動についての意識

「他傷行動が起こる直前の行動についての意識」を表 20 に記した。「I-[(B-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまる」が 41.7%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=23.000$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(B-1)-2] 注目されたい」「I-[(B-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「あてはまらない」が各々 50.7%、61.8%で最も高く、いずれも有意差がみられた(各々、 $\chi^2=32.589$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=57.529$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(B-1)-3] 不安になる」については有意差はみられなかった。「I-[(B-1)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表20 他傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

＜直前＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-1)-1	30	41.7%	24	33.3%	3	4.2%	15	20.8%	72	23.000	$p<.01$
I-(B-1)-2	3	4.1%	15	20.5%	18	24.7%	37	50.7%	73	32.589	$p<.01$
I-(B-1)-3	17	23.9%	17	23.9%	19	26.8%	18	25.4%	71	0.155	N.S
I-(B-1)-4	0	0.0%	9	13.2%	17	25.0%	42	61.8%	68	57.529	$p<.01$
I-(B-1)-5	8	32.0%	2	8.0%	3	12.0%	12	48.0%	25		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(B-1)-2…注目されたい

I-(B-1)-3…不安になる

I-(B-1)-4…自分の世界に入る

I-(B-1)-5…その他

③他傷行動が起こる原因についての意識

「他傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 21 に記した。「I-[(B-2)-1] 注目されたい」に関して、「あてはまらない」が 48.0%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=27.880$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(B-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」に関して、「ややあてはまる」が 35.1%で最も高く、有意差が見られた ($\chi^2=9.351$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(B-2)-3] 欲求不満(他者

が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまる」が 44.6%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 35.1%で、有意差がみられた。 $(\chi^2=28.162, df=3, p<.01)$ 。「I - [(B-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関しては、有意差がみられなかった。「I - [(B-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表21 自閉症児の他傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(親)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I -(B-2)-1	7	9.3%	10	13.3%	22	29.3%	36	48.0%	75	27.880	p<.01
I -(B-2)-2	21	28.4%	26	35.1%	8	10.8%	19	25.7%	74	9.351	p<.05
I -(B-2)-3	33	44.6%	26	35.1%	5	6.8%	10	13.5%	74	28.162	p<.01
I -(B-2)-4	20	27.4%	16	21.9%	24	32.9%	13	17.8%	73	3.767	N.S
I -(B-2)-5	8	26.7%	3	10.0%	3	10.0%	16	53.3%	30		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I -(B-2)-1…注目されたい

I -(B-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I -(B-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I -(B-2)-4…自分の世界に入る

I -(B-2)-5…その他

④ 他傷行動への対処についての意識

「他傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 22 に記した。「I - [(B-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が 60.0%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=53.160, df=3, p<.01$)。I - [(B-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」「I - [(B-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、「ややあてはまる」が各々 42.9%、43.4%と最も高く、有意差がみられた(各々、 $\chi^2=18.948, df=3, p<.01$; $\chi^2=21.158, df=3, p<.01$)。「I - [(B-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関しては、有意差がみられなかった。「I - [(B-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表22 自閉症児の他傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合(親)

＜対応＞ 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-3)-1	5	6.7%	8	10.7%	17	22.7%	45	60.0%	75	53.160	p<.01
I-(B-3)-2	21	28.0%	26	34.7%	14	18.7%	14	18.7%	75	5.480	N.S
I-(B-3)-3	22	28.6%	33	42.9%	7	9.1%	15	19.5%	77	18.948	p<.01
I-(B-3)-4	24	31.6%	33	43.4%	9	11.8%	10	13.2%	76	21.158	p<.01
I-(B-3)-5	10	32.3%	2	6.5%	3	9.7%	16	51.6%	31		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(B-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(B-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(B-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(B-3)-5…その他

⑤ 他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

表23 自閉症児の他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

＜対応後＞ 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-4)-1	19	26.0%	22	30.1%	12	16.4%	20	27.4%	73	3.110	N.S
I-(B-4)-2	12	16.4%	23	31.5%	23	31.5%	15	20.5%	73	5.192	N.S
I-(B-4)-3	6	8.2%	21	28.8%	21	28.8%	25	34.2%	73	11.548	p<.01
I-(B-4)-4	3	15.0%	1	5.0%	3	15.0%	13	65.0%	20		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-4)-1…仕方なく他傷行動をやめる

I-(B-4)-2…納得した上で他傷行動をやめる

I-(B-4)-3…一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(B-4)-4…その他

「他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表23に記した。「I-[(B-4)-3] 一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「あてはまらない」が34.2%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=11.548$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(B-4)-1] 仕方なく他傷行動をやめる」「I-[(B-4)-2] 納得した上で他傷行動をやめる」に関しては有意差が見られなかった。「I-[(B-4)-4] その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

(3)破壊行動に関する意識

①気になる破壊行動の頻度

「気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合」を表24に記した。「I-[C-1]壊すことを目的とする」に関して、「あてはまらない」が58.8%と最も高く、有意差がみられた($\chi^2=57.000$, $df=3$, $p<.01$)「I-[C-2]壊すことを目的としない(投げたり落としたりすることで、結果的に壊れることもある)」に関しては有意差がみられなかった。「I-[C-3]その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表24 自閉症児の気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合(親)

破壊行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-C-1	3	3.8%	9	11.3%	21	26.3%	47	58.8%	80	57.000	$p<.01$
I-C-2	25	31.3%	18	22.5%	11	13.8%	26	32.5%	80	7.300	N.S
I-C-3	1	4.2%	3	12.5%	2	8.3%	18	75.0%	24		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-C-1…壊すことを目的とする
I-C-2…壊すことを目的としない
I-C-3…その他

②破壊行動が起こる直前の行動についての意識

表25 破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

<直前>	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-1)-1	21	28.4%	19	25.7%	9	12.2%	25	33.8%	74	7.514	N.S
I-(C-1)-2	6	8.2%	15	20.5%	12	16.4%	40	54.8%	73	36.863	$p<.01$
I-(C-1)-3	6	8.3%	15	20.8%	20	27.8%	31	43.1%	72	18.111	$p<.01$
I-(C-1)-4	2	2.8%	15	21.1%	10	14.1%	44	62.0%	71	56.606	$p<.01$
I-(C-1)-5	4	16.7%	4	16.7%	2	8.3%	14	58.3%	24		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(C-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。
I-(C-1)-2…注目されたい
I-(C-1)-3…不安になる
I-(C-1)-4…自分の世界に入る
I-(C-1)-5…その他

「破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表25に記した。「I-[(C-1)-2] 注目されたい」「I-[(C-1)-3] 不安になる」「I-[(C-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「あてはまらない」が各々54.8%、

43.1%、62.0%で最も高く、いずれも有意差がみられた(各々、 $\chi^2=36.863$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=18.111$, $df=3$, $p<.01$ $\chi^2=56.606$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(C-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関しては、有意がみられなかった。「I-[(C-1)-5] その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

③破壊行動が起こる原因についての意識

「破壊行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表26に記した。「I-[(C-2)-1] 注目されたい」に関して、「あてはまる」が39.7%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=10.890$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(C-2)-3] 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまらない」が41.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=17.137$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(C-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」「I-[(C-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関しては、有意差がみられなかった。「I-[(C-2)-5] その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表26 自閉症児の破壊行動が起こる原因についての意識意識に関する人数及び割合(親)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-2)-1	11	15.1%	20	27.4%	13	17.8%	29	39.7%	73	10.890	p<.05
I-(C-2)-2	23	32.9%	21	30.0%	9	12.9%	17	24.3%	70	6.571	N.S
I-(C-2)-3	30	41.1%	22	30.1%	6	8.2%	15	20.5%	73	17.137	p<.01
I-(C-2)-4	17	24.6%	21	30.4%	13	18.8%	18	26.1%	69	1.899	N.S
I-(C-2)-5	9	34.6%	6	23.1%	1	3.8%	10	38.5%	26		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-2)-1…注目されたい

I-(C-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(C-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(C-2)-4…自分の世界に入る

I-(C-2)-5…その他

④破壊行動への対処についての意識

「破壊行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表27に記した。「I-[(C-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が40.9%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=15.212$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(C-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「ややあてはまる」が37.7%で最も高

く、有意差がみられた ($\chi^2=8.275$, $df=3$, $p<.05$)。I - [(C-3)-3] 見通しをたてる (環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」「I - [(C-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関しては、有意差がみられなかった。[(C-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表27 自閉症児の破壊行動への対処についての意識意識に関する人数及び割合(親)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-3)-1	5	7.6%	15	22.7%	19	28.8%	27	40.9%	66	15.212	p<.01
I-(C-3)-2	14	20.3%	26	37.7%	10	14.5%	19	27.5%	69	8.275	p<.05
I-(C-3)-3	18	26.9%	21	31.3%	12	17.9%	16	23.9%	67	2.552	N.S
I-(C-3)-4	25	36.2%	20	29.0%	10	14.5%	14	20.3%	69	7.580	N.S
I-(C-3)-5	6	20.7%	5	17.2%	3	10.3%	15	51.7%	29		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(C-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(C-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(C-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(C-3)-5…その他

⑤破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

表28 自閉症児の破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識意識に関する人数及び割合(親)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-4)-1	11	16.2%	23	33.8%	13	19.1%	21	30.9%	68	6.118	N.S
I-(C-4)-2	4	5.9%	25	36.8%	17	25.0%	22	32.4%	68	15.176	p<.01
I-(C-4)-3	10	14.9%	16	23.9%	16	23.9%	25	37.3%	67	6.851	N.S
I-(C-4)-4	5	17.9%	1	3.6%	5	17.9%	17	60.7%	28		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-4)-1…仕方なく破壊行動をやめる

I-(C-4)-2…納得した上で破壊行動をやめる

I-(C-4)-3…一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(C-4)-4…その他

「破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 28 に記した。「I - [(C-4)-2] 納得した上で破壊行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が 36.8%で最も高く、続いて「あてはまらない」

が 32.4%で有意差がみられた ($\chi^2=15.176$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-4)-1] 仕方なく破壊行動をやめる」「I・[(C-4)-3] 一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関しては、有意差が見られなかった。「I・[(C-4)-4] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

(4)挑発行動に関する意識

①気になる挑発行動の頻度

「気になる挑発行動の頻度に関する人数及び割合」を表 29 に記した。「I・[D-1] いたずらの行動 (他の人の反応をうかがいながら奇声をあげる・性器を見せる・唾や尿や便で遊ぶ、など)」に関して、「あてはまらない」が 44.9 %で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=22.205$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[D-2]嫌がらせ的行動 (「死ぬ」など嫌がることをわざと言う・しつこく触りにくる・忙しく働いている時にわざと無意味な質問を繰り返す、など)」に関して、「あてはまらない」が 64.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=66.063$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[D-3]意図的な攻撃行動 (他の人の反応をうかがいながら自傷する、人をつねる、物を投げる、物を壊す、髪の毛を引っ張る・叩く、など)」に関して、「あてはまらない」が 46.2%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=20.564$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[D-4]その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表29 自閉症児の気になる挑発行動の頻度意識に関する人数及び割合(親)

挑発行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-D-1	10	12.8%	23	29.5%	10	12.8%	35	44.9%	78	22.205	$p<.01$
I-D-2	8	10.1%	10	12.7%	10	12.7%	51	64.6%	79	66.063	$p<.01$
I-D-3	11	14.1%	19	24.4%	12	15.4%	36	46.2%	78	20.564	$p<.01$
I-D-4	4	15.4%	3	11.5%	1	3.8%	18	69.2%	26		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-D-1…いたずらの行動
I-D-2…嫌がらせ的行動
I-D-3…意図的な攻撃行動
I-D-4…その他

②挑発行動が起こる直前の行動についての意識

「挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 30 に記した。「I・[(D-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまらない」が 39.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=8.042$,

df=3, $p<.05$)。「I・[(D-1)-3] 不安になる」に関して、「あてはまらない」が 41.1%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=13.411$, df=3, $p<.01$)。「I・[(D-1)-4] 自分の世界に入る」に関して、「あまりあてはまらない」が 56.3%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=44.549$, df=3, $p<.01$)。「I・[(D-1)-2] 注目されたい」に関しては、有意差がみられなかった。「I・[(D-1)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表30 挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親)

＜直前＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-1)-1	13	18.3%	15	21.1%	15	21.1%	28	39.4%	71	8.042	p<.05
I-(D-1)-2	18	25.4%	20	28.2%	11	15.5%	22	31.0%	71	3.873	N.S
I-(D-1)-3	9	12.3%	14	19.2%	20	27.4%	30	41.1%	73	13.411	p<.01
I-(D-1)-4	3	4.2%	9	12.7%	40	56.3%	19	26.8%	71	44.549	p<.01
I-(D-1)-5	3	12.0%	1	4.0%	5	20.0%	16	64.0%	25		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(D-1)-2…注目されたい

I-(D-1)-3…不安になる

I-(D-1)-4…自分の世界に入る

I-(D-1)-5…その他

③ 挑発行動が起こる原因についての意識

表31 自閉症児の挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(親)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-2)-1	17	23.3%	21	28.8%	10	13.7%	25	34.2%	73	6.726	N.S
I-(D-2)-2	8	11.1%	21	29.2%	17	23.6%	26	36.1%	72	9.667	p<.05
I-(D-2)-3	16	21.9%	28	38.4%	6	8.2%	23	31.5%	73	14.945	p<.01
I-(D-2)-4	13	18.6%	20	28.6%	7	10.0%	30	42.9%	70	16.743	p<.01
I-(D-2)-5	3	11.1%	2	7.4%	2	7.4%	20	74.1%	27		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-2)-1…注目されたい

I-(D-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(D-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(D-2)-4…自分の世界に入る

I-(D-2)-5…その他

「挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 31 に記した。「I・[(D-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」に関して、「I・「あてはまらない」が 36.1%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=9.667$, df=3, $p<.05$)。

「I・[(D-2)-3] 欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」に関して、「ややあてはまる」が 38.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=14.945$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-2)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「あてはまらない」が 42.9%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=16.743$, $df=3$, $p<.01$)。「[(D-2)-1] 注目されたい」に関しては、有意差がみられなかった。「I・[(D-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

④ 挑発行動への対処についての意識

表32 自閉症児の挑発行動への対処についての意識に関する人数及び割合(親)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-3)-1	10	13.9%	24	33.3%	11	15.3%	27	37.5%	72	12.778	$p<.01$
I-(D-3)-2	3	4.2%	28	38.9%	18	25.0%	23	31.9%	72	19.444	$p<.01$
I-(D-3)-3	12	16.4%	28	38.4%	10	13.7%	23	31.5%	73	12.315	$p<.01$
I-(D-3)-4	19	26.8%	22	31.0%	9	12.7%	21	29.6%	71	6.014	N.S
I-(D-3)-5	4	13.8%	2	6.9%	2	6.9%	21	72.4%	29		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(D-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(D-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(D-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(D-3)-5…その他

「挑発行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 32 に記した。「I・[(D-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が 37.5%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=12.778$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「ややあてはまる」が 38.9%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=19.444$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関して、「ややあてはまる」が 38.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=12.315$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関しては、有意差がみられなかった。[(D-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

⑤挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表33に記した。「I・[(D-4)-1] 仕方なく挑発行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が41.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=19.486$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-4)-2] 納得した上で挑発行動をやめる」に関して、「あてはまらない」が38.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=14.343$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-4)-3] 一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関しては、「ややあてはまる」が36.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=8.268$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(D-4)-4] その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表33 自閉症児の挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識意識に関する人数及び割合(親)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定 ($df=3$)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-4)-1	4	5.7%	29	41.4%	15	21.4%	22	31.4%	70	19.486	$p<.01$
I-(D-4)-2	5	7.1%	19	27.1%	19	27.1%	27	38.6%	70	14.343	$p<.01$
I-(D-4)-3	11	15.5%	26	36.6%	13	18.3%	21	29.6%	71	8.268	$p<.05$
I-(D-4)-4	1	4.3%	1	4.3%	4	17.4%	17	73.9%	23		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-4)-1…仕方なく挑発行動をやめる

I-(D-4)-2…納得した上で挑発行動をやめる

I-(D-4)-3…一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(D-4)-4…その他

3 自閉症児の問題行動についての教師の意識の分析

(1) 自傷行動に関する意識

① 気になる自傷行動の頻度

「気になる自傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表 34 に記した。回答の対象となる自閉症児の気になる自傷行動について、当てはまると思う選択肢を回答してもらった。「I-[A-2]手を噛む」に関して、「あてはまる」が 45.8%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=15.237$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[A-1]頭、顔を自分の手で傷つける」「I-[A-3]他の物に身体の一部をぶつける」、においては、いずれも有意差がみられなかった。「I-[A-4]その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表34 自閉症児の気になる自傷行動の頻度意識に関する人数及び割合(教師)

自傷行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-A-1	15	26.3%	19	33.3%	9	15.8%	14	24.6%	57	3.561	N.S
I-A-2	27	45.8%	7	11.9%	11	18.6%	14	23.7%	59	15.237	p<.01
I-A-3	18	34.0%	13	24.5%	11	20.8%	11	20.8%	53	2.472	N.S
I-A-4	6	28.6%	3	14.3%	4	19.0%	8	38.1%	21		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-A-1…頭、顔を自分の手で傷つける

I-A-2…手を噛む

I-A-3…他の物に身体の一部をぶつける

I-A-4…その他

② 自傷行動が起こる直前の行動についての意識

「自傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 35 に記した。「I-[(A-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまる」が 50.0%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=35.103$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(A-1)-2] 注目されたい」に関して、「あまりあてはまらない」が 39.7%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=7.931$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(A-1)-3] 不安になる」に関して、「あてはまる」が 45.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=25.456$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(A-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、有意差はみられなかった。「I-[(A-1)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表35 自傷行動が起こる直前の行動についての意識意識に関する人数及び割合(教師)

<直前> 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-1)-1	29	50.0%	22	37.9%	3	5.2%	4	6.9%	58	35.103	p<.01
I-(A-1)-2	9	15.5%	15	25.9%	23	39.7%	11	19.0%	58	7.931	p<.05
I-(A-1)-3	26	45.6%	21	36.8%	7	12.3%	3	5.3%	57	25.456	p<.01
I-(A-1)-4	20	35.7%	14	25.0%	13	23.2%	9	16.1%	56	4.429	N.S
I-(A-1)-5	9	52.9%	1	5.9%	4	23.5%	3	17.6%	17		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(A-1)-2…注目されたい

I-(A-1)-3…不安になる

I-(A-1)-4…自分の世界に入る

I-(A-1)-5…その他

③ 自傷行動が起こる原因についての意識

表36 自閉症児の自傷行動が起こる原因についての意識意識に関する人数及び割合(教師)

<原因> 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-2)-1	7	12.3%	13	22.8%	23	40.4%	14	24.6%	57	9.175	p<.05
I-(A-2)-2	26	44.8%	22	37.9%	4	6.9%	6	10.3%	58	25.586	p<.01
I-(A-2)-3	33	58.9%	15	26.8%	4	7.1%	4	7.1%	56	40.143	p<.01
I-(A-2)-4	12	23.5%	16	31.4%	17	33.3%	6	11.8%	51	5.863	N.S
I-(A-2)-5	5	38.5%	2	15.4%	3	23.1%	3	23.1%	13		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-2)-1…注目されたい

I-(A-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(A-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(A-2)-4…自分の世界に入る

I-(A-2)-5…その他

「自傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表36に記した。「I-[(A-2)-1] 注目されたい」に関して、「あまりあてはまらない」が40.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=9.175$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(A-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」に関して、「あてはまる」が最も高く44.8%、続いて「ややあてはまる」が37.9%で、有意差がみられた($\chi^2=25.586$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(A-2)-3] 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまる」が最も高く58.9%で、有意差がみられた($\chi^2=40.143$,

df=3, $p<.01$)。「I - [(A-2)-4] 自分の世界に入る」に関しては、有意差がみられなかった。「I - [(A-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

④自傷行動への対処についての意識

「自傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 37 に記した。

「I - [(A-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が 35.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=10.72$, df=3, $p<.05$)。「I - [(A-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「あまりあてはまらない」が 41.4%で最も高く有意差がみられた($\chi^2=20.621$, df=3, $p<.01$)。「I - [(A-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関して、「あてはまる」が 56.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=34.298$, df=3, $p<.01$)。「I - [(A-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」については、「ややあてはまる」が 48.3%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=29.310$, df=3, $p<.01$)。「I - [(A-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表37 自閉症児の自傷行動への対処についての意識意識に関する人数及び割合(教師)

〈対応〉	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I -(A-3)-1	4	7.0%	18	31.6%	15	26.3%	20	35.1%	57	10.719	$p<.05$
I -(A-3)-2	4	6.9%	22	37.9%	24	41.4%	8	13.8%	58	20.621	$p<.01$
I -(A-3)-3	32	56.1%	15	26.3%	6	10.5%	4	7.0%	57	34.298	$p<.01$
I -(A-3)-4	21	36.2%	28	48.3%	4	6.9%	5	8.6%	58	29.310	$p<.01$
I -(A-3)-5	5	35.7%	3	21.4%	3	21.4%	3	21.4%	14		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I -(A-3)-1…無視する(無関心を装う)

I -(A-3)-2…強制的にやめさせようとする

I -(A-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I -(A-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I -(A-3)-5…その他

⑤自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表38に記した。「I・[(A-4)-1]仕方なく自傷行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が46.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=24.571$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(A-4)-2]納得した上で自傷行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が38.6%で最も高く有意差がみられた($\chi^2=10.158$, $P<.05$)。「I・[(A-4)-3]一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「ややあてはまる」が46.4%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=15.571$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(A-4)-4]その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表38 自閉症児の自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(A-4)-1	4	7.1%	26	46.4%	20	35.7%	6	10.7%	56	24.571	p<.01
I-(A-4)-2	7	12.3%	22	38.6%	18	31.6%	10	17.5%	57	10.158	p<.05
I-(A-4)-3	13	23.2%	26	46.4%	11	19.6%	6	10.7%	56	15.571	p<.01
I-(A-4)-4	3	27.3%	2	18.2%	2	18.2%	4	36.4%	11		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-4)-1…仕方なく自傷行動をやめる

I-(A-4)-2…納得した上で自傷行動をやめる

I-(A-4)-3…一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(A-4)-4…その他

(2)他傷行動に関する意識

①気になる他傷行動の頻度

「気になる他傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表39に記した。「I・[B-2]他人に対して(通行人など)」に関して、「あてはまらない」が41.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=9.571$, $df=3$, $p<.051$)。「I・[B-3]他の物に身体の一部をぶつける」に関して、「あてはまる」が38.6%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が33.3%で、有意差がみられた($\chi^2=11.421$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[B-1]友達に対して」に関しては、有意差がみられなかった。「I・[(B-4)]その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表39 自閉症児の気になる他傷行動の頻度意識に関する人数及び割合(教師)

他傷行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-B-1	19	33.3%	16	28.1%	10	17.5%	12	21.1%	57	3.421	N.S
I-B-2	7	12.5%	12	21.4%	14	25.0%	23	41.1%	56	9.571	p<.05
I-B-3	22	38.6%	19	33.3%	9	15.8%	7	12.3%	57	11.421	p<.01
I-B-4	4	30.8%	3	23.1%	2	15.4%	4	30.8%	13		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注) : I-B-1…友達に対して
I-B-2…他人に対して(通行人など)
I-B-3…先生に対して
I-B-4…その他

② 他傷行動が起こる直前の行動についての意識

表40 他傷行動が起こる直前の行動についての意識意識に関する人数及び割合(教師)

<直前>	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-1)-1	26	44.8%	20	34.5%	7	12.1%	5	8.6%	58	21.310	p<.01
I-(B-1)-2	11	18.6%	14	23.7%	20	33.9%	14	23.7%	59	2.898	N.S
I-(B-1)-3	20	34.5%	21	36.2%	11	19.0%	6	10.3%	58	10.828	p<.05
I-(B-1)-4	6	10.9%	17	30.9%	20	36.4%	12	21.8%	55	8.200	p<.05
I-(B-1)-5	3	30.0%	3	30.0%	2	20.0%	2	20.0%	10		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注) : I-(B-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。
I-(B-1)-2…注目されたい
I-(B-1)-3…不安になる
I-(B-1)-4…自分の世界に入る
I-(B-1)-5…その他

「他傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表40に記した。「I-[(B-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまる」が44.8%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=21.310$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(B-1)-3] 不安になる」に関して、「ややあてはまる」が36.2%で最も高く、続いて「あてはまる」が34.5%で、有意差がみられた($\chi^2=10.828$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(B-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「あまりあてはまらない」が36.4%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が30.9%で、有意差がみられた($\chi^2=8.200$, $df=3$, $p<.05$)。「I-[(B-1)-2] 注目されたい」に関しては、有意差はみられなかった。「I-[(B-1)-5] その他」に関しては、回答者率

が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

③他傷行動が起こる原因についての意識

「他傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 41 に記した。「I・[(B-2)-1] 注目されたい」に関して、「あまりあてはまらない」が 39.0%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=9.000$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(B-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」に関して、「ややあてはまる」が 42.4%で最も高く、有意差が見られた ($\chi^2=23.373$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-2)-3] 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまる」が 49.2%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 35.6%で、有意差がみられた。($\chi^2=30.966$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-2)-4] 自分の世界に入る」に関しては、「ややあてはまる」が 43.4%で最も高く、有意差が見られた ($\chi^2=14.245$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表41 自閉症児の他傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(教師)

原因	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-2)-1	8	13.6%	17	28.8%	23	39.0%	11	18.6%	59	9.000	p<.05
I-(B-2)-2	23	39.0%	25	42.4%	6	10.2%	5	8.5%	59	23.373	p<.01
I-(B-2)-3	29	49.2%	21	35.6%	6	10.2%	3	5.1%	59	30.966	p<.01
I-(B-2)-4	11	20.8%	23	43.4%	15	28.3%	4	7.5%	53	14.245	p<.01
I-(B-2)-5	4	33.3%	2	16.7%	3	25.0%	3	25.0%	12		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-2)-1…注目されたい

I-(B-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(B-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(B-2)-4…自分の世界に入る

I-(B-2)-5…その他

④他傷行動への対処についての意識

「他傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 42 に記した。「I・[(B-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が 54.4%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=34.439$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「ややあてはまる」が 43.1%で最も高

く、有意差がみられた ($\chi^2=15.241$, $df=3$, $p<.01$)。I・[(B-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関して、「あてはまる」が 41.1%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=11.714$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関しては、「あてはまる」が 42.1%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=20.684$, $df=3$, $p<.01$)「I・[(B-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表42 自閉症児の他傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-3)-1	2	3.5%	7	12.3%	17	29.8%	31	54.4%	57	34.439	p<.01
I-(B-3)-2	18	31.0%	25	43.1%	8	13.8%	7	12.1%	58	15.241	p<.01
I-(B-3)-3	23	41.1%	15	26.8%	13	23.2%	5	8.9%	56	11.714	p<.01
I-(B-3)-4	24	42.1%	21	36.8%	9	15.8%	3	5.3%	57	20.684	p<.01
I-(B-3)-5	6	50.0%	0	0.0%	3	25.0%	3	25.0%	12		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(B-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(B-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(B-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(B-3)-5…その他

⑤ 他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

表43 自閉症児の他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(B-4)-1	8	14.0%	33	57.9%	12	21.1%	4	7.0%	57	35.140	p<.01
I-(B-4)-2	9	16.1%	19	33.9%	17	30.4%	11	19.6%	56	4.857	N.S
I-(B-4)-3	11	19.6%	30	53.6%	11	19.6%	4	7.1%	56	26.714	p<.01
I-(B-4)-4	2	18.2%	3	27.3%	2	18.2%	4	36.4%	11		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-4)-1…仕方なく他傷行動をやめる

I-(B-4)-2…納得した上で他傷行動をやめる

I-(B-4)-3…一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(B-4)-4…その他

「他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数

及び割合」を表 43 に記した。「I・[(B-4)-1] 仕方なく他傷行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が 57.9%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=35.140$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-4)-3] 一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「ややあてはまる」が 53.6%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=26.714$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-4)-2] 納得した上で他傷行動をやめる」に関しては有意差が見られなかった。「I・[(B-4)-4] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

(3)破壊行動に関する意識

①気になる破壊行動の頻度

「気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合」を表 44 に記した。「I・[C-1] 壊すことを目的とする」「I・[C-2]壊すことを目的としない（投げたり落としたりすることで、結果的に壊れることもある）」に関して、いずれも有意差がみられなかった。「I・[C-3]その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表44 自閉症児の気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合(教師)

破壊行動	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-C-1	9	15.8%	13	22.8%	16	28.1%	19	33.3%	57	3.842	N.S
I-C-2	15	27.3%	18	32.7%	9	16.4%	13	23.6%	55	3.109	N.S
I-C-3	3	30.0%	3	30.0%	1	10.0%	3	30.0%	10		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注) : I-C-1…壊すことを目的とする
I-C-2…壊すことを目的としない
I-C-3…その他

②破壊行動が起こる直前の行動についての意識

「破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 45 に記した。「I・[(C-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関して、「あてはまる」が 57.9%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 33.3%で、有意差がみられた ($\chi^2=16.193$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-1)-2] 注目されたい」に関して、「あまりあてはまらない」が 43.9%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=12.825$, $df=3$, $p<.01$)。[(C-1)-3] 不安になる」に関して、「あては

まる」が 37.5%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 30.4%で、有意差がみられた ($\chi^2=7.857$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(C-1)-4] 自分の世界に入る」に関しては、有意がみられなかった。「I・[(C-1)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表45 破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜直前＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 (df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-1)-1	24	42.1%	19	33.3%	5	8.8%	9	15.8%	57	16.193	p<.01
I-(C-1)-2	8	14.0%	9	15.8%	25	43.9%	15	26.3%	57	12.825	p<.01
I-(C-1)-3	21	37.5%	17	30.4%	8	14.3%	10	17.9%	56	7.857	p<.05
I-(C-1)-4	7	13.0%	16	29.6%	18	33.3%	13	24.1%	54	5.111	N.S
I-(C-1)-5	2	20.0%	2	20.0%	2	20.0%	4	40.0%	10		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(C-1)-2…注目されたい

I-(C-1)-3…不安になる

I-(C-1)-4…自分の世界に入る

I-(C-1)-5…その他

③破壊行動が起こる原因についての意識

表46 自閉症児の破壊行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-2)-1	10	17.5%	18	31.6%	14	24.6%	15	26.3%	57	2.298	N.S
I-(C-2)-2	22	39.3%	21	37.5%	4	7.1%	9	16.1%	56	17.000	p<.01
I-(C-2)-3	20	35.7%	23	41.1%	4	7.1%	9	16.1%	56	17.286	p<.01
I-(C-2)-4	13	26.5%	18	36.7%	10	20.4%	8	16.3%	49	4.633	N.S
I-(C-2)-5	0	0.0%	2	20.0%	3	30.0%	5	50.0%	10		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-2)-1…注目されたい

I-(C-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(C-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(C-2)-4…自分の世界に入る

I-(C-2)-5…その他

「破壊行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 46 に記した。「I・[(C-2)-2] 欲求不満(自分自身のこと)」に関して、「あてはまる」が 39.3%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 37.5%で、有意差がみられた ($\chi^2=17.000$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-2)-3] 欲求不満(他者が関係しているコ

コミュニケーションの問題)」に関して、「ややあてはまる」が 41.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=17.286$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-2)-1] 注目されたい」「I・[(C-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関しては、有意差がみられなかった。「I・[(C-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

④破壊行動への対処についての意識

「破壊行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 47 に記した。

「I・[(C-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関して、「あてはまらない」が 39.3%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=9.714$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(C-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関して、「ややあてはまる」が 44.6%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=11.857$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、「ややあてはまる」が 37.0%で最も高く、続いて「あてはまる」が 33.3%で、有意差がみられた($\chi^2=9.259$, $df=3$, $p<.05$)。I・[(C-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関しては、有意差がみられなかった。[(C-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表47 自閉症児の破壊行動への対処についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-3)-1	6	10.7%	12	21.4%	16	28.6%	22	39.3%	56	9.714	p<.05
I-(C-3)-2	9	16.1%	25	44.6%	12	21.4%	10	17.9%	56	11.857	p<.01
I-(C-3)-3	19	34.5%	15	27.3%	12	21.8%	9	16.4%	55	3.982	N.S
I-(C-3)-4	18	33.3%	20	37.0%	7	13.0%	9	16.7%	54	9.259	p<.05
I-(C-3)-5	3	23.1%	4	30.8%	1	7.7%	5	38.5%	13		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(C-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(C-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(C-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(C-3)-5…その他

⑤破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表48に記した。「I・[(C-4)-1]仕方なく破壊行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が64.0%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=41.680$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-4)-2]納得した上で破壊行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が36.0%で最も高く、続いて「あまりあてはまらない」が32.0%で有意差がみられた($\chi^2=10.640$, $df=3$, $p<.05$)。「I・[(C-4)-3]一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「ややあてはまる」が45.1%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=11.353$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(C-4)-4]その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表48 自閉症児の破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(C-4)-1	7	14.0%	32	64.0%	3	6.0%	8	16.0%	50	41.680	$p<.01$
I-(C-4)-2	3	6.0%	18	36.0%	16	32.0%	13	26.0%	50	10.640	$p<.05$
I-(C-4)-3	8	15.7%	23	45.1%	11	21.6%	9	17.6%	51	11.353	$p<.01$
I-(C-4)-4	0	0.0%	2	22.2%	1	11.1%	6	66.7%	9		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(C-4)-1…仕方なく破壊行動をやめる

I-(C-4)-2…納得した上で破壊行動をやめる

I-(C-4)-3…一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(C-4)-4…その他

(4)挑発行動に関する意識

①気になる挑発行動の頻度

「気になる挑発行動の頻度に関する人数及び割合」を表49に記した。「I-[D-1]いたずらの行動(他の人の反応をうかがいながら奇声をあげる・性器を見せる・唾や尿や便で遊ぶ、など)」「I-[D-2]嫌がらせ的行動(「死ぬ」など嫌がることをわざと言う・しつこく触りにくる・忙しく働いている時にわざと無意味な質問を繰り返す、など)」「I-[D-3]意図的な攻撃行動(他の人の反応をうかがいながら自傷する、人をつねる、物を投げる、物を壊す、髪の毛を引っ張る・叩く、など)」に関して、いずれも有意差がみられなかった。「I-[D-4]その他」に関して

は、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表49 自閉症児の気になる挑発行動の頻度に関する人数及び割合(教師)

挑発行動 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-D-1	14	26.4%	13	24.5%	13	24.5%	13	24.5%	53	0.057	N.S
I-D-2	11	21.6%	11	21.6%	12	23.5%	17	33.3%	51	1.941	N.S
I-D-3	16	30.2%	16	30.2%	12	22.6%	9	17.0%	53	2.623	N.S
I-D-4	3	27.3%	2	18.2%	2	18.2%	4	36.4%	11		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注) : I-D-1…いたずらの行動

I-D-2…嫌がらせの行動

I-D-3…意図的な攻撃行動

I-D-4…その他

②挑発行動が起こる直前の行動についての意識

「挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 50 に記した。「I・[(D-1)-4] 自分の世界に入る」に関して、「ややあてはまる」が 38.0%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=7.920$, df=3, p<.05)。「I・[(D-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」「I・[(D-1)-2] 注目されたい」「I・[(D-1)-3] 不安になる」に関しては、有意差がみられなかった。「I・[(D-1)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表50 挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(教師)

<直前> 項目	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-1)-1	15	30.0%	14	28.0%	8	16.0%	13	26.0%	50	2.320	N.S
I-(D-1)-2	14	27.5%	16	31.4%	9	17.6%	12	23.5%	51	2.098	N.S
I-(D-1)-3	12	23.5%	20	39.2%	8	15.7%	11	21.6%	51	6.176	N.S
I-(D-1)-4	5	10.0%	19	38.0%	13	26.0%	13	26.0%	50	7.920	p<.05
I-(D-1)-5	5	38.5%	1	7.7%	3	23.1%	4	30.8%	13		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注) : I-(D-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(D-1)-2…注目されたい

I-(D-1)-3…不安になる

I-(D-1)-4…自分の世界に入る

I-(D-1)-5…その他

③挑発行動が起こる原因についての意識

「挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 51 に記

した。「[(D-2)-1] 注目されたい」に関して、「ややあてはまる」が 39.6%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=7.906$, $df=3$, $p<.05$)。「I - [(D-2)-2] 欲求不満 (自分自身のこと)」に関して、「ややあてはまる」が 36.5%で最も高く、続いて「あてはまる」が 34.6%で、有意差がみられた ($\chi^2=9.692$, $df=3$, $p<.05$)。

「I - [(D-2)-3] 欲求不満 (他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関して、「あてはまる」が 39.6%で最も高く、続いて「ややあてはまる」が 37.7%で、有意差がみられた ($\chi^2=16.057$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(D-2)-4] 自分の世界に入る」に関して、「ややあてはまる」が 47.9%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=13.500$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(D-2)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表51 自閉症児の挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜原因＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-2)-1	14	26.4%	21	39.6%	7	13.2%	11	20.8%	53	7.906	p<.05
I-(D-2)-2	18	34.6%	19	36.5%	6	11.5%	9	17.3%	52	9.692	p<.05
I-(D-2)-3	21	39.6%	20	37.7%	5	9.4%	7	13.2%	53	16.057	p<.01
I-(D-2)-4	9	18.8%	23	47.9%	8	16.7%	8	16.7%	48	13.500	p<.01
I-(D-2)-5	0	0.0%	2	40.0%	1	20.0%	2	40.0%	5		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-2)-1…注目されたい

I-(D-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(D-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(D-2)-4…自分の世界に入る

I-(D-2)-5…その他

④ 挑発行動への対処についての意識

「挑発行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 52 に記した。

「I - [(D-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、「ややあてはまる」が 41.2%で最も高く、有意差がみられた ($\chi^2=12.922$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(D-3)-1] 無視する (無関心を装う)」「I - [(D-3)-2] 強制的にやめさせようとする」「I - [(D-3)-3] 見通しをたてる (環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関しては、いずれも有意差がみられなかった。[(D-3)-5] その他」に関しては、回答者率が 49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

表52 自閉症児の挑発行動への対処についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-3)-1	12	23.1%	16	30.8%	10	19.2%	14	26.9%	52	1.538	N.S
I-(D-3)-2	8	15.4%	19	36.5%	16	30.8%	9	17.3%	52	6.615	N.S
I-(D-3)-3	17	32.1%	17	32.1%	11	20.8%	8	15.1%	53	4.585	N.S
I-(D-3)-4	17	33.3%	21	41.2%	6	11.8%	7	13.7%	51	12.922	p<.01
I-(D-3)-5	2	25.0%	1	12.5%	3	37.5%	2	25.0%	8		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(D-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(D-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(D-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

I-(D-3)-5…その他

⑤ 挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

表53 自閉症児の挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(教師)

＜対応後＞	あてはまる		ややあてはまる		あまりあてはまらない		あてはまらない		合計	χ^2 検定(df=3)	
項目	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合			
I-(D-4)-1	6	12.2%	23	46.9%	12	24.5%	8	16.3%	49	14.102	p<.01
I-(D-4)-2	5	10.2%	17	34.7%	13	26.5%	14	28.6%	49	6.429	N.S
I-(D-4)-3	11	22.9%	26	54.2%	3	6.3%	8	16.7%	48	24.500	p<.01
I-(D-4)-4	0	0.0%	3	33.3%	1	11.1%	5	55.6%	9		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(D-4)-1…仕方なく挑発行動をやめる

I-(D-4)-2…納得した上で挑発行動をやめる

I-(D-4)-3…一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(D-4)-4…その他

「挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表53に記した。「I-[(D-4)-1] 仕方なく挑発行動をやめる」に関して、「ややあてはまる」が46.9%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=14.102$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(D-4)-3] 一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関しては、「ややあてはまる」が54.2%で最も高く、有意差がみられた($\chi^2=24.500$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[(D-4)-2] 納得した上で挑発行動をやめる」に関しては、優位差がみられなかった。「I-[(D-4)-4] その他」に関しては、回答者率が49.0%以下であるため、統計処理は行わなかった。

4 自閉症児の問題行動についての親と教師の意識の比較分析

親と教師において、回答率が各々50%を超えている項目について、 χ^2 検定を行い、比較検討した。

(1)自傷行動に関する意識

①気になる自傷行動の頻度

「気になる自傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表54に記した。「I・[A-1]頭、顔を自分の手で傷つける」「I・[A-2]手を噛む」「I・[A-3]他の物に身体の一部をぶつける」の3項目全てに関して有意差がみられた(各々 $\chi^2=14.977$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=30.671$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=19.271$, $df=3$, $p<.01$)。

有意差のみられた3つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行ったところ、I・[A-1]・I・[A-2]・I・[A-3]全てにおいて、「あてはまる」と「あてはまらない」に関して、有意差がみられた(I・[A-1]:各々 $\chi^2=5.178$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=5.46$, $df=1$, $p<.05$)(I・[A-2]:各々 $\chi^2=13.328$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=15.849$, $df=1$, $p<.01$)(I・[A-3]各々 $\chi^2=5.747$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=10.924$, $df=1$, $p<.01$)。このことから、親においては、自閉症児の自傷行動について、その身体部位を特定しない傾向にあるが、教師においては、自傷行動についてその身体部位を特定する傾向があるということが考えられる。

表54 親と教師の自閉症児の気になる自傷行動の頻度に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる(%)	ややあてはまる(%)	あまりあてはまらない(%)	あてはまらない(%)	χ^2 検定 ($df=3$)	
I-A-1	親	12.2	20.7	23.2	43.9	14.977	$p<.01$
	教師	26.3	33.3	15.8	24.6		
I-A-2	親	16.9	10.8	12.0	60.2	30.671	$p<.01$
	教師	45.8	11.9	18.6	23.7		
I-A-3	親	16.9	14.5	20.5	48.2	19.271	$p<.01$
	教師	34.0	24.5	20.8	20.8		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-A-1…頭、顔を自分の手で傷つける

I-A-2…手を噛む

I-A-3…他の物に身体の一部をぶつける

②自傷行動が起こる直前の行動についての意識

「自傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表55

に記した。「I・[(A-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」「I・[(A-1)-2] 注目されたい」「I・[(A-1)-3] 不安になる」「I・[(A-1)-4] 自分の世界に入る」の4項目全てに関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=12.135$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=18.377$, $df=3$, $p<.05$; $\chi^2=20.399$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=29.142$, $df=3$, $p<.01$)。

表55 自閉症児の自傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる(%)	ややあてはまる(%)	あまりあてはまらない(%)	あてはまらない(%)	χ^2 検定 (df=3)	
I-(A-1)-1	親	39.7	28.2	17.9	14.1	12.135	$p<.01$
	教師	50.0	37.9	5.2	6.9		
I-(A-1)-2	親	10.3	15.4	26.9	47.4	18.377	$p<.01$
	教師	15.5	25.9	39.7	19.0		
I-(A-1)-3	親	24.4	30.8	23.1	21.8	20.399	$p<.01$
	教師	45.6	36.8	12.3	5.3		
I-(A-1)-4	親	9.1	22.1	24.7	44.2	29.142	$p<.01$
	教師	35.7	25.0	23.2	16.1		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(A-1)-2…注目されたい

I-(A-1)-3…不安になる

I-(A-1)-4…自分の世界に入る

有意差のみられた4つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(A-1)-1] については、「あまりあてはまらない」に関して、有意差がみられた($\chi^2=7.060$, $df=1$, $p<.01$)。「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の%の値を足すと、親は32.0%で教師(12.1%)の倍以上の値となる。これらのことから、「I・[(A-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」に関しては、親の方が教師よりも「あてはまらない」と感じる傾向があるということが言える。

I・[(A-1)-2] については、「あてはまらない」に関して、親の方が47.4%で高く、有意差がみられた($\chi^2=12.207$, $df=1$, $p<.01$)。「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」の%数値を見てみると、有意差はないものの、どの選択肢においても親よりも教師の数値が高い。これらのことから、「自閉症児の自傷行動が起こる直前の行動」について、親の方が教師よりも「注目されたい」のだと認識しない傾向があるということが言える。

I・[(A-1)-3]・I・[(A-1)-4] については、「あてはまる」「あてはまらない」に関して、有意差がみられた (I・[(A-1)-3]: 各々 $\chi^2=6.456$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=10.100$, $df=1$, $p<.01$) (I・[(A-1)-4]: 各々 $\chi^2=15.820$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=13.096$, $df=1$, $p<.01$)。これらのことから、「自閉症児の自傷行動が起こる直前の行動」について、親は「不安になる」「自分の世界に入る」ことを認識しない傾向にあるが、教師は認識する傾向があるということが言える。

③自傷行動が起こる原因についての意識

「自傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 56 に記した。「I・[(A-2)-1] 注目されたい」「I・[(A-2)-2] 欲求不満 (自分自身のこと)」に関して、有意差がみられた ($\chi^2=8.574$, $df=3$, $p<.05$; $\chi^2=9.343$, $df=3$, $p<.05$)。

「I・[(A-2)-3] 欲求不満 (他者が関係しているコミュニケーションの問題)」「I・[(A-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関しては、有意差がみられなかった。

表56 自閉症児の自傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる (%)	ややあてはまる (%)	あまりあてはまらない (%)	あてはまらない (%)	χ^2 検定 ($df=3$)	
I-(A-2)-1	親	8.0	22.7	26.7	42.7	8.574	$p<.05$
	教師	12.3	22.8	40.4	24.6		
I-(A-2)-2	親	36.0	28.0	17.3	18.7	9.343	$p<.05$
	教師	44.8	37.9	6.9	10.3		
I-(A-2)-3	親	40.0	36.0	10.7	13.3	7.543	N.S
	教師	58.9	26.8	7.1	7.1		
I-(A-2)-4	親	18.1	30.6	25.0	26.4	7.527	N.S
	教師	23.5	31.4	33.3	11.8		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-2)-1…注目されたい

I-(A-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(A-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(A-2)-4…発達のもつれ上問題がある

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。「I・[(A-2)-1] 注目されたい」に関しては、「あてはまらない」について親の方が 42.7%で高く、有意差がみられた ($\chi^2=4.876$, $df=1$, $p<.05$)。「あまりあてはまらない」%数値を見てみると、有意差はないものの、教師の方が親よ

りも回答率が高い。「あてはまる」「ややあてはまる」については、教師の方が値は高いものの、 χ^2 値も各々0.904と0.000であり、差はほとんどみられない。これらのことから、「自閉症児の自傷行動が起こる原因」について、親・教師共に「注目されたい」からであると、認識しない傾向にあり、その中でも親の方がその認識が高いということが言える。

「I・[(A-2)・2] 欲求不満（自分自身のこと）」に関しては、「あまりあてはまらない」について有意差がみられた($\chi^2=4.496$, $df=1$, $p<.05$)。「あてはまらない」の%数値を見てみると、有意差はないものの、親の方が教師よりも回答率が高い。さらに、「あてはまる」「ややあてはまる」においては、いずれも有意差はないものの、教師の方が親よりも回答率が高い。これらのことから、「自閉症児の自傷行動が起こる原因」について、親の方が教師よりも「欲求不満（自分自身のこと）」が原因であると認識しない傾向にあることが言える。

④自傷行動への対処についての意識

表57 自閉症児の自傷行動への対処についての意識に関する
人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる (%)	ややあては まる(%)	あまりあては まらない(%)	あてはまら ない(%)	χ^2 検定 (df=3)	
I-(A-3)-1	親	9.7	44.4	16.7	29.2	5.326	N.S
	教師	7.0	31.6	26.3	35.1		
I-(A-3)-2	親	6.8	25.7	39.2	28.4	7.467	N.S
	教師	6.9	37.9	41.4	13.8		
I-(A-3)-3	親	27.6	46.1	10.5	15.8	18.459	$p<.01$
	教師	56.1	26.3	10.5	7.0		
I-(A-3)-4	親	23.0	44.6	14.9	17.6	9.080	$p<.05$
	教師	36.2	48.3	6.9	8.6		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(A-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(A-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(A-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(A-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

「自傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表57に記した。「I・[(A-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」「I・[(A-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=18.459$,

df=3, $p < .01$; $\chi^2 = 9.080$, df=3, $p < .05$)。「I・[(A-3)-1] 無視する(無関心を装う)」「I・[(A-3)-2] 強制的にやめさせようとする」に関しては、有意差がみられなかった。

有意差のみられた2つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

「I・[(A-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関しては、「あてはまる」について、教師の方が56.4%で親よりも高く、「ややあてはまる」について、親の方が46.5%で教師よりも高く、それぞれ有意差がみられた(各々 $\chi^2 = 9.702$, df=3, $p < .01$; $\chi^2 = 5.383$, df=3, $p < .05$)。

「I・[(A-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関しては、有意差のみられた選択肢はなかった。各選択肢の%数値を見てみると、有意差は見られないものの、「あてはまる」において、教師の方が親よりも数値が高く、 χ^2 値も2.959と高い傾向にある。「あまりあてはまらない」「あてはまらない」においては、親の方が教師よりも数値が高く、 χ^2 値も各々2.918、3.057と高い傾向にある。これらのことから、自閉症児の自傷行動への対応について、教師・親共に「一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」傾向があるが、教師の方が親よりもその傾向が高いということが考えられる。

⑤ 自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表58に記した。「I・[(A-4)-3] 一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、有意差がみられた($\chi^2 = 23.375$, df=3, $p < .01$)。「I・[(A-4)-1] 仕方なく自傷行動をやめる」「I・[(A-4)-2] 納得した上で自傷行動をやめる」に関しては、有意差がみられなかった。

表58 自閉症児の自傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる (%)	ややあては まる(%)	あまりあては まらない(%)	あてはまら ない(%)	χ^2 検定 (df=3)	
I-(A-4)-1	親	9.5	40.5	25.7	24.3	7.650	N.S
	教師	7.1	46.4	35.7	10.7		
I-(A-4)-2	親	12.2	25.7	39.2	23.0	4.144	N.S
	教師	12.3	38.6	31.6	17.5		
I-(A-4)-3	親	10.7	25.3	36.0	28.0	23.375	p<.01
	教師	23.2	46.4	19.6	10.7		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(A-4)-1…仕方なく自傷行動をやめる

I-(A-4)-2…納得した上で自傷行動をやめる

I-(A-4)-3…一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

I-(A-4)-4…その他

有意差のみられた項目「I-[(A-4)-3]」について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行ったところ、全ての選択肢において有意差がみられた。(各々 $\chi^2=4.647$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=6.201$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=4.808$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.718$, $df=1$, $p<.01$)。それぞれの%数値を見てみると、教師が「あてはまる」「ややあてはまる」が高いのに対し、親は「あまりあてはまらない」「あてはまらない」が高い。これらのことから、「自閉症児の自傷行動への対応後における自閉症児の行動」について、教師は親よりも「一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」と認識しているということが言える。

(2)他傷行動に関する意識

①気になる他傷行動の頻度

「気になる他傷行動の頻度に関する人数及び割合」を表59に記した。「I-[B-2]他人に対して(通行人など)」「I-[B-3]先生に対して」に関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=14.340$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=18.030$, $df=3$, $p<.01$)。「I-[B-1]友達に対して」に関しては、有意差がみられなかった。

有意差のみられた2つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、

χ^2 検定を行った。

I・[B・2]に関しては、「ややあてはまる」において、教師が 21.4%で親よりも高く、「あてはまらない」において、親が 64.6%で教師よりも高く、それぞれ有意差がみられた(各々 $\chi^2=5.547$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=5.252$, $df=1$, $p<.05$)。これらのことから、教師の方が親よりも、「自閉症児の気になる他傷行動」について、「他人(通行人など)に対して」発現することを認識していると言える。

I・[B・3]に関しては、「あてはまる」において、教師が 38.6%で親よりも高く、「あてはまらない」において、親が 32.5%で教師よりも高く、それぞれ有意差がみられた(各々 $\chi^2=7.433$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=9.150$, $df=1$, $p<.01$)。これらのことから、「自閉症児の気になる他傷行動」について、教師の方が親よりも「先生(教師)に対して」の他傷行動を認識していると言える。

表59 親と教師の自閉症児の気になる他傷行動の頻度に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 ($df=3$)	
I-B-1	親	20.5	26.5	19.3	33.7	6.131	N.S
	教師	33.3	28.1	17.5	21.1		
I-B-2	親	4.9	8.5	22.0	64.6	14.340	$p<.01$
	教師	12.5	21.4	25.0	41.1		
I-B-3	親	18.1	27.7	21.7	32.5	18.030	$p<.01$
	教師	38.6	33.3	15.8	12.3		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注) I-B-1…友達に対して

I-B-2…他人に対して(通行人など)

I-B-3…先生に対して

②他傷行動が起こる直前の行動についての意識

「他傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 60 に記した。「I・[(B・1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」「I・[(B・1)-2] 注目されたい」「I・[(B・1)-3] 不安になる」「I・[(B・1)-4] 自分の世界に入る」の 4 項目いずれにおいても、有意差がみられた(各々 $\chi^2=9.045$, $df=3$, $p<.05$; $\chi^2=20.736$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=12.039$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=39.181$, $df=3$, $p<.01$)。

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、

χ^2 検定を行った。

I・[(B-1)-1] に関しては、「あまりあてはまらない」において、教師が 12.1%で親よりも高く、「あてはまらない」において、親が 20.8%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=3.846$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=5.064$, $df=1$, $p<.05$ ）。

I・[(B-1)-2] に関しては、「あてはまる」において、教師が 18.6%で親よりも高く、「あてはまらない」において、追うあが 50.7%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=9.284$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=9.765$, $df=1$, $p<.01$ ）。

I・[(B-1)-3] においては、「あてはまらない」において、親が 25.4%で教師よりも高く、有意差がみられた（ $\chi^2=6.309$, $df=1$, $p<.05$; ）。

I・[(B-1)-4] においては、「あてはまる」「ややあてはまる」において、教師が各々 10.9%・30.9%で親よりも高く、「あてはまらない」において親が 61.8%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=10.909$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=7.076$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=19.092$, $df=3$, $p<.01$ ）。

以上のことから、教師の方が親よりも「自閉症児の他傷行動が起こる直前の行動」について、認識しているということが言える。

表60 自閉症児の他傷行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合（親と教師の比較分析結果）

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 ($df=3$)	
I-(B-1)-1	親	41.7	33.3	4.2	20.8	9.045	$p<.05$
	教師	44.8	34.5	12.1	8.6		
I-(B-1)-2	親	4.1	20.5	24.7	50.7	20.736	$p<.01$
	教師	18.6	23.7	33.9	23.7		
I-(B-1)-3	親	23.9	23.9	26.8	25.4	12.039	$p<.01$
	教師	34.5	36.2	19.0	10.3		
I-(B-1)-4	親	0.0	13.2	25.0	61.8	39.181	$p<.01$
	教師	10.9	30.9	36.4	21.8		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(B-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(B-1)-2…注目されたい

I-(B-1)-3…不安になる

I-(B-1)-4…自分の世界に入る

③他傷行動が起こる原因についての意識

「他傷行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 61 に記した。「I・[(B-2)-1] 注目されたい」「I・[(B-2)-2] 欲求不満（自分自身のこと）」「I・[(B-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関して、有意差がみられた（各々 $\chi^2=$

20.760, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=11.029$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=4.733$, $df=3$, $p<.01$).

「I・[(B-2)-3] 欲求不満 (他者が関係しているコミュニケーションの問題)」に関しては、有意差は見られなかった。

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(B-2)-1] に関して、「ややあてはまる」において、教師が 28.8%で親よりも高く、「あてはまらない」について、親が 48.0%で教師よりも高く、有意差がみられた (各々 $\chi^2=5.686$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=12.931$, $df=1$, $p<.01$)。これらのことから、「自閉症児の他傷行動が起こる原因」について、教師の方が親よりも「注目されたい」からであると認識している傾向があるといえる。

I・[(B-2)-2] に関して、「あてはまらない」について、親が 25.7%で教師よりも高く、有意差がみられた ($\chi^2=8.664$, $df=1$, $p<.01$)。親・教師共に「あてはまる」「ややあてはまる」の%数値が高いので、「自閉症児の他傷行動が起こる原因」について「欲求不満 (自分自身のこと)」が原因であると、親教師共に認識する傾向にあるものの、親よりも教師の方が認識度が高いといえる。

「I・[(B-2)-4] に関して、「ややあてはまる」について、教師が 42.4%で親よりも高く、「あてはまらない」について、親が 17.8%で教師よりも高く、有意差が見られた (各々 $\chi^2=7.063$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=4.153$, $df=1$, $p<.01$)。これらのことから、「自閉症児の他傷行動が起こる原因」について、教師の方が親よりも「発達のもつれ上問題がある」と認識する傾向があるといえる。

表61 自閉症児の他傷行動が起こる原因についての意識に関する
人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(B-2)-1	親	9.3	13.3	29.3	48.0	20.760	p<.01
	教師	13.6	28.8	39.0	18.6		
I-(B-2)-2	親	28.4	35.1	10.8	25.7	11.029	p<.05
	教師	39.0	42.4	10.2	8.5		
I-(B-2)-3	親	44.6	35.1	6.8	13.5	4.733	N.S
	教師	49.2	35.6	10.2	5.1		
I-(B-2)-4	親	27.4	21.9	32.9	17.8	12.474	p<.01
	教師	20.8	43.4	28.3	7.5		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(B-2)-1…注目されたい

I-(B-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(B-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(B-2)-4…発達のもつれ上問題がある

④他傷行動への対処についての意識

「他傷行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表62に記した。「I・[(B-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」に関して、有意差がみられた($\chi^2=16.046$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(B-3)-1] 無視する(無関心を装う)」 「I・[(B-3)-2] 強制的にやめさせようとする」 「I・[(B-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、いずれも優位差はみられなかった。

有意差のみられたI・[(B-3)-3] について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行ったところ、「あまりあてはまらない」について、教師が23.2%で親よりも高く、「あてはまらない」について親が19.5%で教師よりも高く、有意差がみられた(各々 $\chi^2=6.175$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=3.919$, $df=1$, $p<.05$)。「あてはまる」「ややあてはまる」において教師が「あてはまる」よりも「ややあてはまる」の方が%数値が高く、親がその逆であることから、親よりも教師の方が、自閉症児の他傷行動への対処法として、「見通しをたてる」という手段を認識する傾向にあると考えられる。

表62 自閉症児の他傷行動への対処についての意識に関する
人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(B-3)-1	親	6.7	10.7	22.7	60.0	2.345	N.S
	教師	3.5	12.3	29.8	54.4		
I-(B-3)-2	親	28.0	34.7	18.7	18.7	3.219	N.S
	教師	31.0	43.1	13.8	12.1		
I-(B-3)-3	親	28.6	42.9	9.1	19.5	16.046	p<.01
	教師	41.1	26.8	23.2	8.9		
I-(B-3)-4	親	31.6	43.4	11.8	13.2	5.990	N.S
	教師	42.1	36.8	15.8	5.3		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-3)-1…無視する(無関心を装う)

I-(B-3)-2…強制的にやめさせようとする

I-(B-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I-(B-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

⑤他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表63に記した。「I-[(B-4)-1]仕方なく他傷行動をやめる」「I-[(B-4)-3]一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=24.979$, df=3, p<.01; $\chi^2=31.625$, df=3, p<.01)。「I-[(B-4)-2]納得した上で他傷行動をやめる」に関しては有意差が見られなかった。

表63 自閉症児の他傷行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(B-4)-1	親	26.0	30.1	16.4	27.4	24.979	p<.01
	教師	14.0	57.9	21.1	7.0		
I-(B-4)-2	親	16.4	31.5	31.5	20.5	0.136	N.S
	教師	16.1	33.9	30.4	19.6		
I-(B-4)-3	親	8.2	28.8	28.8	34.2	31.625	p<.01
	教師	19.6	53.6	19.6	7.1		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I-(B-4)-1…仕方なく他傷行動をやめる

I-(B-4)-2…納得した上で他傷行動をやめる

I-(B-4)-3…一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

有意差のみられた2つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、

χ^2 検定を行った。

I・[(B-4)-1] に関して、「ややあてはまる」において、教師が 57.9%で親よりも高く、「あてはまらない」に関して、親が 27.0%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=8.752$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=12.068$, $df=1$, $p<.01$ ）。これらのことから、「他傷行動への対応後における自閉症児の行動」について、教師の方が親よりも「仕方なく他傷行動をやめる」と認識する傾向があると言える。

I・[(B-4)-3]に関して、「あてはまる」「ややあてはまる」について教師が各々 19.6%・53.6%で親よりも高く、「あてはまらない」については、親が 34.2%で、教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=4.684$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.472$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=17.749$, $df=1$, $p<.01$ ）。これらのことから、「他傷行動への対応後における自閉症児の行動」について、教師の方が親よりも「一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する」ことを認識していると言える。

(3)破壊行動に関する意識

①気になる破壊行動の頻度

「気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合」を表 64 に記した。「I・[C-1]壊すことを目的とする」に関して、有意差がみられた（ $\chi^2=18.417$, $df=3$, $p<.01$ ）。

「I・[C-2]壊すことを目的としない（投げたり落としたりすることで、結果的に壊れることもある）」に関しては、有意差がみられなかった。

表64 親と教師の自閉症児の気になる破壊行動の頻度に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I - C - 1	親	3.8	11.3	26.3	58.8	18.417	p<.01
	教師	15.8	22.8	28.1	33.3		
I - C - 2	親	31.3	22.5	13.8	32.5	3.791	N.S
	教師	27.3	32.7	16.4	23.6		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注) : I - C - 1…壊すことを目的とする

I - C - 2…壊すことを目的としない

有意差のみられた I・[C-1]について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行ったところ、「あてはまる」「ややあてはまる」「あてはまらない」について、

有意差がみられた（各々 $\chi^2=7.418$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=3.922$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.015$, $df=1$, $p<.01$ ）。

②破壊行動が起こる直前の行動についての意識

「破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 65 に記した。「I・[(C-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」「I・[(C-1)-2] 注目されたい」「[(C-1)-3] 不安になる」「I・[(C-1)-4] 自分の世界に入る」の4項目全てに関して、有意差がみられた（各々 $\chi^2=10.75$, $df=3$, $p<.05$; $\chi^2=24.612$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=35.084$, $df=3$, $p<.05$; $\chi^2=32.454$, $df=3$, $p<.01$ ）。

有意差のみられた4つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

表65 自閉症児の破壊行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合（親と教師の比較分析結果）

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 ($df=3$)	
I-(C-1)-1	親	28.4	25.7	12.2	33.8	10.748	$p<.05$
	教師	42.1	33.3	8.8	15.8		
I-(C-1)-2	親	8.2	20.5	16.4	54.8	24.612	$p<.01$
	教師	14.0	15.8	43.9	26.3		
I-(C-1)-3	親	8.3	20.8	27.8	43.1	35.084	$p<.01$
	教師	37.5	30.4	14.3	17.9		
I-(C-1)-4	親	2.8	21.1	14.1	62.0	32.454	$p<.01$
	教師	13.0	29.6	33.3	24.1		

$p<.01$ …1%有意 $p<.05$ …5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(C-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(C-1)-2…注目されたい

I-(C-1)-3…不安になる

I-(C-1)-4…自分の世界に入る

I・[(C-1)-1] に関して、「あてはまらない」において、親が 33.8%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=6.532$, $df=1$, $p<.05$ ）。

I・[(C-1)-2] に関して、「あまりあてはまらない」において、教師が 43.9%で親よりも高く、「あてはまらない」において、親が 54.8%で教師よりも高く、有意差がみられた（各々 $\chi^2=12.470$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=9.999$, $df=1$, $p<.01$ ）。

I・[(C-1)-3]に関して、「あてはまる」において、親が 37.5%、で教師よりも高く、「あまりあてはまらない」に関して、親が 27.8%で教師よりも高く、「あてはまらない」に関して、親が 43.1%で教師よりも高く有意差がみられた（各々 $\chi^2=18.561$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=4.328$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=10.424$, $df=1$, $p<.01$ ）。

I・[(C-1)-4]に関して、「あてはまる」において、親が 13.0%、で教師よりも高く、「あまりあてはまらない」に関して、教師が 33.3%で親よりも高く、「あてはまらない」に関して、親が 62.0%で教師よりも高く有意差がみられた（各々 $\chi^2=6.524$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.814$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=16.692$, $df=1$, $p<.01$ ）。

③破壊行動が起こる原因についての意識

「破壊行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 66 に記した。「I・[(C-2)-1] 注目されたい」「I・[(C-2)-2] 欲求不満（自分自身のこと）」「I・[(C-2)-3] 欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」「I・[(C-2)-4] 発達のもつれ上問題がある」に関して、いずれも有意差がみられなかった。

表66 自閉症児の破壊行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合（親と教師の比較分析結果）

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(C-2)-1	親	15.1	27.4	17.8	39.7	4.284	N.S
	教師	17.5	31.6	24.6	26.3		
I-(C-2)-2	親	32.9	30.0	12.9	24.3	4.711	N.S
	教師	39.3	37.5	7.1	16.1		
I-(C-2)-3	親	41.1	30.1	8.2	20.5	2.679	N.S
	教師	35.7	41.1	7.1	16.1		
I-(C-2)-4	親	24.6	30.4	18.8	26.1	2.970	N.S
	教師	26.5	36.7	20.4	16.3		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(C-2)-1…注目されたい

I-(C-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I-(C-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I-(C-2)-4…発達のもつれ上問題がある

④破壊行動への対処についての意識

「破壊行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表 67 に記した。「I・[(C-3)-1] 無視する（無関心を装う）」「I・[(C-3)-2] 強制的にやめさせようとする」「I・[(C-3)-3] 見通しをたてる（環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど）」「I・[(C-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、そ

の子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して、いずれも有意差がみられなかった。

表67 自閉症児の破壊行動への対処についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I -(C-3)-1	親	7.6	22.7	28.8	40.9	0.610	N.S
	教師	10.7	21.4	28.6	39.3		
I -(C-3)-2	親	20.3	37.7	14.5	27.5	4.481	N.S
	教師	16.1	44.6	21.4	17.9		
I -(C-3)-3	親	26.9	31.3	17.9	23.9	3.031	N.S
	教師	34.5	27.3	21.8	16.4		
I -(C-3)-4	親	36.2	29.0	14.5	20.3	1.543	N.S
	教師	33.3	37.0	13.0	16.7		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I -(C-3)-1…無視する(無関心を装う)

I -(C-3)-2…強制的にやめさせようとする

I -(C-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

I -(C-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

⑤破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

表68 自閉症児の破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I -(C-4)-1	親	16.2	33.8	19.1	30.9	21.041	p<.01
	教師	14.0	64.0	6.0	16.0		
I -(C-4)-2	親	5.9	36.8	25.0	32.4	1.561	N.S
	教師	6.0	36.0	32.0	26.0		
I -(C-4)-3	親	14.9	23.9	23.9	37.3	13.700	p<.01
	教師	15.7	45.1	21.6	17.6		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I -(C-4)-1…仕方なく破壊行動をやめる

I -(C-4)-2…納得した上で破壊行動をやめる

I -(C-4)-3…一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する

「破壊行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表68に記した。「I - [(C-4)-1] 仕方なく破壊行動をやめる」「I - [(C-4)-3] 一度破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=21.041$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=13.700$, $df=3$, $p<.01$)。「I - [(C-4)-2] 納得した上で破壊行動をやめる」に関しては、有意差がみられなかった。

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(C-4)-1] に関して、「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」について、有意差がみられた(各々 $\chi^2=9.309$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=6.851$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=4.724$, $df=1$, $p<.05$)。

I・[(C-4)-3] に関して、「ややあてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた(各々 $\chi^2=6.526$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.037$, $df=1$, $p<.01$)。

(4)挑発行動に関する意識

①気になる挑発行動の頻度

「気になる挑発行動の頻度に関する人数及び割合」を表 69 に記した。「I・[D-1]いたずらの行動」「I・[D-2]嫌がらせ的行動」「I・[D-3]意図的な攻撃行動」全てに関して、有意差がみられた(各々 $\chi^2=14.799$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=19.675$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=21.330$, $df=3$, $p<.01$)。

有意差のみられた 3 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

表69 親と教師の自閉症児の気になる挑発行動の頻度に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df =3)	
I -D-1	親	12.8	29.5	12.8	44.9	14.799	p<.01
	教師	26.4	24.5	24.5	24.5		
I -D-2	親	10.1	12.7	12.7	64.6	19.675	p<.01
	教師	21.6	21.6	23.5	33.3		
I -D-3	親	14.1	24.4	15.4	46.2	21.330	p<.01
	教師	30.2	30.2	22.6	17.0		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I -D-1…いたずらの行動
I -D-2…嫌がらせ的行動
I -D-3…意図的な攻撃行動

I・[D-1] に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた(各々 $\chi^2=4.710$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=5.963$, $df=1$, $p<.05$)。

I・[D-2]に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=4.131$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=9.959$, $df=1$, $p<.01$ ）。

I・[D-3]に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=5.842$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=13.480$, $df=1$, $p<.05$ ）。

②挑発行動が起こる直前の行動についての意識

表70 自閉症児の挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(D-1)-1	親	18.3	21.1	21.1	39.4	7.257	N.S
	教師	30.0	28.0	16.0	26.0		
I-(D-1)-2	親	25.4	28.2	15.5	31.0	1.416	N.S
	教師	27.5	31.4	17.6	23.5		
I-(D-1)-3	親	12.3	19.2	27.4	41.1	19.643	p<.01
	教師	23.5	39.2	15.7	21.6		
I-(D-1)-4	親	4.2	12.7	56.3	26.8	26.188	p<.01
	教師	10.0	38.0	26.0	26.0		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(D-1)-1…他人が関係していることについてイライラする。

I-(D-1)-2…注目されたい

I-(D-1)-3…不安になる

I-(D-1)-4…自分の世界に入る

「挑発行動が起こる直前の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 70 に記した。「I・[(D-1)-3] 不安になる」「I・[(D-1)-4] 自分の世界に入る」に関して、有意差がみられた（各々 $\chi^2=19.643$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=26.188$, $df=3$, $p<.01$ ）。「I・[(D-1)-1] 他人が関係していることについてイライラする」「I・[(D-1)-2] 注目されたい」に関しては、有意差がみられなかった。

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(D-1)-3] に関して、「ややあてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=6.876$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=6.085$, $df=1$, $p<.05$ ）。

I・[(D-1)-4] に関して、「ややあてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=12.65$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=11.18$, $df=1$, $p<.01$ ）。

③挑発行動が起こる原因についての意識

「挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合」を表 71 に記した。「I・[(D-2)・2] 欲求不満（自分自身のこと）」「I・[(D-2)・3] 欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」「I・[(D-2)・4] 発達のもつれ上問題がある」に関して、有意差がみられた（各々 $\chi^2=23.674$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=12.671$, $df=3$, $p<.01$; $\chi^2=18.084$, $df=3$, $p<.01$ ）。「[(D-2)・1] 注目されたい」に関しては、有意差はみられなかった。

表71 自閉症児の挑発行動が起こる原因についての意識に関する人数及び割合（親と教師の比較分析結果）

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I -(D-2)-1	親	23.3	28.8	13.7	34.2	5.238	N.S
	教師	26.4	39.6	13.2	20.8		
I -(D-2)-2	親	11.1	29.2	23.6	36.1	23.674	p<.01
	教師	34.6	36.5	11.5	17.3		
I -(D-2)-3	親	21.9	38.4	8.2	31.5	12.671	p<.01
	教師	39.6	37.7	9.4	13.2		
I -(D-2)-4	親	18.6	28.6	10.0	42.9	18.084	p<.01
	教師	18.8	47.9	16.7	16.7		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注: I -(D-2)-1…注目されたい

I -(D-2)-2…欲求不満(自分自身のこと)

I -(D-2)-3…欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

I -(D-2)-4…発達のもつれ上問題がある

有意差のみられた 2 つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(D-2)・2] に関して、「あてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=12.082$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=4.147$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=6.619$, $df=1$, $p<.05$ ）。

I・[(D-2)・3] に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=5.094$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=7.489$, $df=1$, $p<.01$ ）。

I・[(D-2)・4] に関して、「ややあてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた（各々 $\chi^2=4.893$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2=11.524$, $df=1$, $p<.01$ ）。

④ 挑発行動への対処についての意識

表72 自閉症児の挑発行動への対処についての意識に関する
人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I-(D-3)-1	親	13.9	33.3	15.3	37.5	4.576	N.S
	教師	23.1	30.8	19.2	26.9		
I-(D-3)-2	親	4.2	38.9	25.0	31.9	11.456	p<.01
	教師	15.4	36.5	30.8	17.3		
I-(D-3)-3	親	16.4	38.4	13.7	31.5	12.826	p<.01
	教師	32.1	32.1	20.8	15.1		
I-(D-3)-4	親	26.8	31.0	12.7	29.6	7.995	p<.05
	教師	33.3	41.2	11.8	13.7		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I-(D-3)-1…無視する(無関心を装う)
I-(D-3)-2…強制的にやめさせようとする
I-(D-3)-3…見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)
I-(D-3)-4…一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

「挑発行動への対処についての意識に関する人数及び割合」を表72に記した。「I・[(D-3)-2] 強制的にやめさせようとする」「I・[(D-3)-3] 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)」「I・[(D-3)-4] 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」に関して有意差がみられた(各々 $\chi^2=11.456$, df=3, p<.01; $\chi^2=12.826$, df=3, p<.01; $\chi^2=7.995$, df=3, p<.05)。「I・[(D-3)-1] 無視する(無関心を装う)」に関してには、有意差がみられなかった。

有意差のみられた3つの項目について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行った。

I・[(D-3)-2] に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた(各々 $\chi^2=6.437$, df=1, p<.05; $\chi^2=4.350$, df=1, p<.05)。

I・[(D-3)-3] に関して、「あてはまる」「あてはまらない」について、有意差がみられた(各々 $\chi^2=5.040$, df=1, p<.05; $\chi^2=5.780$, df=1, p<.05)。

I・[(D-3)-4] に関して、「あてはまらない」について、有意差がみられた($\chi^2=5.803$, df=1, p<.05)。

⑤挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

「挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合」を表 73 に記した。「I・[(D-4)-3] 一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して有意差がみられた ($\chi^2=14.353$, $df=3$, $p<.01$)。「I・[(D-4)-1] 仕方なく挑発行動をやめる」「I・[(D-4)-2] 納得した上で挑発行動をやめる」に関しては、優位差がみられなかった。

有意差のみられた I・[(D-4)-3] について、親と教師の「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の各々の結果の%同士について、 χ^2 検定を行ったところ、「あまりあてはまらない」において有意差がみられた ($\chi^2=5.922$, $df=1$, $p<.05$)。

表73 自閉症児の挑発行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関する人数及び割合(親と教師の比較分析結果)

項目		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	χ^2 検定 (df=3)	
I -(D-4)-1	親	5.7	41.4	21.4	31.4	7.698	N.S
	教師	12.2	46.9	24.5	16.3		
I -(D-4)-2	親	7.1	27.1	27.1	38.6	2.959	N.S
	教師	10.2	34.7	26.5	28.6		
I -(D-4)-3	親	15.5	36.6	18.3	29.6	14.353	p<.01
	教師	22.9	54.2	6.3	16.7		

p<.01…1%有意 p<.05…5%有意 N.S…有意差なし

注): I -(D-4)-1…仕方なく挑発行動をやめる

I -(D-4)-2…納得した上で挑発行動をやめる

I -(D-4)-3…一度挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する

5. 自由記述式アンケート結果（項目Ⅱ～Ⅴ）の分析

(1) 日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み

① カテゴリー分け

「コミュニケーション方法」「対処法」「教師の指導法に関する悩み」「親の養育方法に関する悩み」「家庭生活の問題に関する悩み」「性的問題」「その他」の7つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

ア. コミュニケーション方法

本人から周囲の人達へのコミュニケーションの問題及び周囲の人達から本人へのコミュニケーションに関する悩みについて記述されている回答を「コミュニケーション方法」カテゴリーに分類した。

例えば、「コミュニケーションがうまく取れないため、自分の気持ちと違うことを強要されたり、イライラしてくると、他人を噛んでしまう」（親）「言葉によるコミュニケーションが難しく、意思が伝わった時とそうでないときの対応が難しい」（教師）などである。

イ. 対処法

問題行動をなくすための方法に関する悩みについて記述されている回答を「対処法カテゴリー」に分類した。

例えば、「周囲の目が気になったりするので、問題行動を根本的にやめさせる支援の前に無理にやめさせてしまうことが多くなってしまうこと」（親）「他傷におよぶ際、何らかの動機があることは確かだと思うのだが、問題行動以前に気付くことは難しい」（教師）などである。

ウ. 教師の指導法に関する悩み

教師の自閉症児に対する指導法に関する悩みについて記述されている回答を「教師の指導法に関する悩み」カテゴリーに分類した。親の回答は、教師の自閉症児の問題行動に対する理解や指導・支援方法に対する不満が多数であり、教師の回答は、自閉症児の問題行動に対する指導・支援方法に関する自らの悩みが多数であった。

例えば、「担任は理解してくれているが、他の先生との連携が取れていなくて、子どもへの接し方の理解が不十分」（親）「その行動がどのような背景で起こって

いるのかわからない時がある。前年度担任教員との共通理解不足」（教師）といった、教師同士の連携に関する悩みや、「問題として良いのか悪いのか」（教師）「障害か性格かで悩んだことがある」（教師）など、問題行動を「問題」とすることへの悩みや、「明らかに原因のわからないことも多く、即効性のある対応もないため、こだわりに転じることも多い」（教師）など、問題行動の原因追究、対処についての悩み。一方で「先生とのコミュニケーション不足。理解の薄さ。対応の悪さ」（親）などがある。

エ．親の養育方法に関する悩み

「ウ」の「教師の指導法に関する悩み」の内容を踏まえ、設定したカテゴリーである。「母親だけが自分のことをわかっていてくれていると思っているようで、全部ぶつけてくる。他の人には見せない面もあり、周りに言っても本人はいつもおとなしいので、理解してもらえないことが多い。家でもパニックが起き、協力はしてもらえが、本人を抑えるのは私しか今のところ出来ない」（親）の1件のみであった。

オ．家庭生活の問題に関する悩み

家・家庭という単語を使用し、主に家の中での問題に関する悩みについて記述されている回答を「家庭生活の問題に関する悩み」カテゴリーに分類した。

例えば、「家の中で壁を叩いたり、床を踏みならしたりするので、ご近所に迷惑がかかる」（親）「本人が暇になってきたりすると、わざと飛び跳ねる、お茶をこぼす、妹を押すなどする。忙しいときに限ってするので私はイライラする」（親）などである。

カ．性的問題

「床に性器をこすりつける行動がある」など、性的な問題行動に関する悩みについて記述されている回答を「性的問題」カテゴリーに分類した。

キ、その他

「大きな声で独り言を言う」（親）など、直接問題行動を述べているものや、「高い所、不安定な所が好きなので、危険なことがあるので心配」（親）「周囲の人に怪我をさせること。突然走り出して道路に飛び出すこと。身体が大きいので、とっさにとめられないのが一番怖い（命にかかわることなので）」（教師）など、命に関わる危険性に関する悩み、「対応の仕方、保護者との考え方が違う時など」（教師）「自閉症児の問題行動は、学校あるいは家庭、地域で一緒に取り組むべきだが、担任一人の責任を問われることが負担」（教師）など、親と教師、あるいは地域との連携についての悩みなどがみられた。

②カテゴリーの比較分析

ア．親と教師各々の分析

回答人数と件数、及びカテゴリー分け一致率は、親が各々69人・69件・94.2%、教師が44人・46件・95.7%であった。

各カテゴリー間の件数の偏りを見るため、親・教師各々の結果について χ^2 検定を行った。

表74 日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み(親)

	コミュニケーション方法	対処法	教師の指導法に関する悩み	親の養育方法に関する悩み	家庭生活の問題に関する悩み	性的問題	その他		
件数	20	14	10	1	6	4	14	26.870	p<.01
%	28.6%	20.0%	14.3%	1.4%	8.6%	5.7%	20.0%		

表74は、親の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1位が「コミュニケーション方法」で20件（28.6%）、2位・3位が「対処法」「その他」で各々14件（20.0%）。以下、「教師の指導法に関する悩み」で10件（14.3%）。「家庭生活の問題に関する悩み6件（8.6%）」「性的問題（4件、5.7%）」「親の養育法に関する悩み（1件、1.4%）」であり、各カテゴリーの件数に有意差がみられた（ $\chi^2=26.870$, $df=6$, $p<.01$ ）。

表75 日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み(教師)

	コミュニケーション方法	対処法	教師の指導法に関する悩み	親の養育方法に関する悩み	家庭生活の問題に関する悩み	性的問題	その他	統計的有意性	
件数	9	11	15	0	0	1	10	34.348	p<.01
%	20.5%	25.0%	34.1%	0.0%	0.0%	2.3%	22.7%		

表 75 は、教師の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1 位が「教師の指導法に関する悩み」で 15 件 (34.1%)、2 位が「対処法」で 11 件 (25.0%)、3 位が「その他」で 10 件 (22.7%)。以下、「コミュニケーション方法 (9 件、20.5%)」「性的問題 (1 件、2.3%)」「親の養育法に関する悩み (0 件、0.0%)」「家庭生活の問題に関する悩み (0 件、0.0%)」であり、各カテゴリーの件数に有意差がみられた ($\chi^2=34.348$, $df=6$, $p<.01$)。

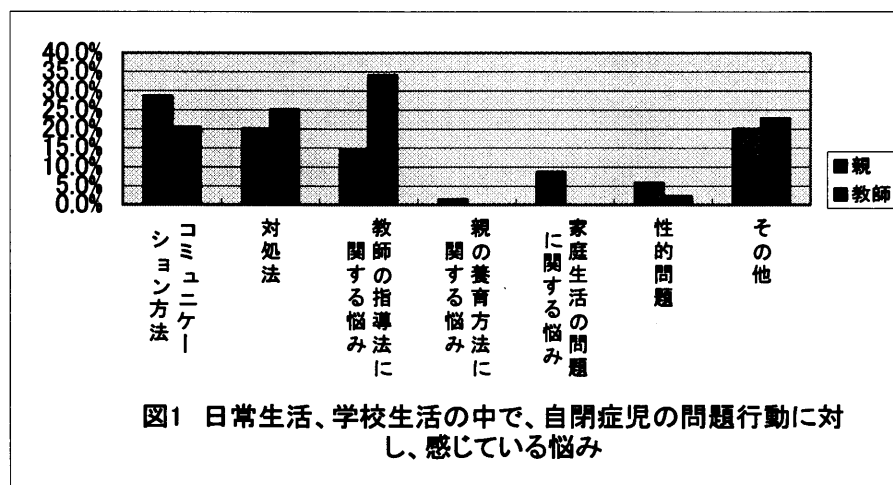
イ. 親と教師のカテゴリー比較分析

親と教師の差をみるために、各カテゴリーの%同士を χ^2 検定した。表 76 と図 1 は、親と教師各々のカテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。

「教師の指導法に関する悩み」に関して、教師の方が統計的に有意に高く、「家庭生活」に関して、親の方が統計的に有意に高かった(各々、 $\chi^2=8.108$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=8.571$, $df=1$, $p<.01$)。「コミュニケーション方法」「対処法」「親の養育方法に関する悩み」「性的問題」「その他」に関しては、有意差がみられなかった。

表76 日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み(親と教師)

Ⅱ	親		教師		χ^2 検定(df=1)	
	件数	%	件数	%		
コミュニケーション方法	20	28.6%	9	20.5%	1.344	N.S
対処法	14	20.0%	11	25.0%	0.556	N.S
教師の指導法に関する悩み	10	14.3%	15	34.1%	8.108	$p<0.01$
親の養育方法に関する悩み	1	1.4%	0	0.0%	1.429	N.S
家庭生活の問題に関する悩み	6	8.6%	0	0.0%	8.571	$p<0.01$
性的問題	4	5.7%	1	2.3%	1.483	N.S
その他	14	20.0%	10	22.7%	0.174	N.S



(2)自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと

①カテゴリー分け

「見通し・わかりにくさの軽減」「コミュニケーションの確立」「子どもの状態理解」「自尊感情を育てる」「安心感・ストレスを与えない」「活動・趣味の提供」「教育指導法」「その他」の8つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

ア. 見通しのわかりにくさ

見通しやスケジュールの重要性、及びわかりにくさの軽減の重要性について記述されている回答のカテゴリーを「見通しのわかりにくさ」カテゴリーに分類した。

例えば、「自分の生活やそのリズムに見通しをもたせ、その変更は早めに伝える」（教師）「見通しを立ててやることで、問題行動が軽減したように思う」（親）「環境を整備して、分かりにくい世界をわかりやすい世界にしていくことが不安の軽減につながり、本人の体験してみようという意欲も引き出すことにつながる。」（親）などである。

イ. コミュニケーションの確立

主に「伝える」「コミュニケーション」という単語を使用し、子供とのコミュニケーションの重要性について記述されている回答「コミュニケーションの確立カテゴリー」に分類した。

例えば、「拒否や嫌なことを何らかの形で人に伝える手段があれば軽減できるのでは・・・と思います」（親）「本人が何を考えているのか、どうしたいのかをちゃんと伝えられ、周りもそれを気づけるようになればいいのだが、難しい」（親）「何らかのコミュニケーションの手段を探し出し、本人の意思がこちらに伝わることが大事だと思う」（教師）「自閉症児の不安感や彼らの意志を十分くみ取って十分コミュニケーションを絶えず取ること」（教師）などである。

ウ. 子どもの状態理解

問題行動の根本的な原因追究、子ども独自の障害特性の理解、体調管理など、子どもの状態理解の重要性について記述されている回答を「子どもの状態理解カテゴリー」に分類した。

例えば、「ささいなことでもその子のつまづいている点に気付いてあげ、そのつど解決させる」（親）「過ごしやすい、それぞれの子どもに合った環境と周囲のその子に対する理解」（教師）「子どもの障害特性をもっと理解してもらおう。学校や周りの都合ではなく、子どもの立場で考えることが必要」（親）などである。

エ. 自尊感情を育てる

自尊感情を育てることの重要性について記述されている回答を「自尊感情を育てるカテゴリー」に分類した。

例えば、「成功例を増やしてあげ、自分自身に自信をつけさせてあげています」

（親）「やりごたえや充実感を得られる生活を作り出すこと」（教師）などである。

オ．安心感・ストレスを与えない

子どもに安心感を与えることや、安心感の持てるような環境作り、及び、ストレス軽減の重要性について記述されている回答を「安心感・ストレスを与えない」カテゴリーに分類した。

例えば、「安心を感じ取れる時間をはさむなどの配慮」（教師）「想いや欲求を満たすことと、心の落ち着き、環境、周囲に対する安心感も大事だと思います」（教師）「絶対に無理強いしないこと。嫌なことはしなくて良いよと拒否したことは、受けてあげる」（親）

カ．活動・趣味の提供、発見

子どもに楽しめる活動や趣味を提供したり、発見できる環境を与えることの重要性について記述されている回答を「活動・趣味の提供、発見」カテゴリーに分類した。

例えば、「小さいうちから対人関係は難しいとされるが、少しずつ慣れさせることが大事だと思う。環境整備も、発達してきたら、なくしていく方向性が必要。人に対して触れ合うこと。集団を少しずつ増やすこと」（親）「本人が好きな余暇をたくさん持っているということが大切に最近思ってきました」（親）「子どもがしたいこと、好きなことを十分に理解し、指導の中に織り交ぜながら楽しい活動を行っていくことが大切だと思います」（教師）などである。

キ．教育指導法

教育指導法の重要性について記述されている回答を「教育指導法」カテゴリーに分類した。なお、学校においての教師同士の連携や、教師の自閉症の特徴及び問題行動の対処法についての知識について述べている回答もこのカテゴリーに含む。

例えば、「全教職員が丁寧に子どもの様子を伝え合ったり、引き継ぎ行ったりして学校全体で見ていく体制を取ること」（教師）「受け入れることは大切であるが、社会生活を送る中でのルールは毅然と考えていく必要があると考える（特にある程度理解する力）」（教師）「問題行動を起こした時の対応法を周囲の大人は共通認

識として持っておく。その子なりの理由があるが、絶対にしてはならないことは厳しく叱る」（教師）「応用行動分析等の手法を用いて、問題行動に替わる適切な行動の仕方を教えていくこと」（教師）などである。

ク. その他

「誰にとっての軽減か、何のための軽減かにより、違うと思う」（親）「刺激を与えず、「つまらないこと」という認識にする」（親）や、「静かでのんびりとした学習環境。暑くもなく、寒くもない教室環境、室内環境の安定をはかる」（教師）「体力作りや身辺自立を育てることで、少しずつ問題行動が減っていくこともある」（教師）などを「その他」カテゴリーに分類した。

②カテゴリーの比較分析

ア. 親と教師各々の分析

表77 自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと(親)

	見通し・わかりにくさの軽減	コミュニケーションの確立	子どもの状態理解	自尊感情を育てる	安心感・ストレスを与えない	活動・趣味の提供、発見	教育指導法	その他		
件数	20	11	25	4	16	9	0	4	47.180	p<.01
%	28.6%	15.7%	35.7%	5.7%	22.9%	12.9%	0.0%	5.7%		

回答人数と件数、及びカテゴリー分け一致率は、親が各々80人・89件・97.8%、教師が56人・56件・95.6%であった。

各カテゴリー間の件数の偏りを見るため、親・教師各々の結果について χ^2 検定を行った。

表77は親の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1位が「子どもの状態理解」で25件(35.7%)、2位が「見通し・わかりにくさの軽減」で20件(28.6%)、3位が「安心感・ストレスを与えない」で16件(22.9%)。以下、「コミュニケーションの確立(11件、15.7%)」「活動・趣味の提供、発見(9件、12.9%)」「自尊感情を育てる(4件、5.7%)」「その他(4件、5.7%)」「親の養育法に関する悩み(1件、1.4%)」「教育指導法(0件、0.0%)」で、各カテゴリーの件数に有意差がみられた($\chi^2=47.180$, $df=7$, $p<.01$)。

表78は教師の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたもの

である。1位が「子どもの状態理解」で15件(31.3%)、2位が「見通し・わかりにくさの軽減」で10件(20.8%)、3位が「安心感・ストレスを与えない」で9件(18.8%)。以下、「コミュニケーションの確立(7件、14.6%)」「教育指導法(6件、12.5%)」「その他(5件、10.4%)」「自尊感情を育てる(3件、6.3%)」「活動・趣味の提供、発見(1件、2.1%)」であり、各カテゴリーの件数に有意差がみられた($\chi^2=19.143$, $df=7$, $p<.05$)。

表78 自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと(教師)

	見通し・わかりにくさの軽減	コミュニケーションの確立	子どもの状態理解	自尊感情を育てる	安心感・ストレスを与えない	活動・趣味の提供、発見	教育指導法	その他		
件数	10	7	15	3	9	1	6	5	19.143	p<.05
%	20.8%	14.6%	31.3%	6.3%	18.8%	2.1%	12.5%	10.4%		

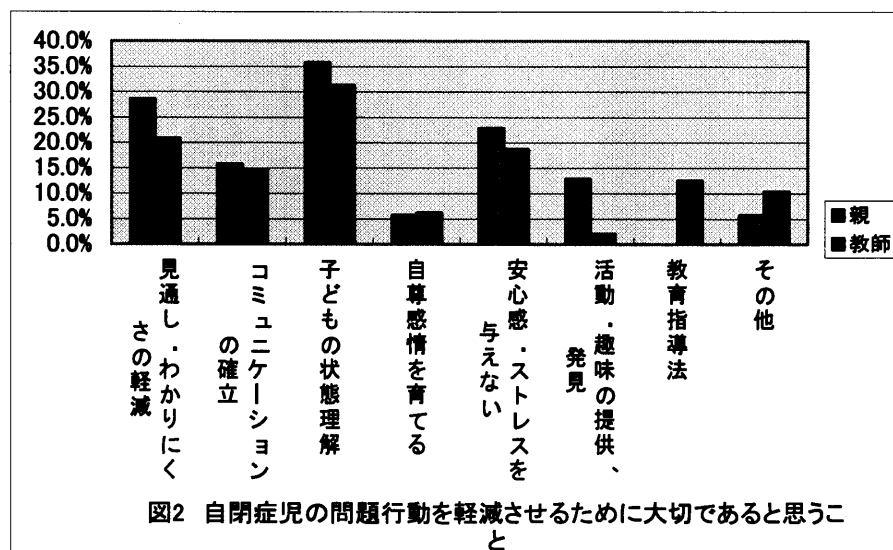
イ. 親と教師の比較検討

親と教師の結果の差をみるために、各カテゴリーの%同士を χ^2 検定した。表79と図2は、親と教師各々のカテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。

「活動・趣味の提供、発見」に関して、親の方が統計的に有意に高く、「教育指導法」に関して、教師の方が統計的に有意に高かった(各々、 $\chi^2=7.769$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2=12.500$, $df=1$, $p<.01$)。「見通し・わかりにくさの軽減」「コミュニケーションの確立」「子どもの状態理解」「自尊感情を育てる」「安心感・ストレスを与えない」「その他」に関しては有意差がみられなかった。

表79 自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと(親と教師)

Ⅲ	親		教師		χ^2 検定(df=1)	
	件数	%	件数	%		
見通し・わかりにくさの軽減	20	28.6%	10	20.8%	1.212	N.S
コミュニケーションの確立	11	15.7%	7	14.6%	0.042	N.S
子どもの状態理解	25	35.7%	15	31.3%	0.298	N.S
自尊感情を育てる	4	5.7%	3	6.3%	0.024	N.S
安心感・ストレスを与えない	16	22.9%	9	18.8%	0.405	N.S
活動・趣味の提供、発見	9	12.9%	1	2.1%	7.769	
教育指導法	0	0.0%	6	12.5%	12.500	
その他	4	5.7%	5	10.4%	1.371	N.S



(3) 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード

① カテゴリー分け

「自我の発達」「本人なりに) 状況に即した判断」「コミュニケーションの発達」「興味関心の変化・多様化」「問題行動の変化・軽減」「その他」の6つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

ア. 自我の発達

自我とは、自分が自らの行為を主体であることを意識することであり、自分と他

者との区別された関係との調整・共同でもある（白石,2005b）。自我は、1歳後半に誕生（自我の誕生）し、その後「自我の拡大」「自我の充実」「自我の発展」「自制心の形成」と順を追って発達していく（田中・田中, 1986・1990）。田中らの定義する自我の発達の流れを参考に、自我の発達についての記述がされていると読み取れる回答を、「自我の発達」カテゴリーに分類した。

例えば、「自分の意志がうまく伝わらず、自分の頭を叩いている時などはよく思う」（親）「他人を傷つけるような言葉を言おうとした時に言葉をのむ姿を見た時」（親）「以前は問題行動もなかったのですが、自分のしたくないことをさせられる時などの自傷行為が出てきているように思う」（親）「小さいときは、スケジュールにそってやっていたことも、自我の芽生えと共に拒否することも出てきた」（教師）「同じストレスに対して段階的に我慢できるようになる」（教師）などである。

イ．（本人なりに）状況に即した判断

「周りを見て、（こちらの促しなしで）問題行動を抑えることができたとき」（教師）「突発的に他傷や自傷行動をしてしまっても、謝ることができたり、指導者のこえかけだけでやめることができるようになってきた」（教師）「他傷行動の時に、優しい人や怒らない人等を見極める」（親）など、本人なりに状況に即した判断について記述されている回答を「（本人なりに）状況に即した判断」カテゴリーに分類した。

ウ．コミュニケーションの発達

文章の中で、主に「伝える」「コミュニケーション」という言葉を使用し、本人から周囲の人達へのコミュニケーション能力の向上・手段の多様化について記述されている回答を「コミュニケーションの発達」カテゴリーに分類した。

例えば、「拒否を相手に伝えられず、怒り出し、問題行動。（つねったり、髪の毛を引っ張ったり服を脱いだり、放尿したり）で表現していた生徒が、絵カードや言葉で伝えたり、変更を要求したりできるようになり、怒ったり問題行動が減ったこと」（教師）「～に行きたい、～が欲しいなど、要求ができるようになった」（教師）「不適切な表現ではあるものの、本人発の発信であること」（親）「癇癪を起こしているときに言葉が前より上手く使えて伝えられてる時」（親）などである。

エ．興味関心の変化・多様化

問題行動の対象となる人や物などへの興味感心の変化・多様化について記述されている回答を「興味関心の変化・多様化」カテゴリーに分類した。

例えば、「友達の反応を意識する(楽しむ?)様子が見られた時」。(教師)「急に興味をひかれて物を分解したり、人に触れてみたりするとき、世界が広がっているのだろうと感じます」(親)などである。

オ．問題行動の変化・軽減

文章の中で、主に「問題行動」という言葉を使用し、その問題行動が違う行動に変化したり軽減することが読み取れる回答を問題行動の変化・減少のカテゴリーに分類する。

例えば、「牛乳瓶投げがおさまったと思ったら、爪噛みが始まる」(親)「問題行動になる原因の内容が変わったこと」(親)「物を投げる行為が減ったりしたとき」(教師)などである。

カ．その他

「問題行動の中から成長は感じない」(親)「問題行動の中に成長発達を感じる」という意味がわかりません」(教師)といった回答が、親1件、教師2件得られた。また、「問題行動の中、というわけではなく、彼らも一つの個性として日々成長しているということはいつも感じていることです」(教師)といった、問題行動を個性としてとらえている回答が親・教師とも1件ずつ得られた。その他には、「一緒にマラソンをするが、走っている時は落ち着き、時には歌を歌っていたり、一人でおしゃべりをしている。あまり追い立てずマイペースで走るのがいいようだ」(教師)「女の子なので小さい時は許されたけれど、大きくなるに連れ、脚を揃えて座る等、NGになる事柄が増えてきました」(親)など、問題行動とは直接関係のない回答も、このカテゴリーに分類した。

②カテゴリーの比較分析

ア．親と教師各々の分析

回答人数と件数、及びカテゴリー分け一致率は、親が各々58人・56件・98.0%、

教師が 41 人・45 件・98.0%であった。

各カテゴリー間の件数の偏りを見るため、親・教師各々の結果について χ^2 検定を行った。親の結果を表に、教師の結果を表に記した。

表 80 は親の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1 位が「問題行動の変化・軽減」で 21 件 (36.2%)、2 位が「自我の発達」で 16 件 (27.6%)、3 位が「興味関心の変化・多様化」で 7 件 (12.1%)。以下、「コミュニケーションの発達 (5 件、8.6%)」「その他 (5 件、8.6%)」「(本人なりに) 状況に即した判断 (2 件、3.4%)」で、各カテゴリーの件数に有意差がみられた ($\chi^2 = 27.702$, $df=5$, $p<.05$)。

表80 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード(親)

	自我の発達	(本人なりに)状況に即した判断	コミュニケーションの発達	興味関心の変化・多様化	問題行動の変化・減少	その他		
件数	16	2	5	7	21	5	27.702	$p<.05$
%	27.6%	3.4%	8.6%	12.1%	36.2%	8.6%		

表 81 は教師の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1 位が「問題行動の変化・軽減」で 11 件 (26.8%)、2 位が「自我の発達」で 10 件 (24.4%)、3 位が「興味関心の変化・多様化」で 7 件 (17.1%)。以下、「コミュニケーションの発達 (6 件、14.6%)」「その他 (6 件、14.6%)」「(本人なりに) 状況に即した判断 (5 件、12.2%)」で、各カテゴリーの件数に有意差はみられなかった。

表81 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード(教師)

	自我の発達	(本人なりに)状況に即した判断	コミュニケーションの発達	興味関心の変化・多様化	問題行動の変化・減少	その他		
件数	10	5	6	7	11	6	3.633	N.S
%	24.4%	12.2%	14.6%	17.1%	26.8%	14.6%		

イ. 親と教師の比較検討

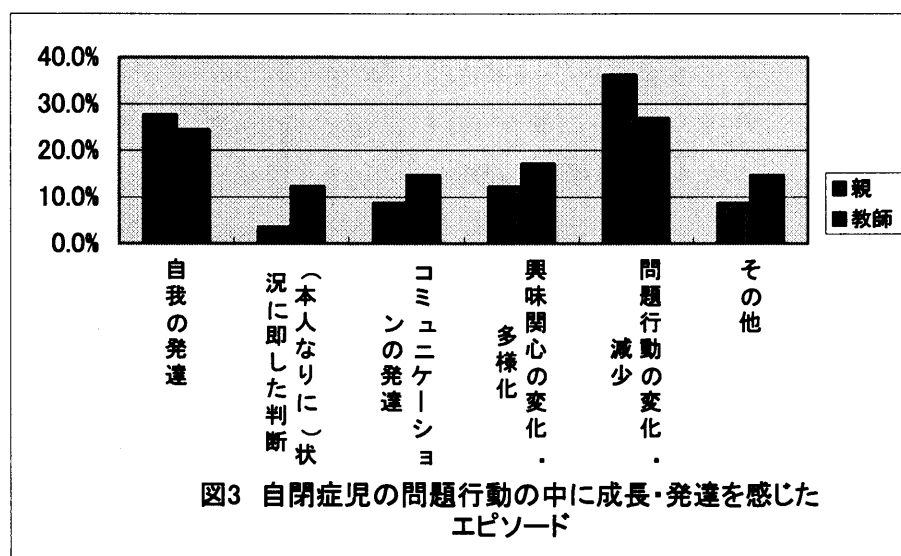
親と教師の結果の差をみるために、各カテゴリーの%同士を χ^2 検定した。表 82 と図 3 は、親と教師各々のカテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。

「(本人なりに) 状況に即した判断」に関して、教師の方が統計的に有意に高かった ($\chi^2 = 4.891$, $df=1$, $p<.05$)。「自我の発達」「コミュニケーションの発達」「興味

関心の変化・多様化」「問題行動の変化・軽減」「その他」に関しては有意差がみられなかった。

表82 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード(親と教師)

IV	親		教師		χ^2 検定(df=1)	
	件数	%	件数	%		
自我の発達	16	27.6%	10	24.4%	0.197	N.S
(本人なりに)状況に即した判断	2	3.4%	5	12.2%	4.891	p<.05
コミュニケーションの発達	5	8.6%	6	14.6%	1.555	N.S
興味関心の変化・多様化	7	12.1%	7	17.1%	0.859	N.S
問題行動の変化・減少	21	36.2%	11	26.8%	1.395	N.S
その他	5	8.6%	6	14.6%	1.555	N.S



(4)学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に関する要望

①カテゴリー分け

「情報共有」「問題行動の軽減」「指導・支援の工夫」「養育方法の工夫」「その他」の5つのカテゴリーに分類した。カテゴリーの詳細は以下の通りである。

ア. 情報共有

学校・教師側と親側とで、子どもの日々の様子や特徴の情報を共有することについて記述されている回答を、「情報共有」カテゴリーに分類した。

例えば、「学校と家庭で指導方法をよく話し合い、統一した行動をとること」（教師）「学校と家での共通の理解を持ち、同じやりかたで対応していくこと」（教師）「先生の子どもに対する理解と対応の統一」（親）「問題行動の内容によって対処の仕方も違うと思う。家庭、学校、外出などは、先生も親と相談し、勉強してもらう等」（親）「定形発達児達に無理に合わせようと考えないで欲しい。親の意見をよく聞き取ってほしい」（親）などである。

イ．問題行動の軽減

問題行動の軽減に重点を置いていることが読み取れる回答を、「問題行動の軽減」カテゴリーに分類した。

例えば、「問題行動が起こるような活動は避けてほしい」（親）「問題行動につながる環境の排除。ハード面だけでも充実させてほしい」（教師）「もう少し行動療法や生理的な部分を勉強して欲しい。（ABA、UB など）そしてそれを元実践して欲しい」（親）などである。

ウ．指導・支援の工夫

親から教師への、子どもへの指導・支援の工夫に関する要望について記述されている回答を「指導・支援の工夫」カテゴリーに分類した。

「自閉症児の特性を理解して無理なことはさせない、見通しをたてて子供に伝えてほしい（耳の敏感などがあるの）」（親）「視覚的な手がかりを使ってほしい。スケジュールを細かく写真やカードで示してほしい」（親）「人間それぞれ性格が違うように、自閉症の子どもも一人一人タイプが異なります。学校の先生には負担だとは思いますが、個々の子どものタイプに応じて対応が違う（Aさんにはこのことで理解できてもBさんではできない等）ということをわかってほしいです」（親）「自閉症を理解してほしいのではなく、本人を理解してほしい」（親）「一般の教育を押しつけないでほしい」（親）などである。

エ．養育方法の工夫

教師から親への、子どもの養育方法に関する要望について記述されている回答を「養育方法の工夫」カテゴリーに分類した。「ウ」の「指導・支援の工夫」の内容

を踏まえ、設定したカテゴリーである。

例えば、「本人と保護者だけで通じる言葉遊び、身体表現ではなく、誰にでも通じるような取り組みをしていただきたいと思います」（教師）「肯定的な言葉掛け。教師」「生活習慣を身につけさせる」（教師）「問題行動自体をやめさせることばかりに目を向けず、原因究明をしてほしい。理解力を正確に把握し、本人にわかる形で伝えコミュニケーションしてほしい」（教師）「いいことと悪いこと(社会的に)できることとできないことのけじめを付ける生活態度をつけてもらいたい。時には厳しい対応も必要と思う」（教師）などである。

オ. その他

「今まで接した中では、家庭でやっていることの方が自分がやっていることよりはるかに多くのことをやっていて、比べると何もできていなかったように思う」（教師）「特になし（十分もらっている）問題行動があった際は、必ずどうしたらいいのか話し合ってくれているし、実行してくれている」（親）「学校で行って欲しいと言うより、日本中の人々に知って欲しい。人生のうち学校なんてほんの少しの間だけ」（親）などの回答を、「その他」カテゴリーに分類した。

②カテゴリーの比較分析

ア. 親と教師各々の分析

回答人数と件数、及びカテゴリー分け一致率は、親が各々68人・68件・95.6%、教師が40人・43件・97.7%であった。

各カテゴリー間の件数の偏りを見るため、親・教師各々の結果について χ^2 検定を行った。

表83 学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に関する要望
(親)

	情報共有	問題行動の軽減	指導・支援の工夫	養育方法の工夫	その他		
件数	16	8	40	0	4	74.353	p<.01
%	23.5%	11.8%	58.8%	0.0%	5.9%		

表83は親の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1位が「指導・支援の工夫」で40件(58.8%)、2位が「情報共有」で16件(23.5%)、3位が「問題行動の軽減」で8件(11.8%)。以下、「その他(4件、5.9%)」

「養育方法の工夫（0件、0.0%）」で、各カテゴリーの件数に有意差がみられた($\chi^2 = 74.353$, $df=4$, $p<.01$)。

**表84 学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に関する要望
(教師)**

	情報共有	問題行動 の軽減	指導・支援 の工夫	養育方法 の工夫	その他		
件数	16	2	0	21	4	40.372	p<.01
%	40.0%	5.0%	0.0%	52.5%	10.0%		

表 84 は教師の各カテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。1 位が「養育方法の工夫」で 21 件（52.5%）、2 位が「情報共有」で 16 件（40.0%）、3 位が「その他」で 4 件（10.0%）。以下、「問題行動の軽減（2 件、5.0%）」「指導・支援の工夫（0 件、0.0%）」で、各カテゴリーの件数に有意差がみられた($\chi^2 = 40.372$, $df=4$, $p<.01$)。

イ．親と教師の比較検討

親と教師の結果の差をみるために、各カテゴリーの%同士を χ^2 検定した。表 85 と図 4 は、親と教師各々のカテゴリー件数、%数値、及び χ^2 検定結果について述べたものである。

「情報共有」に関して、教師の方が統計的に有意に高く、「指導・支援の工夫」に関して、親の方が統計的に有意に高く、「養育方法の工夫」に関して教師の方が統計的に有意に高かった(各々、 $\chi^2 = 4.270$, $df=1$, $p<.05$; $\chi^2 = 58.824$, $df=1$, $p<.01$; $\chi^2 = 52.500$, $df=1$, $p<.01$)。「問題行動の軽減」「その他」に関しては有意差がみられなかった。

表85 学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に関する要望(親と教師)

V	親		教師		χ^2 検定(df=1)	
	件数	%	件数	%		
情報共有	16	23.5%	16	40.0%	4.270	p<.05
問題行動の軽減	8	11.8%	2	5.0%	2.730	N.S
指導・支援の工夫	40	58.8%	0	0.0%	58.824	p<.001
養育方法の工夫	0	0.0%	21	52.5%	52.500	p<.001
その他	4	5.9%	4	10.0%	1.068	N.S

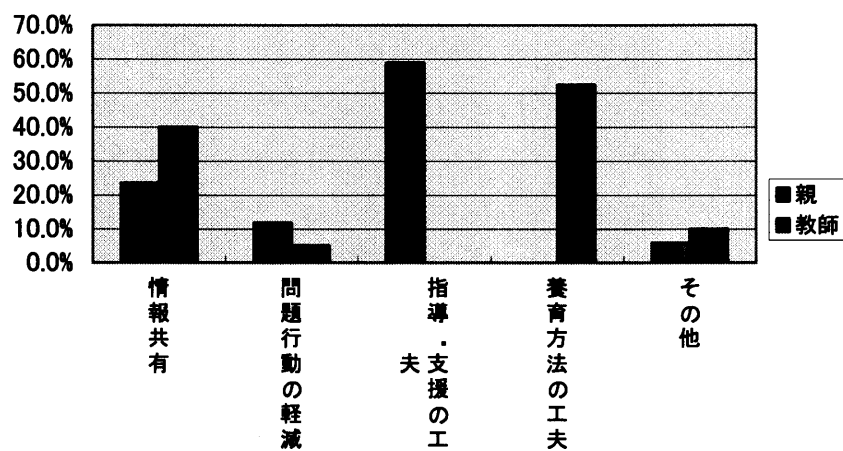


図4 学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に対する要望

第4節 考察

1. 自閉症児の問題行動に対する親の意識について

(1) 気になる問題行動の頻度

気になる問題行動の頻度に関して、「あてはまる」が有意に高かったものは、破壊行動の「壊すことを目的としない」のみであった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷行動における「頭、顔を自分の手で傷つける」「手を噛む」「他の物に身体の一部をぶつける」、他傷行動における、「他人（通行人など）に対しての他傷行動」、挑発行動における「嫌がらせ的行動」であった。太田(2002)は自閉症児者の家族 80 人に対し、自閉症児者の問題行動の出現率に関する意識調査を行っており、「こだわり」「常同行動」「パニック」等の出現率が 60%を超えているのに対し、自傷・他傷・破壊行動の出現率が、自閉症児各々 30.0%・28.8%・22.5%と、他の問題行動よりも低い出現率であることを明らかにしている。このことは、本調査結果と類似したものである。

石井(2005)は、「行動障害の形成過程では行動上の問題が行動障害として顕在化する形成期でもある」と述べている。本研究の対象となる親は、6 歳～15 歳（平均年齢 9.36 歳(SD=2.72)）の学齢期の自閉症児の親であることから、回答の対象となった自閉症児の問題行動が形成過程にあり、顕在化していない可能性がある。また、日本自閉症協会京都府支部(1997)は、自閉症児の親 94 人に、子どもの問題行動に関する意識調査を行っており、小中学生の親 30 人の問題行動に対する困惑の程度が、「大変困る」「困る」が合わせて 36.6%であり、「少し困る」「さほど困らない」が 63.4%であることを明らかにしている。このことから、親や教師は日常生活の中で問題行動を、それ程重く捉えておらず、その傾向は特に親において顕著であることが明らかにされた。親は子育ての過程で、子どもの問題行動を日常的に見てきている。他者から見れば問題行動と捉えられる行動も、親は子の全体像の中の一部として問題行動をありのままにとらえていることも考えられる。

また親は、自傷・他傷・破壊・挑発行動といった行為を、その名称から自分の子どもの問題行動よりも、程度の高いものと捉えている可能性がある。例えば、自傷行為は、その言葉の定義が幅広く、最軽度のものは爪噛みやピアスから始まり、中度のものではリストカットや根性焼き(火のついたタバコで自身を焼く)、

最重度になると、自己去勢や眼球摘出にまで至る(B・W・ウォルシュら, 2005)。自傷・他傷・破壊・挑発行動といった問題行動という言葉から、親がどの程度の行動をイメージするのか、今後調査する必要があるだろう。

(2)問題行動が起こる直前の行動についての意識

「問題行動が起こる直前の行動」についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かったものは、自傷・他傷行動における「他人が関係することについてイライラする」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷・他傷・破壊行動における「注目されたい」、破壊・挑発行動における「不安になる」、自傷・他傷・破壊・挑発行動における「自分の世界に入る」であった。

他人が関係することでイライラし、そのため自傷や他傷行動を行うことは、自閉症の障害特性から考えると、当然の結果であろう。自閉症は、コミュニケーションに障害があり、そのため、他人との間で様々なトラブルが発生し、それがきっかけとなって問題行動が起こる可能性は高い。さらに、学齢期は思春期の時期である。白石(2005a)は、思春期から青年期にかけて問題行動が固着化しやすいことを指摘している。その理由に、自我の発達があり、そのため「他者や外界と上手く距離をとることができず、密着的に吸い込まれたり、逆に自分の延長のように他者を巻き込もうとしたり、相手の意図を敏感に感じ取った瞬間に激しく拒否してしまうことがある」と述べている。本研究の対象児は白石(2005a)の言う状態が始まっている時期であり、そのため他の時期の自閉症者に比べ、他人が関係して問題行動が引き起こされることがより多い可能性があるだろう。

(3)問題行動が起こる原因についての意識

問題行動が起こる原因についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、自傷・他傷・破壊行動における「欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」、他傷行動における「欲求不満(自分自身のこと)」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷・他傷行動における「注目されたい」、挑発行動における「欲求不満(自分自身のこと)」であった。

自傷・他傷・破壊行動における「欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)」で「あてはまる」が有意に高かったことに関して、細渕(2005)

は、問題行動について、「行動障害があるからパニックや自傷が起きるという逆立ちした説明」が少なからず使用されることがあることを指摘し、自閉症や知的障害に伴う行動障害は、本人の発達・障害特性と周囲の環境との関係のあり方によって規定される「関係における障害」であると述べている。「欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」が原因であると認識している親の回答率が有意に多かったこの結果は、細渕のいう、「関係における障害」を理解している親が多いことを示していると考えられる。

(4)問題行動への対処についての意識

問題行動への対処についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、自傷・他傷行動における「見通しをたてる（環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど）」「一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」、他傷行動における「強制的にやめさせようとする」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷・挑発行動における「強制的にやめさせようとする」。他傷・破壊行動における「無視する（無関心を装う）」であった。

田中ら(1997)は、「わざと悪いことをする」挑発行動を、自分から他者に働きかけ、関わりたいという発達要求であると述べている。さらに、叱ることが挑発行動のエスカレートにつながる原因として、「自閉症児の場合、他者の意図や感情を求めて始まった行為が、容易に他者の反応の大きさを求める行動に転換しやすく、叱ることは、その反応のみに目を向け、余計に大きな反応を求める行動を強めてしまう」ことを指摘している。つまり、叱ることは逆効果なのである。

また、自閉症支援マニュアル編集委員会（2004）によると、「問題行動を無理にやめさせようとしても逆効果になる場合が多く、ますます激しくなったり、より深刻な問題行動となって現れることが多い」と述べている。このような考えを、親が経験や学習で理解しており、そのため自傷行動、挑発行動は「強制的にやめさせる」が有意に低かったのだろう。しかし一方で他傷行動は「強制的にやめさせる」が有意に高かった。他傷行動は他者を傷つける行動のため、強制的にやめさせると問題行動が悪化するとわかっていても、他傷行動は強制的にやめさせざるを得ないのだろう。今後、他傷行動もその原因を追及し、解消できるような環境が必要である。

「無視する（無関心を装う）」に関して、「あてはまる」群と「あてはまらない」群が共に約 50%であった。「無視する（無関心を装う）」という手段は、挑発行動のエスカレートにつながる強化刺激を中断させることとなる(田中ら, 1997)。しかし、自分から他者に働きかけ関わりたいという発達要求である挑発行動を、「無視」してしまっても良いのだろうか。杉山(1995)は、挑発行為には、それに直接対決をして叱るのではなく、むしろ叱責を控え、誉め言葉を多くすることが重要であると指摘している。挑発行動が他者に働きかけ関わりたいという発達要求である以上、やはり無視する（無関心を装う）よりも、肯定的に関わる大切であるように感じる。

(5)問題行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

問題行動への対処についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目はなかった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷・挑発行動における、「仕方なく自傷・挑発行動をやめる」、挑発行動における、「納得した上で挑発行動をやめる」、自傷・他傷・破壊行動における、「一度自傷・他傷・破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する」であった。これらのことから、親の自閉症児の問題行動への対処後、再発しないと感じている親が多いことが明らかになった。しかし、小澤ら(1999)は、「問題行動に対する困難感、施設職員よりも保護者の方がより強い困難感を持つ」と述べている。つまり学齢期に問題行動が減って再発しなくなったと思っても、しばらくすると再発や悪化、新たな問題行動が発生する可能性は高い。小澤らが報告する状態にならないためにも、再発しないからと言って安心するのではなく、問題行動がまだ軽く定着・形成していない学齢期に、適切に対応する必要があるだろう。

2. 自閉症児の問題行動に対する教師の意識について

(1) 気になる問題行動の頻度

気になる問題行動の頻度に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、他傷行動における「先生に対して」のみであった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、他傷行動における「他人に対して（通行人など）」のみであった。

教師が最も認識している問題行動は、他傷行動の、「先生に対して」のみであったことは、他傷行動がある自閉症に対して、教師がそのように仕向けている可能性がある。もし周囲の子どもへの他傷が行われると、自閉症児と他の子どもとの関係性が悪化し、さらには自閉症児の親と他の関係性も悪化する可能性があるかである。また学校によっては、他の子どもが怪我をしたり、備品が壊されることを、担任の責任とすることもあるだろう。そのようなことを避けるために、教師は他児に他傷が行われないようにしているのではないだろうか。

気になる問題行動の頻度が有意に高かった項目がほとんど無かったことは、学齢期以降から問題行動が顕在化する形成期(石井, 2005)であることと、一般学校では、教員 1 人当たりに対する生徒数も関係していると考ええる。今回の回答者の中には、小中学校の通常学級で自閉症児を見ていた教師もあり、その場合、自閉症児の小さな問題行動や他の生徒や教師にとって迷惑にならない問題行動などは、気にしていない可能性がある。これらの理由から、気になる問題行動の頻度が有意に高い項目はほとんどなかったのではないだろうか。

(2) 問題行動が起こる直前の行動についての意識

自閉症児の問題行動が起こる直前の行動についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、自傷・他傷・破壊行動における、「他人が関係することについてイライラする」「不安になる」、自傷行動における、「自分の世界に入る」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、破壊行動における「注目されたい」であった。

学校社会においては健常児でも、他の生徒に対してストレスを感じることは多い。他者とのコミュニケーションに障害ある自閉症児ならば、なおさらであると考ええる。また、ある程度流れが決まっている学校だが、突然の変更も少なくない。学校では、それを自閉症児に伝え忘れることもあるだろう。また例え伝えたとし

ても、それをすぐに理解できず、パニックを起こす自閉症児も少なくない。そのような状況が「不安になる」項目が有意に高い原因になっていると考える。

(3)問題行動が起こる原因についての意識

自閉症児の問題行動が起こる原因についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、挑発行動における「注目されたい」、自傷・他傷・破壊・挑発行動における、「欲求不満（自分自身のこと）」「欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」、他傷・挑発行動における「自分の世界に入る」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷行動における「注目されたい」のみであった。

様々なルールがある学校生活において、欲求不満になることは少なくないだろう。また、コミュニケーションにおいても他の子どもは自分の欲求があり、それが自分と違うために、欲求不満になることも多いと考える。しかし、果たしてそれが本当に問題行動が起こる原因なのだろうか。

「③問題行動が起こる原因についての意識」の問いは、「あてはまる」が有意に高かった項目が、他の問いに比べて多い。このことから教師は、表面的に見えることを原因と捉えている可能性がある。TEACCH プログラムの中に「氷山モデル」があり、「自閉症者の行動に現れているのは氷山の一角で、水面下にはその何倍もの理由があり重要な意味を持っている」(自閉症支援マニュアル編集委員会, 2004)とある。白石 (2005a) は、『行動問題』の背景を明らかにすることが大きな課題である」と書く一方で、「発達的变化にともなう『問題行動』については、その積極的建設が何であるかを見極めないと、発達を阻害することにもなりかねない」と述べている。ある問題行動の原因を間違えて捉え、それに対してアプローチを行うことは、問題行動が消失しないだけでなく、自閉症児の発達を阻害する可能性もあるのである。教師が原因と思っていることが、本当に問題行動の原因であるかどうか、今回の研究からはわからないが、今後実践的に研究する必要があるだろう。

(4)問題行動への対処についての意識

自閉症児の問題行動への対処についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、他傷・破壊行動における「強制的にやめさせようとする」、自傷・他傷・破壊・挑発行動における「見通しをたてる（環境を変える、スケジュール帳やカードをみせるなど）」、自傷・他傷・破壊・挑発行動における「一旦

やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意に高かった項目は、自傷・他傷・破壊行動における「無視する（無関心を装う）」、自傷行動における「強制的にやめさせようとする」であった。

学齢期は行動上の問題が行動障害として顕在化する形成期であり、そのため、行動障害に至らない支援や行動問題が強化されないような適切な発達支援が求められる(石井, 2005)。他傷・破壊行動を「強制的にやめさせようとする」対処法は、適切な発達支援とはいえないだろう。問題行動を強制的にやめさせることは、自閉症児の問題行動を激しくさせてしまう可能性があるからであり、対処療法的なやり方ではなく、その行動を行う原因を解消する必要がある(自閉症支援マニュアル編集委員会, 2004)。しかし、周囲の子どもへの他傷が行われると、自閉症児と他の子どもとの関係性が悪化し、さらには自閉症児の親と他の関係性も悪化する可能性がある。また学校によっては、他の子どもが怪我をしたり、備品が壊されることを、担任の責任とすることもあるだろう。また、対象児の他傷行動や破壊行動の原因を探っている間、対象児の他傷行動、破壊行動が治まっている訳ではない。そのため、どうしても自閉症児の問題行動を強制的にやめさせざるを得ないのではないだろうか。教育現場での問題行動のアプローチとして、本郷ら(2006)は、「先行事象を取り除く」ことを一つのアプローチとしている。他児が目の前にいると突き飛ばす本児に対して、教師二人体制を敷いて、本児の前に他児が立たないことを徹底したのである。しかしこれは養護学校の実例である。小中学校の通常の学級に在籍する自閉症児においては、本児の前に他児が立たないようにすることは、児童の数から考えても不可能に近いだろう。また、その先行事象が分かるとも限らないのである。

このような状況から、特に一般学校では自閉症児が他傷・破壊行動を起こした場合、まずは強制的にやめさせなければならないだろう。その後で、その問題行動を解消するための取り組みが必要なのである。今回の結果で、「強制的にやめさせようとする」だけでなく、「一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」ことも有意に多かったのは、自閉症児の問題行動に対する理解が高い教師も多くいることを示している。本郷ら(2006)は、行動問題に取り組むための体制として、「支援チーム作り」「校内研

修会における事例検討」「教育委員会で他校の支援方法などをまとめて配布」「参考図書コーナーの設置」「教師への特別支援」などをあげている。

(5)問題行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

問題行動への対処後における自閉症児の行動についての意識に関して、「あてはまる」が有意に高かった項目は、他傷・破壊行動における「仕方なく行動をやめる」。自傷・他傷・破壊・挑発行動における「一度行動をやめるが、しばらくすると再発する」であった。それに対し、「あてはまらない」が有意な項目はなかった。

他傷・破壊行動は、その後の取り組みがある場合もあるが、まずはやめさせるため、「仕方なく行動をやめる」自閉症児が多いのだろう。また、問題行動全てで、一旦やめて再発するのは、原因を解決していないため当然であると考ええる。しかし学齢期は問題行動が固着化しやすい時期であり(白石, 2005a)、問題行動が固着しないためにも、仕方なくやめたり、やめて再発したりするのではなく、原因を探り、その問題行動をやめられるように取り組んでいく必要があるだろう。

3. 親と教師の意識の比較

(1) 気になる問題行動の頻度

教師・親共に、問題行動に対して、その対象なる身体的部位や人物、行動の特徴について、認識していない傾向があり、その傾向は特に親において顕著であることが明らかになった。

これらのことについて、親・教師各々の考察で述べた通り、他者から見れば問題行動と捉えられる行動も、親はその行動を子の全体像の中の一部として、ありのままに捉えているのだということが考えられる。

序論で述べたように、竹林ら(2004)は、研修経験のある教師の方が、無い教師よりも、経度発達障害の子どもが問題を激しくする要因として、教員自身の力量の問題を重視する傾向があることを明らかにしている。恐らく、親・教師共に、勉強会や研修会等で、自閉症児の問題行動に関する知識をある程度身につけていることが考えられる。今回の結果の差は、教師は勉強会や研修等で得た、一般化された自閉症児に関する知識を、そのまま自閉症の児童・生徒に当てはめてしまい、親ほどには問題行動をその子自身の全体像の中の一部として捉える傾向が低いことからの差ではないだろうか。

また、両者に考えられる点として、石井(2005)の論文を参考に「回答の対象となった自閉症児の問題行動が、形成過程にあり、顕在化していない可能性」もあげられる。しかしながら、このことは、逆に言えば、問題行動の今後の顕在化の可能性を意味する。親の考察で記したように自閉症児が施設に通う時期になったときには、問題行動に対する困難感、施設職員よりも保護者の方がより強い(小澤ら, 1999)と報告されている。親も教師もこれらのことを認識して、小さな問題行動を激しくしないよう、また新たな問題行動が生まれないように取り組んでいく必要があるだろう。

(2) 問題行動が起こる直前の行動についての意識

親・教師共に、「他人が関係することについてイライラする」に関して「あてはまる」が有意に高い問題行動が多かった。学校・家庭と、環境は違っていても、やはりコミュニケーションの質的障害という障害特性から、他人との間で様々なトラブルが発生すると考えられる。

一方、「不安になる」に関して、親は、有意差がないのに対し、教師は「あてはま

る」が有意に高い。学校生活には、毎日の授業時間の入れ替わりや、学校行事、友達との集団活動等、環境の変化の著しい場面が多い。変化や突然の出来事に対して強い不安を感じる自閉症児(自閉症支援マニュアル編集委員会,2005)にとって、学校は不安感を感じやすい環境であると言える。このことから、学校とは、自閉症児にとって過ごしやすい環境とは言えず、自閉症児のための環境の改善が必要であると考えられる。

(3)問題行動が起こる原因についての意識

親・教師共に、「欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）」に関して、「あてはまる」が有意に高かった。このことから、細渕(2005)がいう、「本人の発達・障害特性と周囲の環境との関係のあり方によって規定される『関係における障害』」に対する理解が、親・教師共に高いことが考えられる。

また、「欲求不満（自分自身のこと）」に関しては、親が「他傷行動」のみに関して「あてはまる」が有意に高かったのに対し、教師は自傷・他傷・破壊・挑発行動全てにおいて「あてはまる」が有意に高かった。様々なルールがある上に、環境の変化が著しい学校生活において、自閉症児が家庭よりも「欲求不満」に陥りやすいことは明らかであろう。しかしながら、それに加えて、教師は、「問題行動が起こる原因についての意識」全体的に、親よりも「あてはまる」が有意に高かった項目が多い。このことは同時に、教師は親よりも、表面的に見えていることを原因と捉えている可能性を示唆している。このことは、問題行動の本質的な原因を間違えて捉え、間違ったアプローチを行うことによる発達の阻害(白石, 2005b)につながるおそれがある。今回の研究では、教師が見ている原因が、本当に表面的であり間違っているかどうかはわからないが、今後実践的に研究する必要があるだろう。

(4)問題行動への対処についての意識

親は自傷・他傷行動において、教師は自傷・他傷・破壊・挑発全てにおいて「見通しをたてる（環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど）」「一旦やめさせるがその後放っておくのではなく、その子の発達に合った取り組みをさせる」に関して、「あてはまる」が有意に高かった。また、他傷行動においては、親・教師共に「強制的にやめさせようとする」が有意に高かった。問題行動は、無理にやめさせようとしても逆効果になる場合が多く、ますます激しくなったり、より深刻な問題行動となって現われることが多い(自閉症支援マニュアル編集委員会)。このこ

とを認識していても、他傷行動は他者を傷つける行動のため、強制的にやめさせざるを得ない場面が家庭においても学校においても多発するのであろう。この場合、やめさせた後で問題行動を解消するための取り組みが必要なのである。この点に関して親・教師共に、他傷行動に関して、「強制的にやめさせようとする」だけではなく、「一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」ことも有意に高い。このことから、親・教師共に、問題行動に対する理解が高く、発達的な視点から対処を行っていることが考えられる。

しかし、この発達的な視点や取り組みが、親と教師でバラバラである可能性も考えられる。関戸(2004)は、学校現場における実践研究を通して、全校の教師が自閉症児に対して一貫した理解や対応の促進を行うことの有効性を示唆している。逆に一貫した対処を行わないと、対象児がパニック等を起こすのである。このことは、親と教師においても言えることではないだろうか。学校だけ、家庭だけで自閉症児の問題行動に取り組むのではなく、問題行動に対して共通認識と共通の取り組みを行い、学校と家庭がチームとなって取り組む必要があると考える。本郷ら(2006)は、教師が行動問題に取り組むための体制として、「支援チーム作り」を上げている。その支援チームを学校限定にせず、家庭も含めることは、自閉症児に対し、常に一貫した対処を行えんと考えられる。

(5)問題行動への対処後における自閉症児の行動についての意識

教師は、「一度問題行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、「あてはまる」と認識する傾向が、自傷・他傷・破壊・挑発行動全てにおいて有意に高いことが明らかになった。また、破壊・挑発行動に関しては、その後の「発達段階に合った取り組み」がある場合もあるが、まずはやめさせるため、「仕方なく行動をやめる」自閉症児が有意に多いのだろう。しかしながら、問題行動の再発は、「仕方なく行動をやめる」ため、その原因を解決できていないことから起こると考えられる。

一方で、親の場合は「一度問題行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、有意に「あてはまらない」と認識する傾向が高かった。このことは、親の方が教師よりも、問題行動の本質的な原因を解決できていると捉えられる。しかし、学校は家庭と比較して、様々なルールが存在する集団の場であり、行動の制限も家庭と比較すると余儀なくされる機会が多い上に、そのような環境を避けることは不可能である。また、そのような行動の制限を余儀なくされる環境に適応することは、

社会へ出るためにもある程度身につけなければならない。問題行動が固着化しやすい学齢期(白石, 2005a)において、問題行動が固着しないようにするためにも、環境の全く違う学校と家庭においてできる限り、連携を取り、問題行動がまだ軽く、定着・形成していないこの学齢期に、適切に対応する必要があるだろう。

(6)日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に対し、感じている悩み

教師は、自閉症児の問題行動に対する指導の仕方に悩む傾向が親よりも高いこと、家庭生活の問題に関する悩みを感じていないことが明らかになった。このことから、親は教師が悩む程、教師の指導法についての悩みを抱いておらず、むしろ親の結果のみに着目すると、子どもの問題行動を巡る、コミュニケーションや対処法についての悩みを重要視する傾向にあることが考えられる。

また、河合・佐藤(2001)によると、対健常児における問題行動（いわゆる青少年非行）については、教師は家庭環境に要因を見出すは多い傾向にあるということが示唆されている。それに対し、今回の結果からは、教師は自閉症児の問題行動に対し、親の養育方法に関する悩みは感じていないということがいえる。

(7)自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると思うこと

結果から、親・教師共に、順に「子どもの状態理解」「見通し・わかりにくさの軽減」「安心感・ストレスを与えない」ことについての重要性を認識する傾向が高いということがいえる。

また、有意差がみられた「活動・趣味の提供、発見」に関しては、親・教師共に回答率が低い。親が 10%以上であるのに対し、教師は 3%にも満たない。このことから、親・教師共に、「活動・趣味の提供、発見」を積極的には大切であるとは感じておらず、その傾向は教師の方が高いということが考えられる。「③問題行動が起こる原因についての意識」において、「欲求不満（自分自身のこと）」における「あてはまる」の回答率が、親は他傷行動において、教師は自傷・他傷・破壊・挑発行動全てにおいて、有意に高かった。「活動・趣味の提供、発見」を積極的に行い、子どもの余暇を充実させることは、「欲求不満（自分自身のこと）」の解消につながり、その結果として問題行動の軽減にもつながるのではないだろうか。今後検討する必要がある。

「教育指導法」に関しては、親の回答率は 0%であった。このことから、問題行動を軽減させることに関して、親は「教育指導法」を積極的には大切であるとは感じ

ていないと考えられる。また、教師においても、「教育指導法」が全体の中で 4 位の回答率である。教師のみの結果において有意差がみられたことから、指導法云々よりも、1 位 2 位にある、「子どもの状態理解」や「見通し・わかりにくさの軽減」等を重要視していることが明らかになった。ここでの「教育指導法」の定義には、カテゴリー分析結果の通り、学校における教師同士の連携や、教師の自閉症に関する知識、及び問題行動の対処法を含めており、このことから、自閉症児の問題行動について、対処法や自閉症に関する知識に囚われることなく、子どもの状態把握を重要視する傾向がある一方で、教員同士の連携が追いついていない可能性も示唆されているのではないだろうか。

(8) 自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じたエピソード

自閉症児は、過去をその歴史に応じて文節化することが困難(心理科学研究会, 2004)であり、新たに経験したことを、過去に経験したことやそれまでに学習した知識と関連づけて積み重ねて学習することが苦手である。これらのことから、状況判断が苦手であり、自分で見通しが立てられない(自閉症サポート研究会, 2005)。しかしながら、井上(2004)は、自閉症児者の状況判断を含む、感情理解指導について、「社会的な他者の行動が強化として機能すること」の重要性を述べている。家庭と違って学校は、友達や先生など、様々な人との関わりがある。「成長発達」を感じるには比較対象となる子どもや、場面の変化が必要である。学校は子ども同士の集団の場であり、場面の変化も激しい。「(本人なりに)状況に即した判断」カテゴリーにおいて教師の方が親よりも有意に高い結果が得られたことは、そのような環境の中で、他者の行動が強化として機能する頻度が高いこと。集団の中での子どもの様子が見られることなど、家庭では知り得ない子どもの一面を見ることができるとが関係しているのではないかと考えられる。

また、教師・親共に、「自我の発達」と「問題行動の変化・減少」に、同程度に成長・発達を認識する傾向があるということが明らかになった。しかしながら、親の結果では、カテゴリー同士の分析において有意差がみられたものの、教師の結果では有意差がみられなかった。このことから、教師よりも親は、自我の発達や問題行動の変化・減少に着目して、成長・発達を認識するが、教師は、上で述べた通り、様々な視点から、問題行動の中に成長・発達を認識する傾向があるということが考えられる。

(9)学校あるいは家庭に対する、自閉症児の問題行動に関する要望

「指導・支援の工夫」は、定義した通り、親から教師への、子どもへの指導・支援の工夫に関する要望についてのカテゴリーである。記述の特徴として主に、①「自閉症児の特性の理解や支援法の工夫」について記述されている回答と、②「自閉症の特性よりも子ども本人への理解・支援の工夫」について記述されている回答とに分けられる。①の中には、「視覚支援」「スケジュールを細かく写真やカードで示す」ことや「問題解決型アプローチ」など、TEACCHプログラムに見られる手法(氏田ら, 2006)等、専門的な療育法らしきものがみられる。これらはおそらく、家庭や療育施設等で実践している療育法を、学校でも統一して行ってほしいとの希望ではないだろうか。それに対し、②について記述している親は、「大人の指示を入れるためにだけにカードを使わないでほしい。」「一般の教育を押しつけないでほしい。」といった、対称的な回答が目立つ。また、「やってほしくないことは、個別指導を重視しすぎて集団をおろそかにすることです。集団の楽しさ、学びができなければ社会に適応する力が不足してしまう。」といった回答もみられた。

「養育方法の工夫」は、「指導・支援の工夫」とは対称的に、教師から親への、子どもの養育方法に関する要望に関するカテゴリーである。記述の特徴として、主に、①情緒の安定②規則正しい生活習慣③社会への適応につながる支援④家庭と学校の連携、の4つに分けることができる。

①については「家では本人と家庭生活を楽しく精一杯過ごすことに力を注いでほしい。愛情いっぱい育てている親に学校の立場のみで話をすることは避けたいと思う」「あたたかい環境を作っていくこと。愛情で接し、かけがえのない存在だということをアピールしていくこと。」「肯定的な言葉掛け」など、温かい家庭生活を送れるようにとの教師の願いが示唆される。

②については、「規則正しい生活リズムの確立」「生活習慣」といった、「生活態度」に関する回答である。体調不良が問題行動にもつながる可能性を認識していると考えられる。

③は、「してはだめ」と決めたことには、どんな時でも一貫して『ダメ』を通す。」「やっていいことと悪いことは、根気強く言い聞かせる。」などである。これらの回答は、学校を卒業した後のことを想定した、教師の思いを示唆していると考えられる。

④は、「学校と家庭でできるだけ同じ対応ができるようにしていくことが大切だと思う。」「問題行動への対応については、足並みを揃えてしていきたいです。」「本人と保護者だけで通じる言葉遊び、身体表現ではなく、誰にでも通じるような取り組みをしていただきたいと思います。」「第三者への相談」などであり、親と教師における問題行動への共通認識を求めていることが考えられる。

以上のことは全て、親と教師の連携、また、次に述べる「情報共有」の重要性を示唆するものではないだろうか。

「情報共有」については、教師の方が親よりも回答率が高く、教師は親との情報共有を行うことの重要性を認識しているが、親は、教師ほど情報共有を重要視していないことが示された。このことは、上記の「指導・支援の工夫」「養育の工夫」カテゴリーの結果からも示唆されている。親は、「指導・支援の工夫」において、親と教師の連携について直接的に記述している回答はみられないが、教師は直接的に記述している回答が多く見られた。しかしながら、親の方も、上記の通り、学校と家庭とで同じ対応を取ることに對する要望であったり、個別の理解・支援といった、「情報共有」無くしては成立しない要望を示している。ここでの差は、「一般の教育を押しつけないでほしい」などといった親の回答や、「(6)日常生活、学校生活の中で、自閉症児の問題行動に對し、感じている悩み」に關して、自閉症児の問題行動に對する教師の指導法に關する悩みを持つ傾向が、親よりも教師の方が有意に高いという結果が得られたことから、親と教師との間のコミュニケーションの必要性が窺える。また、「その他」に分類した回答の中に、「人生のうち学校なんてほんの少しの間だけ。」といった記述もみられた。やはり、家庭と学校の連携は、親・教師共に歩みよることが必要不可欠であるが、その上で、教師が親にどれだけ信頼感を持ってもらえるか、そしてそれは、自閉症に關する知識はもちろんのこと、個別の対応への柔軟性、教師同士の連携も大きく影響するということが考えられる。

これまでも自閉症児を含む障害児の問題行動に對しての様々な研究が行われてきたことは、序論でも述べたが、これらの多くは、今後の課題として、「親と教師の連携」を示唆している(例えば、田中ら、1997・白石、2005b)。今回の結果は、具体的にどのような点での連携が必要であるのかを明らかにする手がかりになったのではないだろうか。

第 V 章

結論と今後の課題

第 1 節 結論

教師・親共に、問題行動に対して、その対象なる身体的部位や人物、行動の特徴について、認識していない傾向があり、その傾向は特に親において顕著であることが明らかにされた。他者から見れば問題行動と捉えられる行動も、親はその行動を子の全体像として、ありのままに捉えているのだということが考えられた。

「問題行動が起こる直前の行動についての意識」に関して、親・教師共に、「他人が関係することについてイライラする」に関して「あてはまる」が有意に高い問題行動が多いことが明らかにされた。その一方で、「不安になる」に関して、親は、有意差がないのに対し、教師は「あてはまる」が有意に高いことが明らかにされた。

教師は、「問題行動が起こる原因についての意識」が、全体的に、親よりも「あてはまる」が有意に高い項目が多いことが明らかにされた。また、親・教師共に、問題行動が起こる原因について、欲求不満（他者が関係しているコミュニケーションの問題）を認識していることが明らかになった。

他傷行動の対処に関して、親・教師共に「強制的にやめさせようとする」だけではなく、「一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる」ことも有意に高い。このことから、親・教師共に、問題行動に対する理解が高く、発達的な視点から対処を行っていることが考えられた。

「問題行動への対処後における自閉症児の行動についての意識」に関して、教師は、「一度問題行動をやめるが、しばらくすると再発する」において、「あてはまる」と認識する傾向が、自傷・他傷・破壊・挑発行動全てにおいて有意に高いことが明らかになった。一方で、親の場合は「一度問題行動をやめるが、しばらくすると再発する」に関して、有意に「あてはまらない」と認識する傾向が高かった。このことから、親の方が教師よりも、問題行動の本質的な原因を解決できていると考えられた。

教師は、自閉症児の問題行動に対する指導の仕方に悩む傾向が親よりも高いこと、家庭生活の問題に関する悩みを感じていないことが明らかになった。このことから、親は教師が悩む程、教師の指導法についての悩みを抱いておらず、むしろ親の結果のみに着目すると、子どもの問題行動を巡る、コミュニケーションや対処法についての悩みを重要視する傾向にあることが考えられた。

自閉症児の問題行動を軽減させるために大切であると感じることに関して、親・

教師共に、順に「子どもの状態理解」「見通し・わかりにくさの軽減」「安心感・ストレスを与えない」ことについての重要性を認識する傾向が高いということがいえる。「活動・趣味の提供、発見」に関しては、親が10%以上であるのに対し、教師は3%にも満たない。このことから、親・教師共に、「活動・趣味の提供、発見」を積極的には大切であるとは感じておらず、その傾向は教師の方が高いということが考えられた。「教育指導法」に関しては、親の回答率は0%であった。このことから、問題行動を軽減させることに関して、親は「教育指導法」を積極的に大切であるとは感じていないと考えられた。

「(本人なりに)状況に即した判断」カテゴリーにおいて教師の方が親よりも有意に高い結果が得られた

教師よりも親は、自我の発達や問題行動の変化・減少に着目して、成長・発達を認識するが、教師は、様々な視点から、問題行動の中に成長・発達を認識する傾向があるということが考えられた。

親から教師への、自閉症児の問題行動に関する要望に関して、「指導・支援の工夫」に関する回答率が有意に高かった。記述の特徴として主に、①「自閉症児の特性の理解や支援法の工夫」について記述されている回答と、②「自閉症の特性よりも子ども本人への理解・支援の工夫」について記述されている回答とに分けられた。

「養育方法の工夫」は、「指導・支援の工夫」とは対称的に、教師から親への、子どもの養育方法に関する要望に関するカテゴリーである。記述の特徴として、主に、①情緒の安定②規則正しい生活習慣③社会への適応につながる支援④家庭と学校の連携、の4つに分けられた。

「情報共有」については、教師の方が親よりも回答率が高く、教師は親との情報共有を行うことの重要性を認識しているが、親は、教師ほど情報共有を重要視していないことが有意に示された。ここでの差は、「一般の指導法を押し付けないでほしい」といっ親の回答から、親と教師の間においてのコミュニケーションの必要性が窺える。

第2節 今後の課題

①自傷・他傷・破壊・挑発行動といった問題行動を、その言葉から、親や教師がどの程度の行動をイメージするのか、今後検討する必要がある。

- ②親や教師が問題行動の原因と思っていることと、実際の原因との一致・不一致について、今後実践的に検討する必要がある。
- ③「活動・趣味の提供、発見」を積極的に行い、子どもの余暇を充実させてあげることが、問題行動の軽減につながるかどうか、今後検討する必要がある。
- ④今回取り上げた以外の問題行動との比較分析をする必要がある。

<参考文献>

- ・ 安達潤・古河宇一 (2003) 自閉症児の家庭トラブルを軽減するための支援・養育者の問題行動対処能力を上げる働きかけを通じて・北海道教育大学教育実践センター紀要, 33-41.
- ・ 赤木和重・北口美弥子 (2005) 激しい器物破壊行動を示した強度行動障害の自閉症者に対する実践・対人関係の発達および衝動性の緩和に注目して・草稿
- ・ B・W・ウォルシュ・P・M・ローゼン (2005) 自傷行為・金剛出版.
- ・ Evans, I.M., & Mayer, L.H. An educative approach to behavior problems: A Practical decision model for intervention with severely handicapped learners. Baltimore: Paul H. Brookes, 1985
- ・ 別府哲 (1999) 挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達・発達心理学研究, 第 10 巻, 第 2 号, 88-98.
- ・ 細淵富夫 (2005) 「強度行動障害」と「動く重傷児」問題・障害者問題研究, 第 33 巻第 1 号, 2-9
- ・ 本郷一夫・長崎勉 (2006) 特別支援教育における臨床発達心理学的アプローチ・ミネルヴァ書房.
- ・ 市川裕二 (1997) 問題行動の理解と対応・自閉症児教育研究, 17.
- ・ 井上雅彦 (2004) 自閉症児者の感情理解とその指導可能性に関する行動分析的検討・発達障害研究, 第 26 巻第 1 号, 23-30
- ・ 石井裕紀子 (2005) 滋賀県における「強度行動障害」への支援の現状と課題・障害者問題研究, 第 33 巻第 1 号, 36-43.
- ・ 自閉症支援マニュアル編集委員会 (2005) 自閉症の世界へようこそ・自閉症支援マニュアル・自閉症サポート研究会.
- ・ 河合伊六・佐藤修策 (2001) 生徒指導・新しい教育改革をふまえて・北大路書房.
- ・ 村田豊久 (1987) 小児のメディカル・ケア・シリーズ 14・自閉症・医師薬出版株式会社.
- ・ 日本自閉症協会京都府支部.
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/atoz3/ask/index.html>
- ・ 小澤温・高橋彰彦・渡辺勸持・大島正彦・島田博祐 (1999) 通所施設に通う障害児の問題行動に対する保護者と職員の困難感の相違・特殊教育学研究, vol.21 (1), 76-86
- ・ 田中道治 (1997) 問題行動の理解と指導・清水貞夫・玉村公二彦 (編) 障害児教育シリーズ 2-障害児教育の教育課程・方法・培風館. pp113-122
- ・ 田中道治 (2003) パニックなど問題行動をもつ子どもへの対応・清水貞夫・玉村公二彦 (編) 障害児教育シリーズ 2-障害児教育の教育課程・方法・培風館. pp126-136
- ・ 篠崎秀一 (2005) 強度行動障害の仲間によりそって・Hさんの取り組みから見えてきたこと・障害者問題研究, 第 33 巻第 1 号, 44-48.
- ・ 白石恵理子 (2005) 「行動障害」「行動問題」を示す重度発達障害者への実践-2つの報告をふまえて-・障害者問題研究, 第 33 巻第 1 号, 54-61.
- ・ 白石正久 (2005) 重度自閉症の行動と発達・障害者問題研究, 第 33 巻第 1 号, 10-17.

- ・昇地勝人・蘭香代子・長野恵子・吉川昌子（2004）傷害特性の理解と発達援助・教育・心理・福祉のためのエッセンス・.ナカニシヤ出版.
- ・心理科学研究会（2004）心理学への招待・人間発達における時間とコミュニケーション・.有斐閣.
- ・関戸英紀（2004）通常学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童に対する支援・有効な支援を行うための要件の検討・.特殊教育学研究,42（1）,35-45.
- ・杉山登志郎（1995）自閉症児への精神療法的接近.精神療法,21,325-332.
- ・竹林和子・別府哲・宮本正一（2004）教師は軽度発達障害児の行動をどのようにとらえているのかー軽度発達障害者についての理解に関する質問紙調査.岐阜大学教育学部研究報告 人文学,第 53 巻第 1 号,239-248
- ・田中昌人・田中杉恵（1986）子どもの発達と診断 4・幼児期Ⅱ・.大月書店.
- ・田中昌人・田中杉恵（1990）子どもの発達と診断 3・幼児期Ⅰ・.大月書店.
- ・種子田綾・桐野匡史・矢嶋裕樹・中嶋和夫（2004）障害者の問題行動と母親のストレス認知の関係.東京保健科学学会誌,79-87
- ・氏田照子・田中奈緒子・福田年之（2006）自閉症の人たちを支援するということ-TEACCH プログラム新世紀へ・.朝日新聞厚生労働文化事業団.

< 謝 辞 >

本研究を進めるにあたり、アンケートに御協力して頂いた自閉症児の母親の皆様、教員の皆様、関係諸団体の皆様には、大変お世話になりました。また、本論文作成にあたり、熱心に御指導頂きました田中道治先生に、心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

資料

自閉症児の問題行動に含まれる発達的特徴を見出し、問題行動と発達との関係性を明らかにすることによって、自閉症児の問題行動の軽減に向けた指導の手がかりを得たいと思います。その一環としてアンケート調査を実施しています。ご協力お願い致します。

－アンケートにお答え頂くにあたって－

本アンケートは、自閉症児の親を対象としています。

・年齡(歲) ・性別(男 ・ 女)

・お子さんの障害の程度（軽度・中度・重度・最重度）

・お子さんの兄弟姉妹の数(アンケート対象児以外)(人)

連絡先: 090-5966-1648 / ernkmt@kyokyo-u.ac.jp

A 自閉症児の気になる自傷行動（例「頭を床に打ち付ける」など）

あてはまる	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
4	3	2	1

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

あてはまる
ややあては
まる
あまりあて
はまらない
あてはまら
ない

1 2 3 4

A-2 これらの自傷行動が起こる原因は何だと思いますか

1 注目されたい

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

2 欲求不満(自分自身のこと)

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

4 発達のもつれ上、問題がある

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

5 その他()

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

A-3 自傷行動が出現した場合の対応の仕方

1 無視する(無関心を装う)

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

2 強制的にやめさせようとする

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

5 その他()

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

A-4 対応後の行動

1 仕方なく自傷行動をやめる

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

2 納得した上で自傷行動をやめる

あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

3 一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

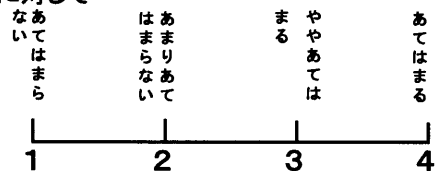
あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

4 その他()

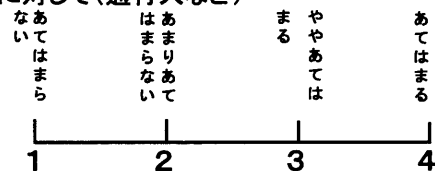
あてはまらない	あまりあてはまらない	まあまあ	ややあてはまる	あてはまる
1	2	3	4	

B 自閉症児の気になる他傷行動(例、「友達に噛みつく」など)

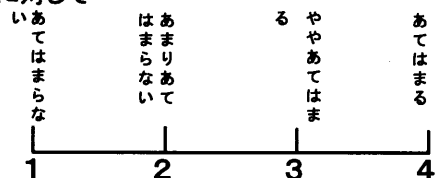
1 友達に対して



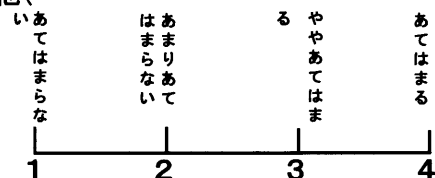
2 他人に対して(通行人など)



3 先生に対して

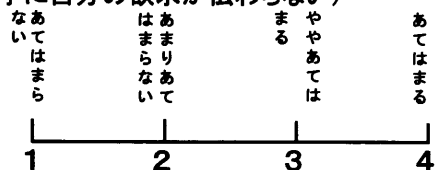


4 その他()

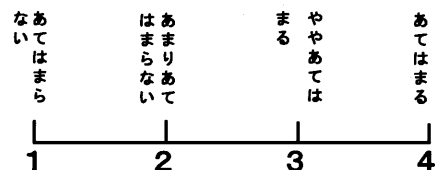


B-1 他傷行動が起こる直前の行動の変化について

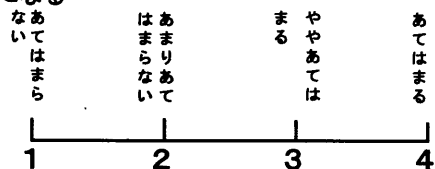
**1 他人が関係していることについてイライラする
(例:相手に自分の欲求が伝わらない)**



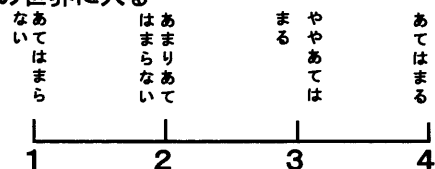
2 注目されたい



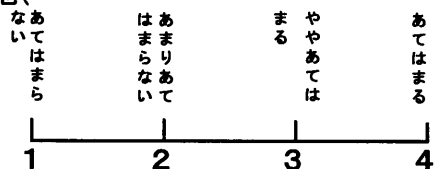
3 不安になる



4 自分の世界に入る

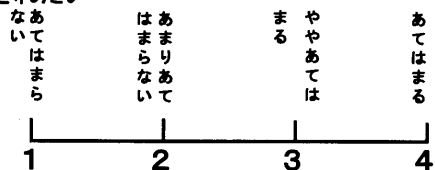


5 その他()

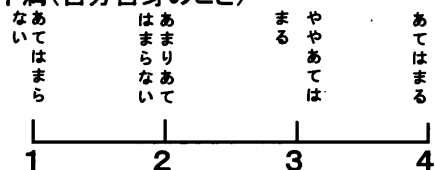


B-2 これらの他傷行動が起こる原因は何だと思いますか

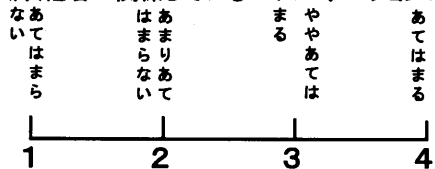
1 注目されたい



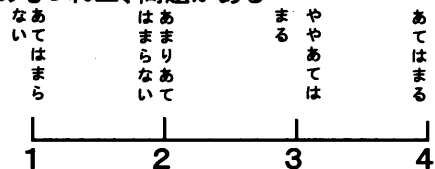
2 欲求不満(自分自身のこと)



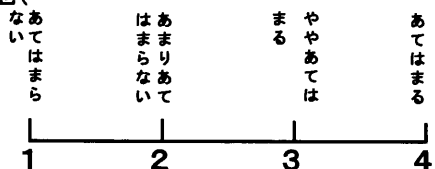
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

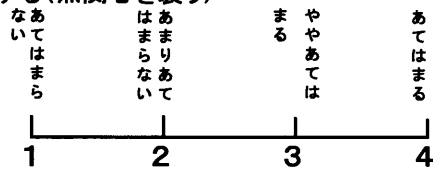


5 その他()

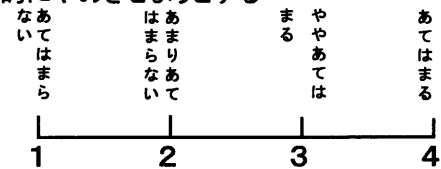


B-3 他傷行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

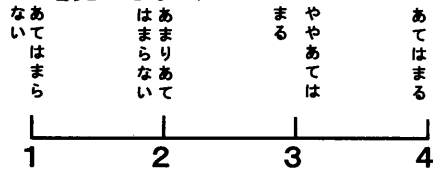
1 無視する(無関心を装う)



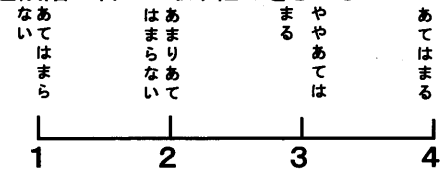
2 強制的にやめさせようとする



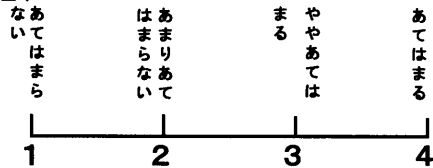
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

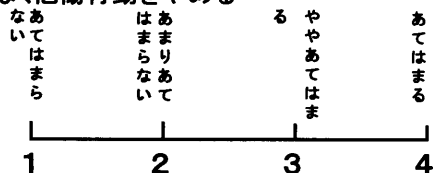


5 その他()

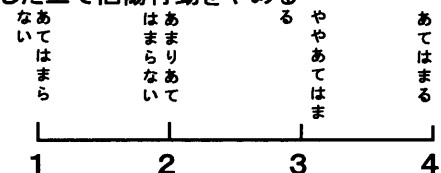


B-4 対応後の行動

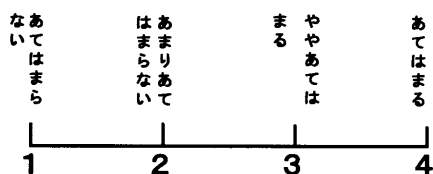
1 仕方なく他傷行動をやめる



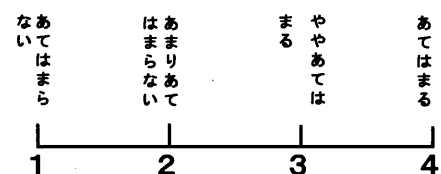
2 納得した上で他傷行動をやめる



3 一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

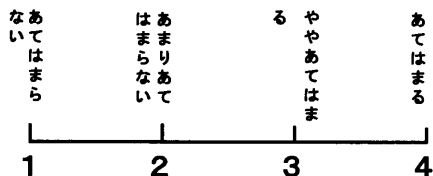


4 その他()

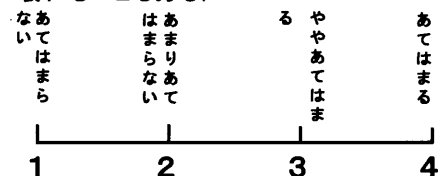


C 自閉症児の気になる破壊行動(例、「食器を割る」など)

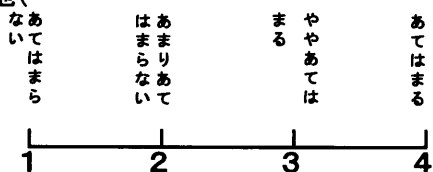
1 壊すことを目的とする



2 壊すことを目的としない(投げたり落としたりすることで、結果的に壊れることもある)

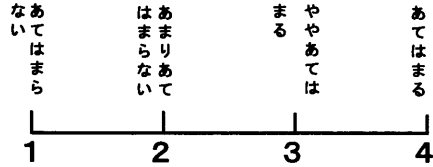


3 その他()

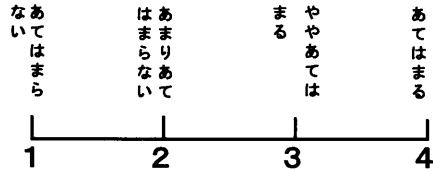


C-1 破壊行動が起こる直前の行動の変化について

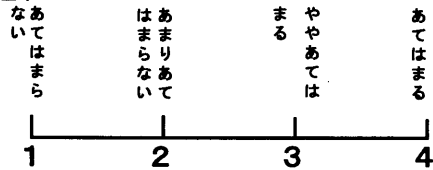
- 1 他人が関係していることについてイライラする
(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



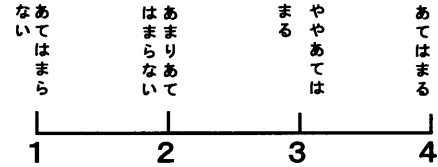
- 3 不安になる



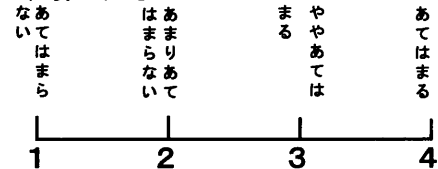
- 5 その他()



- 2 注目されたい

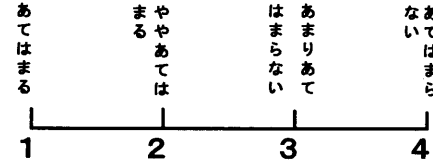


- 4 自分の世界に入る



C-2 これらの破壊行動が起こる原因は何だと思いますか

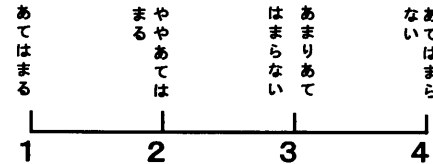
- 1 注目されたい



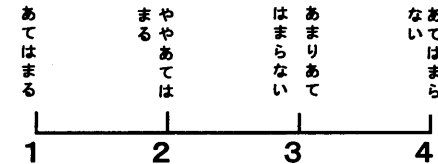
- 2 欲求不満(自分自身のこと)



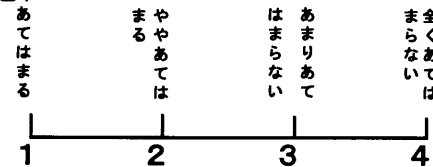
- 3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



- 4 発達のもつれ上、問題がある

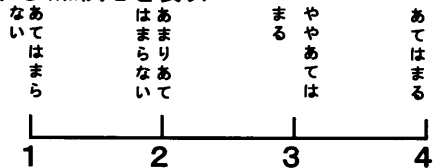


- 5 その他()

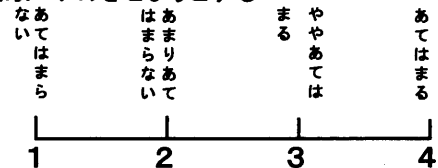


C-3 破壊行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

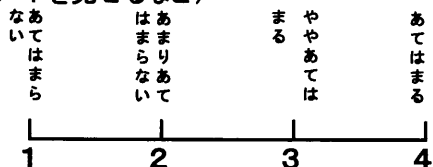
- 1 無視する(無関心を装う)



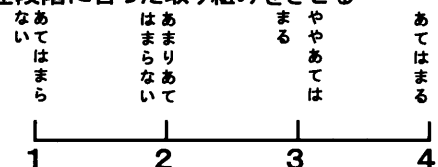
- 2 強制的にやめさせようとする



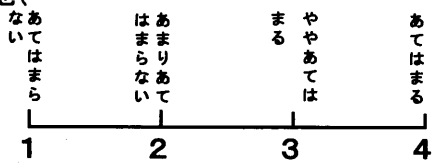
- 3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



- 4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

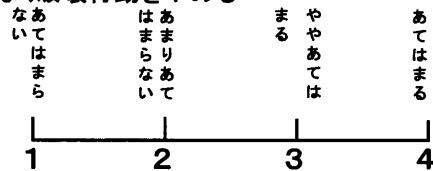


- 5 その他()

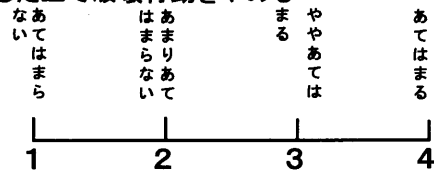


C-4 対応後の行動

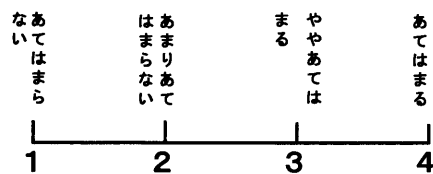
1 仕方なく破壊行動をやめる



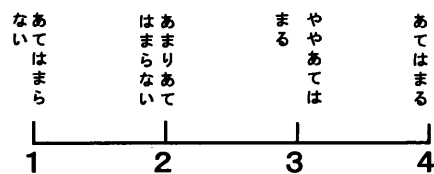
2 納得した上で破壊行動をやめる



3 一度、破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する

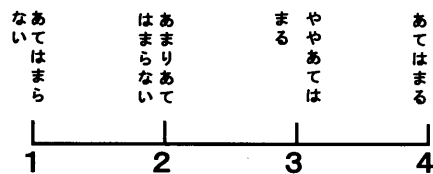


4 その他()

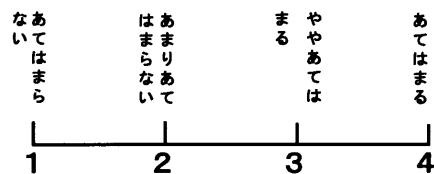


D、自閉症児の気になる挑発行動(他の人の怒りを引き出すことを明らかな目的として、執拗になされる行動。例:他人の腕をつねり、相手が怒るのを楽しんでいる様子を見せる。)

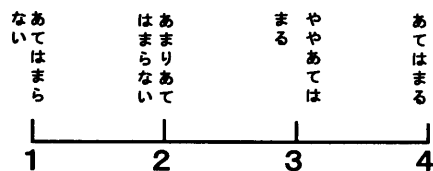
1 いたずらの行動(他の人の反応をうかがいながら奇声をあげる・性器を見せる・唾や尿や便で遊ぶ、など)



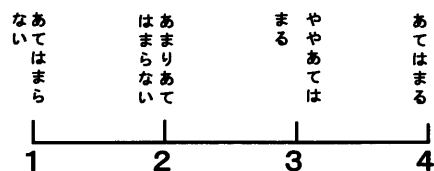
2 嫌がらせ的行動(「死ぬ」など嫌がることをわざと言う・しつこく触りにくる・忙しく働いてる時にわざと無意味な質問を繰り返す、など)



3 意図的な攻撃行動(他の人の反応をうかがいながら自傷する・人をつねる・物を投げる・物を壊す・髪の毛を引っ張る・叩く、など)

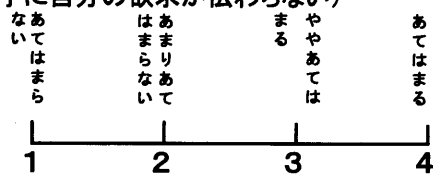


4 その他()

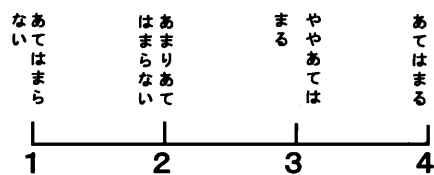


D-1 挑発行動が起こる直前の行動の変化について

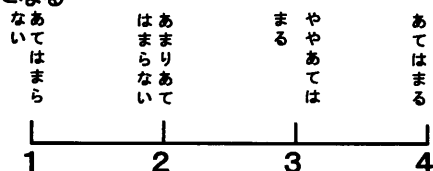
1 他人が関係していることについてイライラする(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



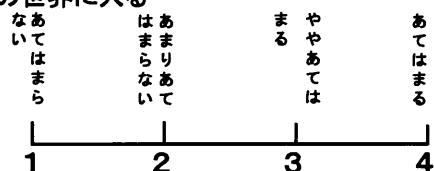
2 注目されたい



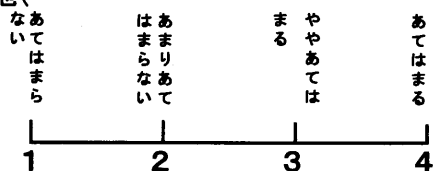
3 不安になる



4 自分の世界に入る

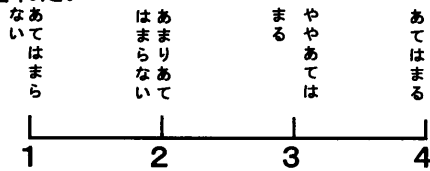


5 その他()

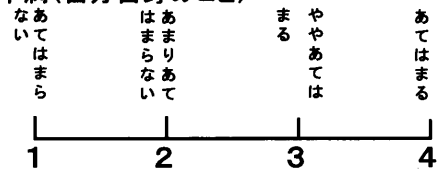


D-2 これらの挑発行動が起こる原因は何だと思いますか

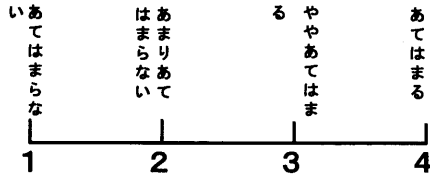
1 注目されたい



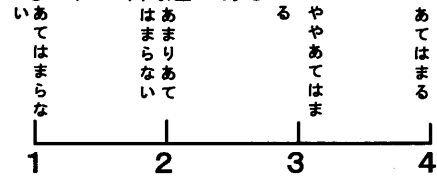
2 欲求不満(自分自身のこと)



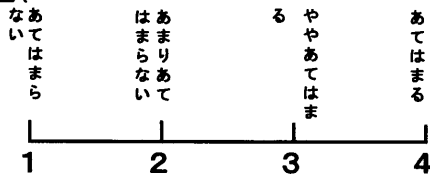
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

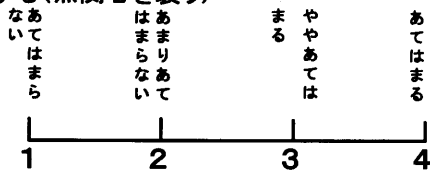


5 その他()

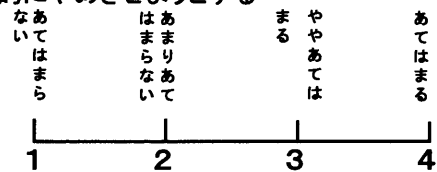


D-3 挑発行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

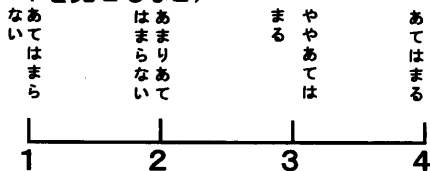
1 無視する(無関心を装う)



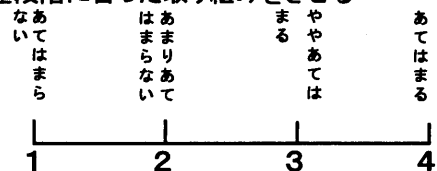
2 強制的にやめさせようとする



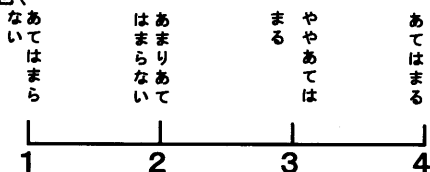
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

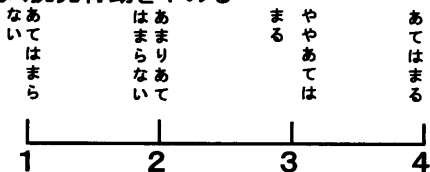


5 その他()

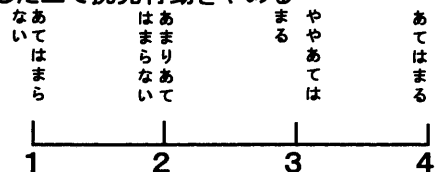


D-4 対応後の行動

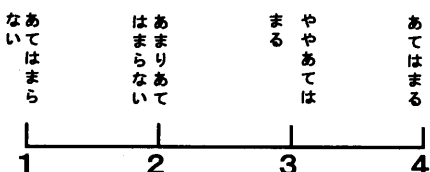
1 仕方なく挑発行動をやめる



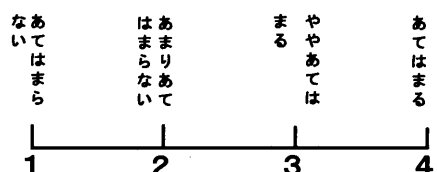
2 納得した上で挑発行動をやめる



3 一度、挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する



4 その他()



Ⅱ、日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し感じている悩みを書いてください。

Ⅲ、自閉症児の問題行動を軽減させるために大切なことは何だと思いますか。考えを自由に書いてください。

Ⅳ、自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じることはありますか。また、それはどのような時ですか。エピソード等もあれば書いてください。

Ⅴ、自閉症児の問題行動について、学校で行ってほしいと思うことは何ですか。

ご協力ありがとうございました。

<調査へご協力をお願い>

自閉症児の問題行動に含まれる発達的特徴を見出し、問題行動と発達との関係性を明らかにすることによって、自閉症児の問題行動の軽減に向けた指導の手がかりを得たいと思います。その一環としてアンケート調査を実施しています。ご協力お願い致します。

—アンケートにお答え頂くにあたって—

本アンケートは、自閉症児を現在受け持っている、もしくは過去に受け持ったことのある教師を対象としています。現在受け持っているもしくは過去に受け持った自閉症児一名をイメージして回答してください。

<回答者について>

・性別(男 ・ 女) 年齢(歳)

・教職経験年数(年)

・障害児教育経験年数[年 (盲・聾・養護学校 年)(障害児学級 年)]

・自閉症児を担当した年数(年)

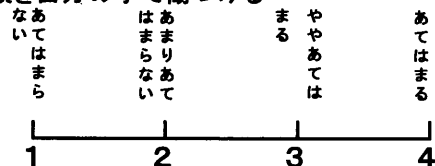
・御回答いただくにあたって、主に対象となる自閉症児の障害の程度 (軽度 中度 重度 最重度)
※高機能自閉症及びアスペルガー症候群児が対象の場合は、「軽度」に○をつけてください。

京都教育大学大学院障害児教育専修 中本絵梨
連絡先: 090-5966-1648 / ernkmt@kyokyo-u.ac.jp

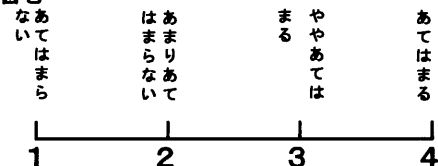
I 身近にいる(もしくはいた)自閉症児の気になる問題行動について、自傷行動、他傷行動、破壊行動、挑発行動について、当てはまる数字に○を付けてください。

A 自閉症児の気になる自傷行動 (例「頭を床に打ち付ける」など)

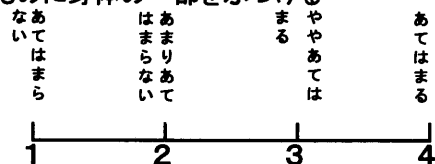
1 頭、顔を自分の手で傷つける



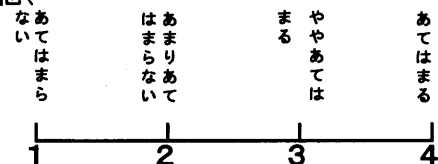
2 手を噛む



3 他のものに身体の一部をぶつける

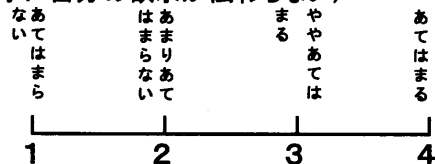


4 その他()

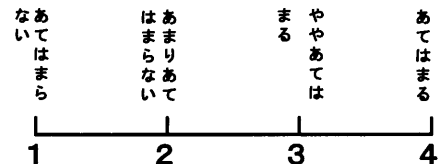


A-1 自傷行動が起こる直前の行動の変化について

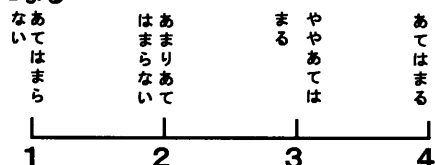
1 他人が関係していることについてイライラする
(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



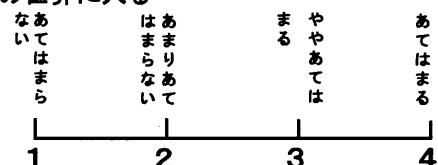
2 注目されたい



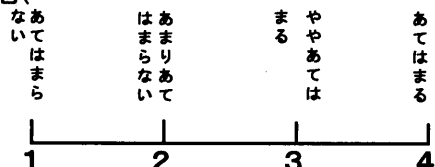
3 不安になる



4 自分の世界に入る

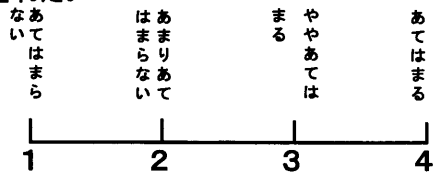


5 その他()

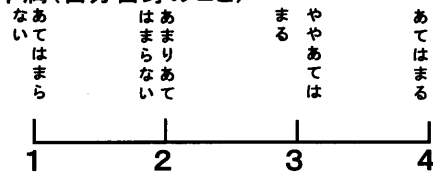


A-2 これらの自傷行動が起こる原因は何だと思いますか

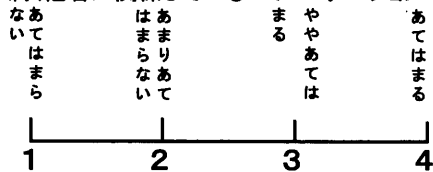
1 注目されたい



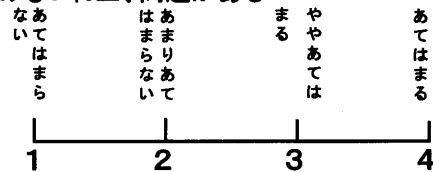
2 欲求不満(自分自身のこと)



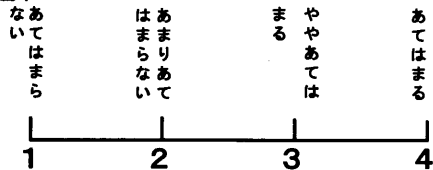
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

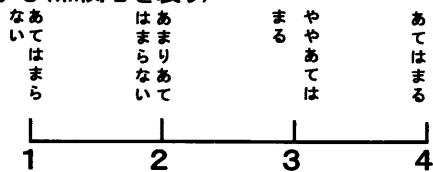


5 その他()

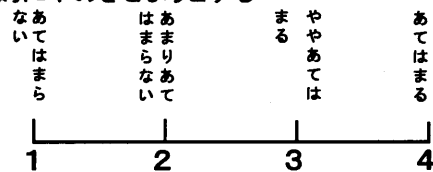


A-3 自傷行動が出現した場合の対応の仕方

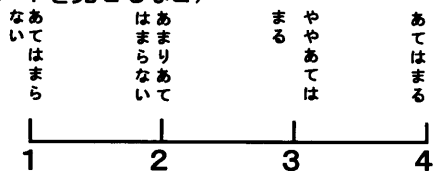
1 無視する(無関心を装う)



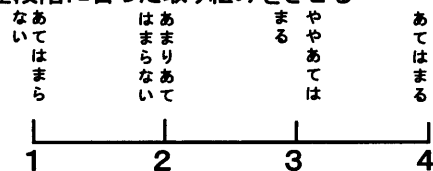
2 強制的にやめさせようとする



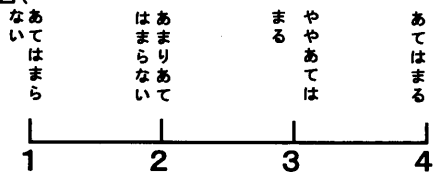
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

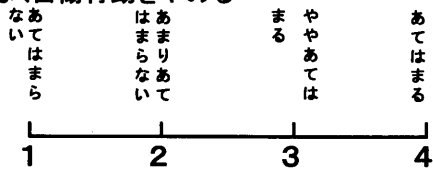


5 その他()

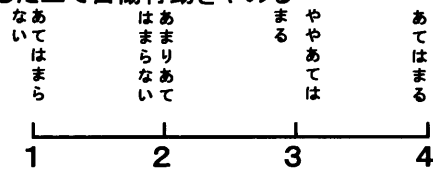


A-4 対応後の行動

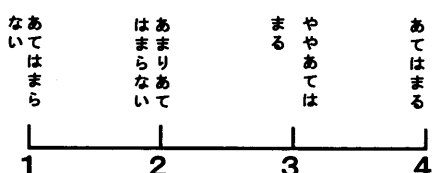
1 仕方なく自傷行動をやめる



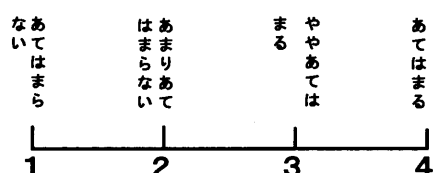
2 納得した上で自傷行動をやめる



3 一度自傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

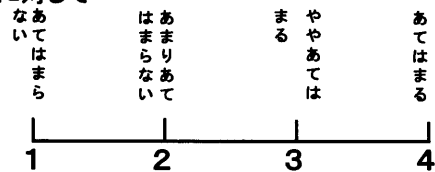


4 その他()

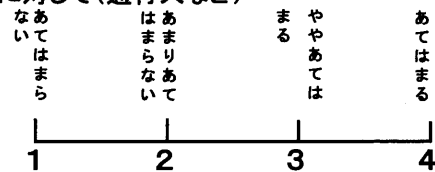


B 自閉症児の気になる他傷行動(例、「友達に噛みつく」など)

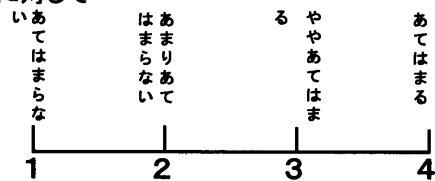
1 友達に対して



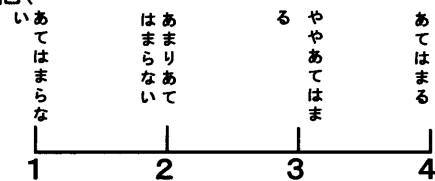
2 他人に対して(通行人など)



3 先生に対して

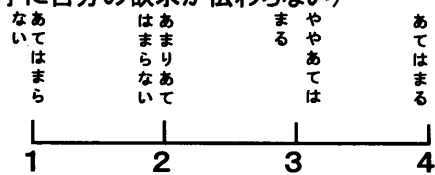


4 その他()

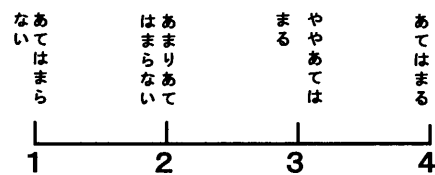


B-1 他傷行動が起こる直前の行動の変化について

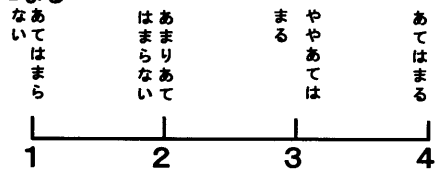
1 他人が関係していることについてイライラする
(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



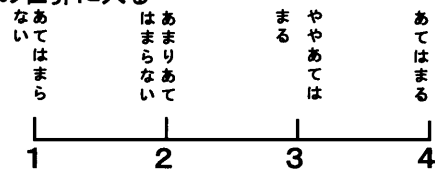
2 注目されたい



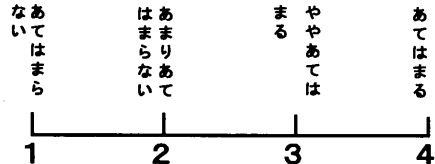
3 不安になる



4 自分の世界に入る

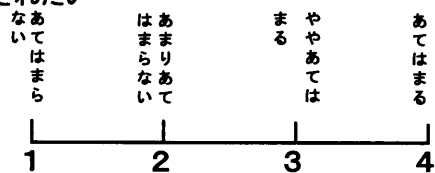


5 その他()

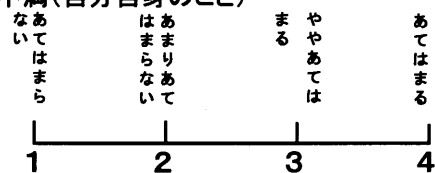


B-2 これらの他傷行動が起こる原因は何だと思いますか

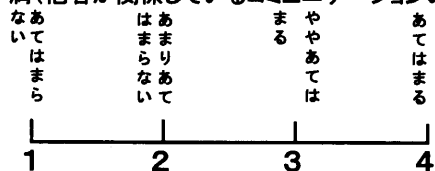
1 注目されたい



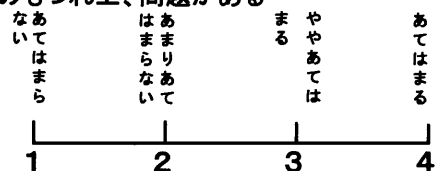
2 欲求不満(自分自身のこと)



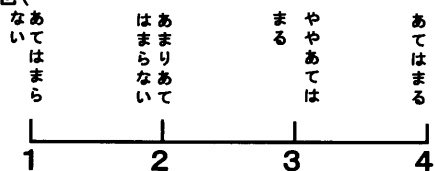
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

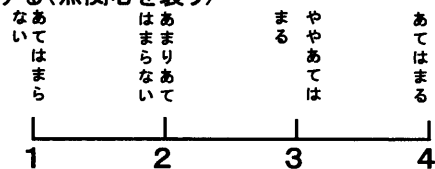


5 その他()

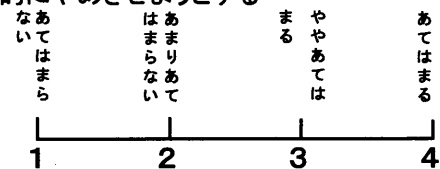


B-3 他傷行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

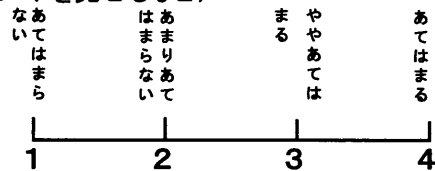
1 無視する(無関心を装う)



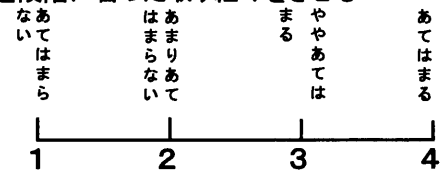
2 強制的にやめさせようとする



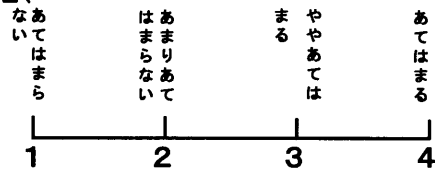
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

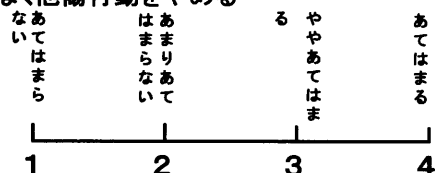


5 その他()

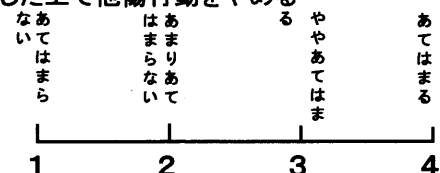


B-4 対応後の行動

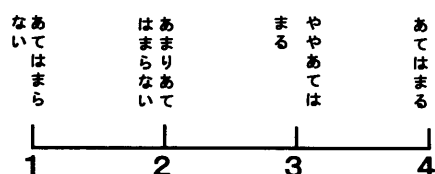
1 仕方なく他傷行動をやめる



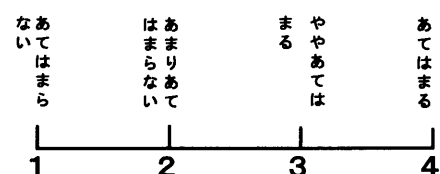
2 納得した上で他傷行動をやめる



3 一度他傷行動をやめるが、しばらくすると再発する

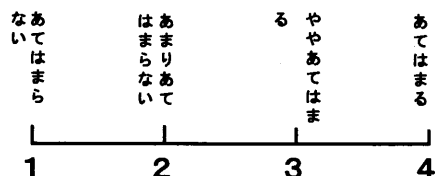


4 その他()

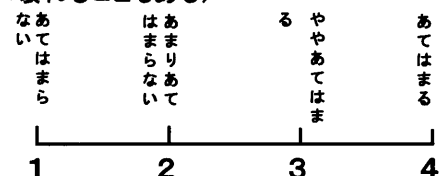


C 自閉症児の気になる破壊行動(例、「食器を割る」など)

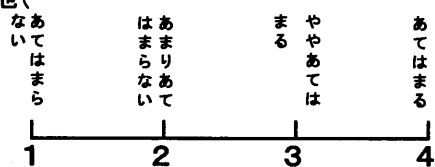
1 壊すことを目的とする



2 壊すことを目的としない(投げたり落としたりすることで、結果的に壊れることもある)



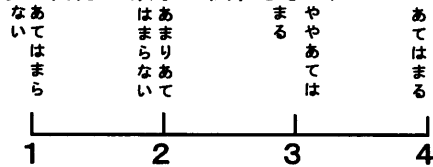
3 その他()



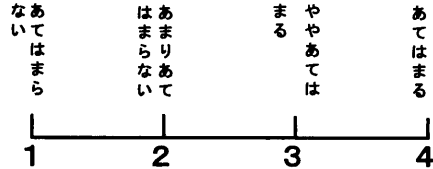
C-1 破壊行動が起こる直前の行動の変化について

1 他人が関係していることについてイライラする

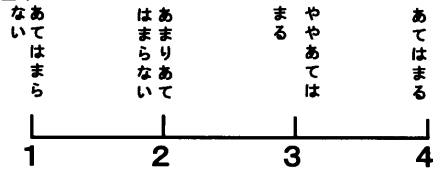
(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



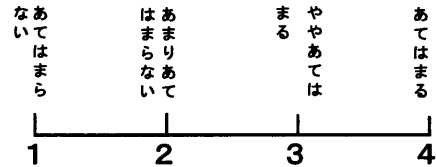
3 不安になる



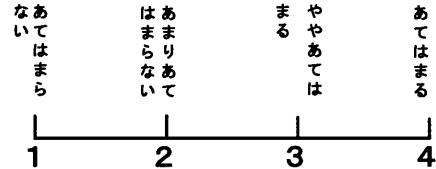
5 その他()



2 注目されたい

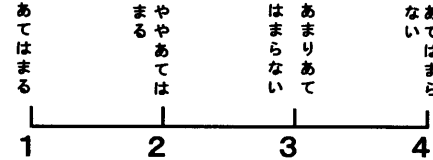


4 自分の世界に入る

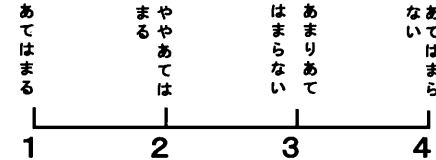


C-2 これらの破壊行動が起こる原因は何だと思いますか

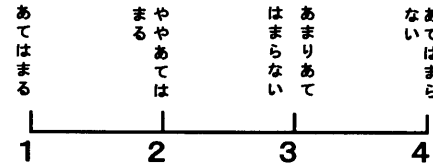
1 注目されたい



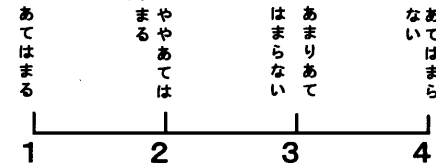
2 欲求不満(自分自身のこと)



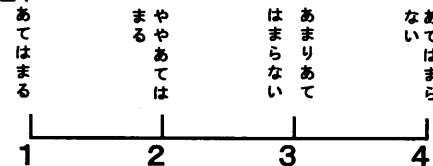
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

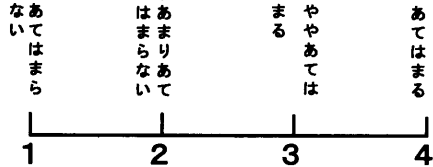


5 その他()

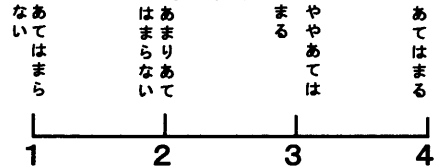


C-3 破壊行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

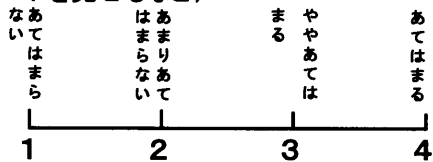
1 無視する(無関心を装う)



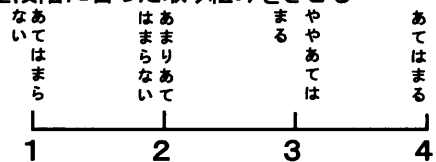
2 強制的にやめさせようとする



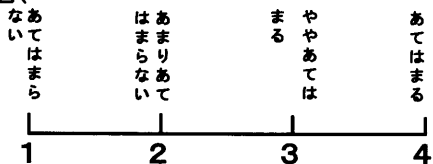
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

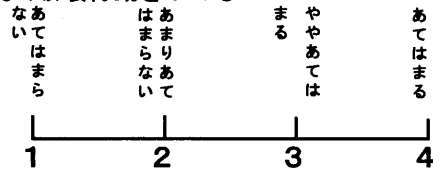


5 その他()

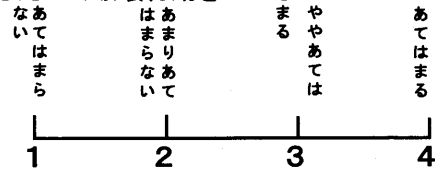


C-4 対応後の行動

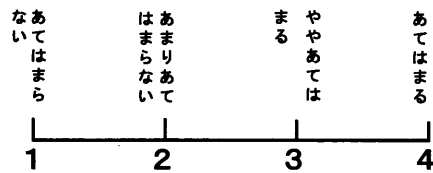
1 仕方なく破壊行動をやめる



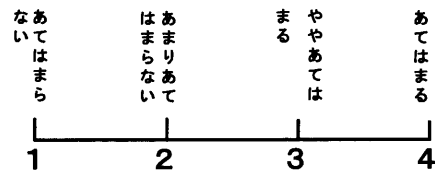
2 納得した上で破壊行動をやめる



3 一度、破壊行動をやめるが、しばらくすると再発する

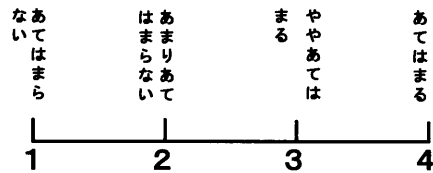


4 その他()

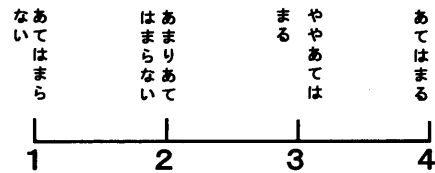


D、自閉症児の気になる挑発行動(他の人の怒りを引き出すことを明らかな目的として、執拗になされる行動。例:他人の腕をつねり、相手が怒るのを楽しんでいる様子を見せる。)

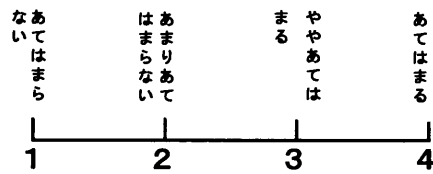
1 いたずらの行動(他の人の反応をうかがいながら奇声をあげる・性器を見せる・唾や尿や便で遊ぶ、など)



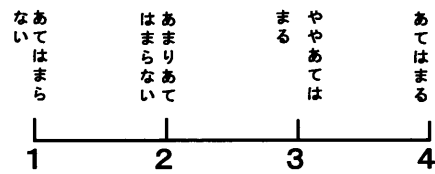
2 嫌がらせ的行動(「死ぬ」など嫌がることをわざと言う・しつこく触りにくる・忙しく働いてる時にわざと無意味な質問を繰り返す、など)



3 意図的な攻撃行動(他の人の反応をうかがいながら自傷する・人をつねる・物を投げる・物を壊す・髪の毛を引っ張る・叩く、など)

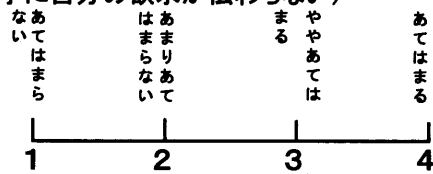


4 その他()

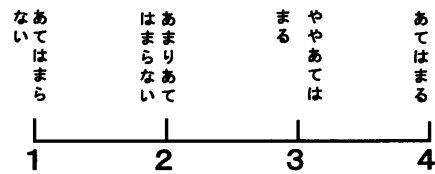


D-1 挑発行動が起こる直前の行動の変化について

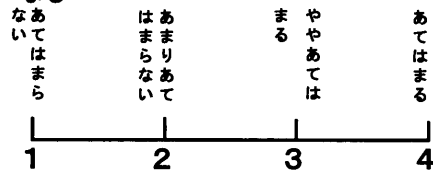
1 他人が関係していることについてイライラする(例:相手に自分の欲求が伝わらない)



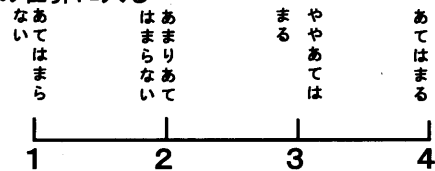
2 注目されたい



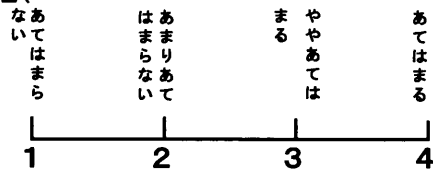
3 不安になる



4 自分の世界に入る

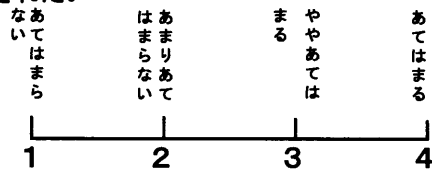


5 その他()

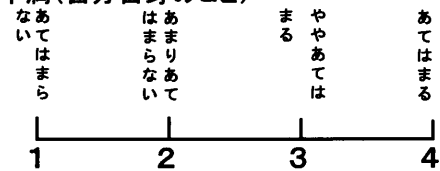


D-2 これらの挑発行動が起こる原因は何だと思いますか

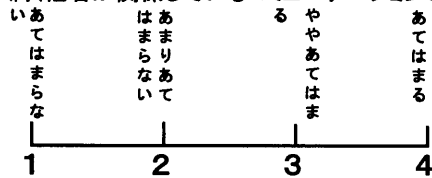
1 注目されたい



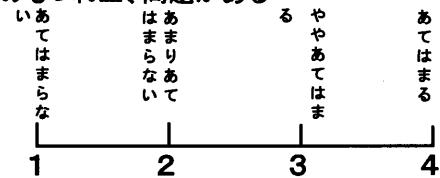
2 欲求不満(自分自身のこと)



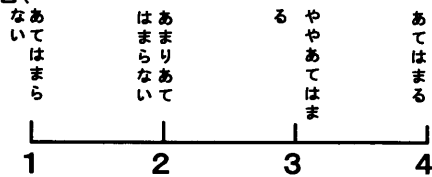
3 欲求不満(他者が関係しているコミュニケーションの問題)



4 発達のもつれ上、問題がある

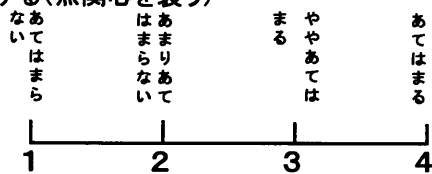


5 その他()

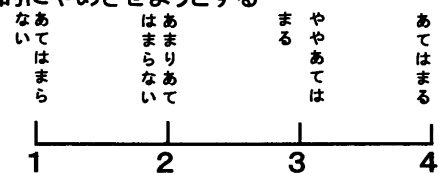


D-3 挑発行動が出現した場合、どのような対応を取りますか

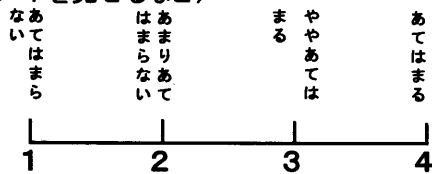
1 無視する(無関心を装う)



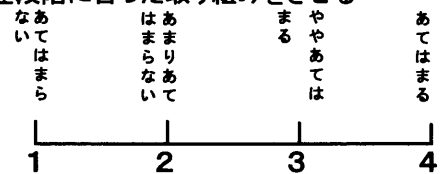
2 強制的にやめさせようとする



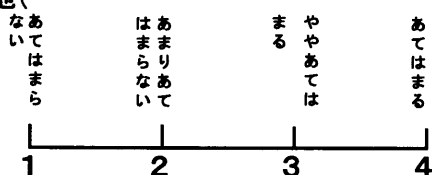
3 見通しをたてる(環境を変える、スケジュール帳やカードを見せるなど)



4 一旦やめさせるが、その後放っておくのではなく、その子の発達段階に合った取り組みをさせる

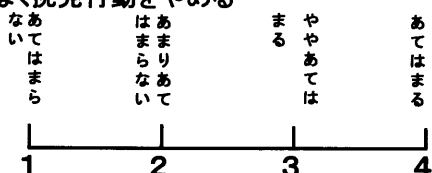


5 その他()

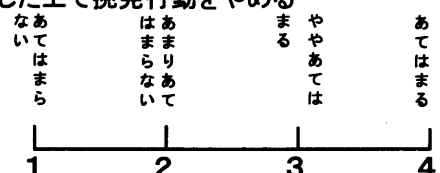


D-4 対応後の行動

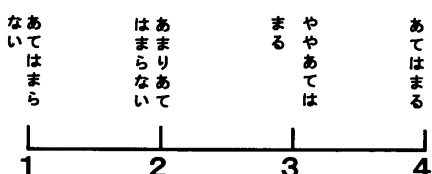
1 仕方なく挑発行動をやめる



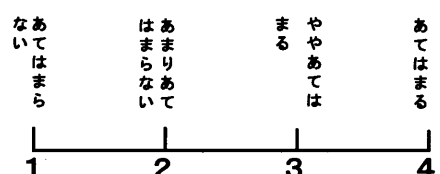
2 納得した上で挑発行動をやめる



3 一度、挑発行動をやめるが、しばらくすると再発する



4 その他()



Ⅱ、日常生活、学校生活の中で自閉症児の問題行動に対し感じている悩みを書いてください。

Ⅲ、自閉症児の問題行動を軽減させるために大切なことは何だと思いますか。考えを自由に書いてください。

Ⅳ、自閉症児の問題行動の中に成長・発達を感じることはありますか。また、それはどのような時ですか。エピソード等もあれば書いてください。

Ⅴ、自閉症児の問題行動について、家庭で行ってほしいと思うことは何ですか。

ご協力ありがとうございました。